



明日への雄弁

イヴォ・ラペンナー博士著
小島輝久 訳

(上)

RETORIKO

**KUN APARTA KONSIDERO AL ESPERANTLINGVA
PAROLARTO**

**Verkita en la Internacia Lingvo
de
D-ro Ivo Lapenna**



FOTO KEHLET
Kopenhago

Bejovment Ly

Kopirajto

**Reprodukto, ekstrakto aŭ traduko en kiun ajn lingvon nur
kun la permeso de la aŭtoro**

© Ivo Lapenna 1974

著者：イヴォ・ラベンナー

1909年ユーゴスラビアのスプリットに生まれる。

ザグレブ大学法学博士、米国フォート・ローダーデル大学国際法学博士。

ザグレブ大学で以前、国際法と国際関係の教授であったが、現在はロンドン大学でソビエトと東ヨーロッパについての比較法学に関する教授である。

1946年、彼は国際法学者として、ユーゴスラビアの政府代表団に選出され、パリの平和会議に参加した。1947年から1948年の間、彼はハーグにある国際司法裁判所である世界の最高法廷で、国家のために弁護の弁論をなしている。この功績により、1948年にユーゴスラビア科学アカデミーの名誉会員に選出された。

1938年より国際エスペラント連盟の幹部役員であり、1947年よりUEA（世界エスペラント協会）に統合されてからもその役員、1955年～1964年、UEAの書記長、1964年～1974年、UEAの会長であり、1974年までCEDの監査役であると共に創始者でもある。

彼の著書で代表的なものを挙げると

フランス語：Conceptions sovietiques de droit international public

英語：State and Law ; Soviet and Yugoslav Theory

英語：Soviet Penal Policy

国際語：Retoriko

・Aktualaj problemoj de la nuntempa internacia vivo (1952)

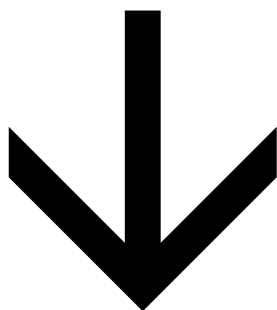
：La internacia vivo (1954)

：Elektitaj paroladoj kaj prelegoj (1966)

：Por la pri efika informado (1974)

：Esperanto en Perspektivo; faktoj kaj analizoj pri la internacia lingvo. (1974)

といった書があるが、その他にもドイツ語、イタリア語、クロアチア語で書かれた多くの書がある。



目次

国連への提案……………一三

- 1、発端 15
- 2、大衆支持 16
- 3、国連事務局への提出 22
- 4、国連と国連加盟国への覚書 26
- 5、実現への道 32
- 6、諮問機関としての活動 36
- 7、国連大学いよいよ実現 41

この書によせて……………四八

第一章

イントロダクション……………五二

第一部 言語

第二章

言語の起り……………五七

- 1、暗闇の中で 58
- 2、科学分析の起り 65
- 3、モノケネーズかポリケネーズか 73
- 4、言語形成に関する諸々の見解 84
- 5、多様化した言語から統一言語へ 107
- 6、人類学は何を言わんとしているのであろうか 119

第三章

社会現象としての言語……………一三六

- 1、自然主義的—生物学的概念について 137
- 2 言語と社会 141

第四章

3、自然と社会環境 149

言語の発展をうながす要因……………一五八

1、分裂をもたらす要因 159

(a)、地理的要因 159

(b)、経済・社会要因 163

(1)、カースト及び階級要因 163

(2)、職業上の要因 166

(3)、性的要因 170

(4)、宗教的要因 172

2、統一をもたらす要因 175

(a)、経済・社会要因 175

(1)、労働の分割 175

(2)、平等思想 176

第五章

- (b)、技術上の要因 177
- (c)、文明的要因 178
- 3、個人かそれとも集団か 182

偉大なる共通語の形成……………一九一

- 1、ギリシャ語 192
- 2、ラテン語 195
- 3、もう少しの実例を 199

第六章

国際語……………二〇七

- 1、形成 209
- 2、国際性 211
- 3、社会的推進者 214

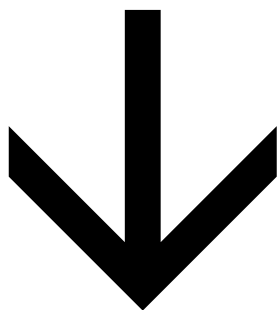
第七章

4、統一性	217
5、勢力	221

言語と思考……………	二二七
------------	-----

訳者あとがき……………	二三九
-------------	-----

国連への提案



1、発端

国際関係に於ける共通語の問題について、特に国際語エスペラントについて、多くの国際的政府及び非政府機関は、幾度かに渡って、まじめな審議を行って来た。その中でも次に掲げる三つは、特別注目に価するものである。その一つは一九二〇年から一九二五年の間、国際連盟に於いてなされた討議であり、その二つは一九五〇年に国際連合に対してなされた、国連への請願である。それは後にパリのユネスコ本部へ譲渡され、審議が続けられたが一九五四年、モンテビデオでの第八回総会は、「エスペラントが国際的交流の分野で、各国民の接近のために果した成果は、ユネスコがめざしている、すなわち諸国民間のよりよき相互理解をもって平和を守ることに、文化と教育の普及、思想、知識、人の交流、教育、科学、文化面に於ける国際協力、言語の相違がつくる困難の克服、世界文明への教育の推進、翻訳による古典および現代著作の世界化、技術用語の標準化、記述や談話による思想の自由な普及を容易ならしめた等、ユネスコの目的と理想に合致するものである。」という決議案を採択した。最後の一つは、一九六六年十月、ニューヨークの国連事務局に対して提出された国連への提案である。

国連総会は一九六二年十二月十九日、国連創設二〇周年を祝って、一九六五年を国際協調年となす宣言を行った。世界エスペラント協会（UEA）は、国連事務局から「国際協調年に際

してなされる、国連の諸活動の実現に寄与してもらいたい。」という招待を受けた。後に、ユネスコ本部からも招待を受けている。UEAは直ちに準備作業に取りかかった。一九六四年八月、ハーグで開催された世界エスペラント大会の席上、協議委員会はそのため運動方針を決め、言語問題の解決を織り込んだ決議案を採択している。決議案は国連事務総長宛に送附されたが、八月二十一日の返事をもって、受理された事が確認された。運動は一九六五年から一九六六年の間、引き続き世界的な規模で展開されていった。

2、大衆支持

国際協調年に際して行なわれた国連への提案は、最終的に次の文章によってなされた。

国際間の緊張の解消と世界平和の強化を、うながす目的をもって、民族間の協調を進展させるという国連の努力に大いなる支持を与える。言語の多様性は、あらゆるレベルでの国際協力の発展を阻害し、国際協力の強化への最も重要な障害の一つとなっているという事を深く憂慮している。一九五四年十二月十日、ユネスコ総会は「国際間の知的交流の分野でエスペラントが果した今日までの成果や世界の民衆の交友のために果したエスペラントの役割」を明記した決議案を、採択している事は既に御承知の通りである。

我々はここに、国連が中立的国際語エスペラントの普及に現実的、且つ効果的な助成をなすことによつて、言語問題を解決されるよう提案する。

あわせて、民衆の国際関係に於けるエスペラントの活用を奨励し、エスペラントの教育を發展させる事を各国政府に勧告されん事を、ここに提案する。

UEAは提案内容を折り込んだ、エスペラントと国連の五つの公用語の内の三ヶ国語、即ち英語、フランス語、スペイン語で書かれた小冊子そしてエスペラントのみで書かれた文面とその他の国語を印刷出来るだけの余白を設けた小冊子をあわせて二十万五千部発行した。

このようにしてこの提案は、まもなくドイツ語、日本語、ロシア語、オランダ語、イタリヤ語、スウェーデン語、デンマーク語、ギリシヤ語、ハンガリア語、セルバ・クロアチア語、そしてその他にも多くの言語で書かれた小冊子が各国で発行されていった。

総ての小冊子は、名前、職業、住所が細かく書き込めるようになっていて、二十一名の署名がなせるだけの余白をもつたものと、団体名、運動の目的、メンバーの数が明記出来るようになった団体署名用の余白をもつたものから出来上つていた。

一九六七年一月二十五日の時点での累計によると、世界七十四ヶ国から届けられた、九二五、〇三四名の個人署名と七二、八九二、〇〇〇名の会員を有する三、八四六の団体署名を得る事に成功した。

種々のカテゴリーに區別けた個人署名者の数は次のようになってゐる。

一四名の大統領、首相そして政府の大臣、一、三五九名の国会議員、一、〇〇八名の言語学者と文献学者、六、九六三名の科学アカデミー会員、学術協会の会員、学術研究センターの会員、大学教授、大学の講師、助教授、五二、三六三名の高等学校、専門高等学校、中学校、小学校の教師、六、九〇二名の作家、芸術家、ジャーナリスト、五九、三九八名の医師、弁護士、貿易業者、技術者、*etc.*、二七六、三三八名の研究生、学生、二七三、一九二名の会社、官庁等の事務員、サラリーマン、二七、五四六名の農民、農業労働者、五九、二七三名の家庭の主婦、六〇、五七八名のその他の職業に従事する人達、合計して九二五、〇三四名。

個人署名者達の中には次の人達が居る。

オーストリア連邦共和国の大統領、フランス・ジョナス (*Franz Jonas*)

ブルガリア国民議会の最高会議常任幹部会副議長、ゲオルギー・クリシエフ (*Georgij Kulisev*)
ハンガリー人民共和国最高幹部会議員であり、アカデミー会員でもあるギュラー・オートトイ博士 (*Prof. Dro Gyula Ortutay*)

ハンガリー人民共和国最高幹部会議員、ハンガリージャーナリスト協会会長、ヨーロッパ・

フットボール協会 (*UEFA*) の副会長でもあるサンダー・バークス (*Sándor Barcs*)

ヨーロッパ議会の議長、ヴィクター・レマンズ (*Victor Leemans*)

ヨーロッパ議会の副議長、ジャッキーズ・ベンドロックス (Jacques Vendroux)

ヨーロッパ議会副議長、ハンス・フアラール博士 (Prof. D-ro Hans Furler)

ベルギー王国議会の首相、アシール・ウアンアツカー (Achille. Van Acker)

フランス共和国上院副議長、アンドレー・メリック (André Méric)

韓国議会副大統領、キングスーン・チャング (Kyoungsoon chang)

ウルグワイ東方共和国議会の副大統領、アルベルト・ロセリイ (Alberto M. Rosselli)

デンマーク王国首相、クラグ (J. O. Krag)

アイスランド共和国首相、ビヤルニー・ベネディクスン (Bjarni Benediktsson)

ノルウェー王国首相、パー・ボーテン (Per Borten)

フランス共和国の前首相、ゲアイ・モーレット (Guy Mollet)

オランダ王国前首相、ドレース博士 (D-ro W. Drees)

ヨーロッパ経済共同体の委員会議長、ワルター・ハルステイン教授

(Prof. Walter Hallstein)

フランス民主連合とフランス社会主義政党の党主、フランソア・ミッテラン

(François Mitterrand)

日本民主社会党中央執行委員長、西尾末広、

チェコフロバキヤ科学アカデミー会員でありノーベル賞受賞者、ヤロスブ・ハイロブスキー

(Jaroslav Heyrovsky)

日本のノーベル物理学賞受賞者、湯川秀樹教授

フィンランド共和国アカデミー会員、パアボ、ラビア教授 (Prof. Paavo Ravila)

フランスアカデミー会員、ジャン・ロスタンド (Jean Rostand)

モンゴル人民共和国の科学アカデミー会員、リンチェン博士 (Prof. D-ro Rinčen)

アメリカ合衆国の作家、アプトン・シンクレア (Upton. Sinclair)

ブルガリア正統教会の総大司教、ギリル (Kiril)

ウルグワイ東方共和国、モンテビデオの大司教、カルディナーロ・バルビエリー

(Kardinalo Barbieri)

(もちろん、ここで述べた署名者の職務は彼等が提案に署名した時点でのものである。)

署名をもって提案を支持した団体の中の幾つかを、下記に示す。(かっこの中の数字は、団体に加盟している会員の数を示している。)

毛織物労働者キリスト教労働組合同際連盟 (IFCSTV) ベルギー (460,000)

国際教育者職業事務局 (IPSI) ベルギー (286,000)

食堂ホテル産業労働者国際連合 (IUNHI) ブルガリア (12,000,000)

鉄道者芸術的団体内国際連盟 (IFAISF) フランス (500,000)

人類愛善会 (UHA) 日本 (300,000)

動物愛護世界連盟 (MFPPB) ベルギー (1,500,000)

自然愛好者国際同盟 (IN) スイス (300,000)

ドイツ社会民主党 (SPD) 西ドイツ (700,000)

マケドニア労働社会主義連合 (SULM) ユーゴスラビア (620,000)

労働党 (PL) オランダ (150,000)

オーストリア鉄道労働組合 (SFA) オーストリア (120,000)

フォース・オブリエル労働組合 (GSFO) フランス (1,000,000)

金属産業労働組合 (ISM) 西ドイツ (2,000,000)

ウルグワイ教育者連盟、ウルグワイ (6,000)

ユーゴスラビア児童教育機構 (ULEIJ) (400,000)

宗教団体、大本、日本 (275,000)

メキシコ共和国青年労働者 (LFJOMR) メキシコ (200,000)

デンマーク・スポーツ連合 (PSU) デンマーク (1,000,000)

フランス、ツーリストクラブ (TCF) フランス (500,000)

アルゼンチン電気協同組合連盟 (AFEC) アルゼンチン (530,000)……………。

3、国連事務局への提出

ニューヨークの国連事務局への提案の提出に先だつて、かなりの膨大な準備作業が必要であった。それ等は特別覚書の作成、覚書の四ヶ国語への翻訳であり、添付されるドキュメントの整理、主な署名者のコピー作成、個人及び団体署名者の最終的統計作業、各国のU E Aの代表機関とニューヨークにあるエスペラント・インフォメーションセンターとの間の作業の調整、報道関係者へのメツセージと情報の整理であつた。

提案に関する全資料は、個人署名と団体署名に分けて、総てのそれぞれの署名がすぐにも取り出して見られるように、ロッテルダムにあるU E Aのオフィス・センターで分類され整理された。

国連事務局は資料が膨大なものであるところから、十二のカテゴリーに分類された総ての署名者の詳細な一覧簿、それに著名な人達の個人署名と最も重要な団体の特別なりリストを有する提案を受け取りたいという意向を表明した。

総ての署名者達の名に於いて、U E Aの代表団は、一九六六年十月六日、国連事務局へ提案を提出した。

代表団は次の七名から構成されていた。

UEAの会長、イヴォ・ラペナー博士 (Prof. D-ro Ivo Lapenna)、ロッテルダムにあるUEAの中央事務局理事、マリアンヌ・ヴェルマス女史 (Marianne Vermaas)、デンマーク外務省秘書官であり、ロンドンの調査、資料センター (CED) の役員でもあるエスキル・スヴァンネ (Eskil Svane)、北アメリカ、エスペラント連盟会長、フランシス・E・ヘルムス技師 (ing. Francis E. Helmuch)、国際労働機構 (ILO) の役員であり、合衆国労働教育委員会の役員でもあった労働教育に関する専門家、そしてニューヨーク・エスペラント情報センターの会長でもあるマーク・スタール (Mark Starr)、ニューヨーク教育省の外国語諮問委員会のメンバーであり、ニューヨーク・エスペラント会の会長でもあるジョン・レエウイン (John Lewine)、国連事務局トランスレイションサービスの通訳者であり、国連事務局エスペラントクラブの会長であり、UEAの青年部の代表でもあるアレクサンダー・スチュアート (Alexander Schwartz)。

代表団の構成は、各国のUEAの代表団から、国連事務局のエスペラントクラブでまでといったUEAの幅広い組織のあらゆる階層を反映していた。

国連副事務総長 C. V. ナラシマン (Chakravarti V. Narasimhan) と国連事務総長 ウ・タント (U Thant) は代表団を受け入れた。

代表団を代表してラペンナー博士が口頭で、国際協調年に際して行つたU E Aの貢献と世界の言語情勢、提案の本質的な目的を説明した。同時にナラシマン氏に次の資料が手渡された。

最も著名な人達の署名と最も重要な団体の署名約一、五〇〇を網羅した三〇〇枚のフォート・コピーを上質のなめし皮で閉じた二冊の大きな文書、総ての個人署名者と団体署名を網羅したリスト、十月の始めまでに集められた総ての署名者についての統計文書、英語、フランス語、スペイン語、ロシア語そしてエスペラントで印刷された提案内容を折り込んだ覚書、国際協調年に対するU E Aの運動方針、国際協調年へのエスペラント運動の貢献についての報告、一九五八年—一九六三年と、一九六四年—一九六五年の間に於ける、U E Aとユネスコとの間の関係についての報告、一九六六年六月、グラーツでの第二回教育者会議で採択された国際理解と協調をうながす教育についての決議案が掲載されているCED I/VII/4. I/VII/5. C/III/9. C/III/10のドキュメント。

覚書には国際関係に於ける言語問題、CED A/II/Iのドキュメントと国際語エスペラントについての基本的事実、CED/7 学校教育に於けるエスペラント学習の教育的価値、B/1/2 がつけ加えられており、これ等の総ては、英語、フランス語、スペイン語で、あるいは英語のみで印刷されてあつた。

代表団はU E Aの東洋と西洋シリーズの中で刊行されたR・タゴールの作品「餓えた石」を



ニューヨーク・国連事務局・1966年10月6日

イヴォ・ラベンナー博士(写真中央)は 国連副事務総長 C・V・ナラシマン(写真左)に国連への提案を手渡した。右側に立っているのは マリアンヌ・ヴェルマス女子氏奥に立っているのはマーク・スタール氏である。

ナラシマン氏個人に寄贈した。更に代表団は「ダンテの神曲」とM・ボルトンの著したエスペラントの創始者―ザメンホフ、ザメンホフ年の記念贈書、の三冊二組を手渡した。三冊の一組はナラシマン氏へのものであり、他の一組はウ・タント事務総長へのものであった。

代表団を代表して、ラペンナー博士は、これは私的創意の上に立って、今まで国際機関に対して提出されたいかなる提案の中でも、最も膨大で、最も注目すべき提案であるといつて、副事務総長の注意を喚起し、国連がこの提案を細心の注意をもって検討されるようという希望を表明した。

副事務総長は言語問題の重要性について同意し、報道機関に対して簡潔なコミュニケーションを公表する事を約束し、もし可能であれば国連総会の会期中に、各国政府の代表者達に、提案の提出についての報告をしましうという約束をした。

実際に、国連事務局は報道機関に対し情報を公表し、その情報は各種の新聞、雑誌に掲載された。しかし事務局は提案の提出について、各国政府の代表者達には報告しなかった。

提出と同じ日、即ち十月六日、ロッテルダムにあるUEAのオイス・センターは、ハーグ、ロンドン、パリ、ブリッセル、ボンにある各国大使館を通して、総ての国連加盟国に、英語、フランス語、オランダ語、ドイツ語でもって書かれた手紙を添えた覚書を送付した。この

ようにして、U E A は国連憲章に法り、国連総会の内規に則った行動をなした。これは国連事務局が、事務局のそれぞれの機関がなすことの出来る又なさねばならない事であったのである。

4、国連と国連加盟国への覚書

前のセクションで述べた覚書は、国連と国連加盟国へ提出された。このために、世界エスペラント協会は、幾つかの基本的な事実を紹介し、署名者達の要望を代弁する事と相まって、提案と世界の言語問題に関連する自己の立脚点を明確に表現する事を目ざしていた。現実性を有する内容からして、覚書は特別な考慮を払うだけの価値あるものである。

覚書は六つの短かなパーツから成り立っている。最初のパーツは、国際協調年への U E A の貢献に関するものと、この章の前のセクションで既に紹介した提案についての幾つかの技術的な説明に関するものであった。

第3のパーツでは、言語問題の真髓が論じられている。それは次の文章でもってなされた。

巨大な技術的進歩と世界のあらゆる関係での相互依存をもたらした現代に於いて、国際的接触は、少数の人達の特権ではなくなり、幅広い民衆の権利となって来ている。言語の多様

性は、少数の人達の単なるやつかい者から、総ての人達のための重要な国際問題へと変貌して来ている。こういつた状況の中で、言語の障壁は、一般の人達の個人的な関係を含めたあらゆる分野に於ける、目的に叶った国際的なコムニケーションの主たる障害物と見なされている。それは従つて科学の研究の成果の十分な活用をとか、文化交流の拡大を、国際理解のより大きな発展を妨げたり、時には不可能とさえしている。

諸々の外国語の教育は—この目的に対して捧げられた膨大な精神的労働、時間、そして物質的手段にもかかわらず—非常に慎ましい結果しか与えられなかつた（通常受動的な言語知識さえも）そしてあらゆる場合に、その全体の中で、即ち世界的な枠内での現在の国際生活の総ての面で増進して来ている言語問題をどのようにしても解決する事に成功しなかつた。公用語と作業言語のシステムは、—常に多くなつて行き、止まる事を知らない—各種の政府や非政府国際機関に於いて、それぞれの機関の限定された必要性を満たすための問題を満足に解決さえしていないどころか、強国と弱小国といったあらゆる国家の平等の原則に反している。従つて提案にそつた中立国際語（エスペラント）の採用は、宇宙時代に於ける現代人の必要性に答えるものであり、それは純粹に、技術上の、社会的な、心理学上の、政治上の、そして経済上の言語といった総てのそれ等が有する能力に於いて、この問題の理性的で、公正なそしてラジカルな解決を提供するものである。現在の国際関係に於ける言語問題についての情報はBの下に附加されたドキュメントA/II/Iの中にある。

第4のパートには、エスペラントについての基本的な事実が紹介されてある。

このパートを覚書（CED/7）に附加されたCEDのもう一つのドキュメントが支えている。それは言語の形成、構造、文学そしてその主たる応用についての事実を内含している。ドキュメントは英語、フランス語、スペイン語で出版されたが、後にそれは多くの他の言語でも出版された。一九七三年の四月までに、エスペラントでは合計して十七版を重ね、他の十二ヶ国語で数万部が発行された。

第5のパートは国語とエスペラントに関するものであり、次の文章でなされた。

中立語エスペラントでもって、世界の言語問題を解決しようという提案は、決して外国語の知識を軽視しようとするものではなく、それはどういった意味に於いても、自由意志からなすそれ等の言語の学習に背を向けるものでもない。国際関係に於ける国際語の普及は、総ての国が自己の地政学的な位置や自己の具体的な必要性によって、自己の選択に於いて自分達の学校で、それぞれの外国語に特別な注目を捧げ、言語に対する特別の才能を有する人達に、どういった外国語であれ、任意にそれを習得する事を可能ならしめるといふ事を妨げるものではない。この事に関して、一九六四年にCED（調査、資料センター）が行ったアンケートが明確にしているように、エスペラントの知識は外国語の学習を助け

るものである。アンケートは学校に於けるエスペラントの文化的、教育的価値を確立する事を目ざしたものであった。国際語の学習は、外国語の学習よりもより多くの満足すべき結果をもたらし、更にエスペラントの学習は、a、自分達固有の国語のよりよい理解をうながし、b、外国語の学習を容易にさせ、c、特に地理や歴史といった多くの他の教育科目のより効果的な学習に貢献するものであり、d、国際理解をうながすといった形の教育に対しても大きな価値を有するものであるという事をそれは示している。この結論のアンケートや分析についての詳細はDの下に附加されたドキュメントB/1/2の中にある。この問題のより幅広いアンケートやより深い研究は、国連やその賛助のもとで企画される事が出来るであろう。学校へのエスペラントの導入は、教育プログラムの負担増加を意味しないだけではなく、反対に言語学習に対する才能や意欲を實際に持っている人達のための外国語の学習を含めた総ての人達に対するさし迫って必要な、他の科目の幅広い学習に振り向ける時間とエネルギーを作り出す事を可能とするものである。

覚書は次の文章をもって締め括られている。

総ての署名者達とUEA自身の名に於いて、提案に重大性を与えるための必要な歩みを企画されん事を、国連事務局にお願いすると同時に、その累進的な実現を支持されん事を

国連加盟各国政府にお願いする。U E A は言語問題のどういった形成をも明らかにする事の出来る。そして国際語が提供する解決のどういった局面をも明らかにする事の出来るあらゆる特別の情報を提供する用意のある事を宣言している。最終的な結論をなすよりも前に特別な委員会に於いて、総ての問題を研究する必要があるというのであれば、U E A はその委員会の中に同等の権利を有するメンバーとして、国際語を完全に身につけている言語学、教育学、国際関係、場合によっては、他の分野についての少くとも数人の高度な学識経験者を加えるよう強く主張する。彼等の名前をU E A は、いついかなる時といえども知らせ得るであらう。

提案の意味の中にある——国際機関へかつて提出されたものの中で最も重大な——言語問題のラジカルな、そして明確な解決は、人類の総ての精神文明の歴史の中で最も重要で、最も意義のある実証的なイベントの一つとなるであらうし、国際理解、発展そして平和といったあらゆる分野の上の非常に幅広く、深みのある国際間の協調のための新しい展望を切り開くであらう。あらゆるものに活用されて行き、それはあらゆる個人、あらゆる国家、あらゆる民族のために、人類の一体化のために無限の利益を提供するものである。

一九七四年に於けるU E A の立脚点は、覚え書きを作成した一九六六年と全く同一である。言語問題のより大きな錯綜が生れて来ている今日に於いて、覚書の論証は一九六六年の時点よ

りもより大きな価値をもつものである。

5、実現への道

一九六六年十月七日、報道機関への発表をもって、国連事務局は提案の提出について短かく報じた。提案は各国政府の代表団へ通報されるであろうという提出のセレモニーの間になされた約束を果してもらいたいという十月十日のUEAの代表団への手紙に答えて、C・V・ナラシマン氏は事務総長の代行者として、十月十三日次のような返事を書いて来た。

「熟考の後、それは可能ではないという結論に達した。国際協調年に対する委員会の報告は、六ヶ月前各国政府に配布されている（一九六六年三月三十一日のドキュメント、A/6627）どういった追加事項も委員会によって承認されなければならないというのが国際協調年委員会の報告である。だが実際、委員会はもう存在しない。追加事項として我々が発行する唯一の資料は加盟各国政府 (Membro-Registaro) の解答である。」

手紙の中で、彼は「国際語としてエスペラントを使用する可能性の研究に対するどのような提案も、特定の政府によってもたらされるものでなければならぬだろう。」と主張している。

国連事務総長の手紙は、提案が彼の主張よりももっと他の意味を含んでいるという事実を忘

れているだけでなく、*Registro de Stato-Membro* という代りに、*Membro-Registro* といった誤った言葉を用いているように—それは事務総長としてあってはならない—満足出来ないものを含んでいる。一九六六年十月二十二日、更に C・V・ナラシマン氏に宛て長文の手紙を書いた。その中で、UEAの会長は概略次のように述べている。

提案について加盟各国政府に報告する可能性に関する貴方の手紙の中にある文面を見て、私は非常な驚きと幻滅を隠し得ない。

私の知識によれば、「ポイント二十四」国際協調年委員会の「報告」は国連総会の中でまだ取り扱われていない。だから我々の団体が、国連事務局自身の招待をもって、国際協調年に積極的に参加して来たという事実を特に考慮すれば、この点に関して提案を委員会報告の追加事項とする事を実際何ものも妨げるものではない。他の非政府機関の通常の手紙や決議案は、国連総会に報告されている（一例として一九六六年十月十五日の A/I—NF/II7 を参照するとよい。）という事から見て、私は更に驚いている。我々の場合は単なる手紙や決議案について論じているのではなく、およそ一〇〇万の個人と四、〇〇〇に近い団体によって署名された提案について論じているのである。この提案を—私的な創意の上に立って、国際機関へ今までに提出されたものの中で最も印象的な—国連総会に報知する事の拒絶は、明らかな差別待遇としてより他のなものでもないと理解してもよろ

しいのでありませんか……。

貴方の手紙の最後の部で、貴方は「国際語として 에스ペラント を使用する可能性の研究に對するどのような提案も特定の政府によつてもたらされるものでなければならぬであらう。」と主張している。国連憲章や国連總會の手続規定に鑑みて、總ての提案が国連加盟国政府によつてなされなければならないというふうには私は考えない。なぜなら国連事務局はその事に関して、幅広い能力を持っているからである。だが現時点に於いて、私は事務局が国連總會の日程の中に問題を提起せよなどと言うつもりはない。しかし私は U E A の名に於いてだけではなく、提案の總ての署名者の名に於いて、貴方によつて公式に提起され、貴方によつて受け取られた提案について、国連加盟各国政府に報知されるよう強く主張しなければならぬ。加盟各国が提案の提出についても何も知らなかつたとすれば、加盟各国政府のうちのどこかの国が国連總會の将来の或る会期の日程の中に、この問題の提起を提案する事が出来るのであらうか等という事は余計な事なのでありませんか。

事務総長は十月二十七日付の手紙をもつて答えて来た。彼は自分の考えは変わらない。そして彼は自分の以前の手紙に何もつけ加える考えはないと言つて来た。所が彼は何一つ反論して来なかつた。従つて U E A の会長は更に一九六六年十二月二十日、U E A と国連との関係發展を簡潔に述べた手紙を、事務総長宛に書いた。国際協調年委員会はもう存在しないという主張に關

連して、手紙の中では次のように述べられている。

提案は「国際協調年に際して」なされたとは言え、それは国際協調年委員会に宛てられたものではなく、国連へ提出されたものであるという事を我々は強調したい。提案が国際協調年委員会の報告追加事項として通報されるだろうという示唆は、提出の際になされた貴方自身の意見であり、我々の代表団は国連加盟国に通報するための最善の策というのではないが、可能な道の一つとしてそれを受け入れたのである。

十二月二十日の同じ手紙の中で、I、事務総長は国連総会の手続規定に従って、国連総会のこれから先の会期の内の一つの日程の中に提案を提出すべきである。II、国連事務局はもし事務総長が件案を審議するためにそれを最善の機関だと考えるならば、ユネスコへ提案を譲渡すべきである。III、事務局が提案を公式に受け取ったという事実について、国連事務局は、加盟各国政府へ通報すべきである。その事は加盟各国政府に次の行動を開始する事を可能ならしめる事になるであろう。IV、もし、右に述べた示唆の内のどれも国連事務局にとって受け入れられるものではないとすれば、事務局が提案するどういった解決策でもよいから知らしてもらいたい。という4つの可能な解決策を提案した。

国連事務局総長は十二月二十八日付の手紙をもって次のように通知して来た。

「私のパートナー達と貴方の提言を検討した後に、諸種の提言に答えるであろう。彼等の内の殆んどは現在休暇中である。」

6、 諮問機関としての活動

UEAは各種のイベントに際して、幾つかのスペシャル・プランを受け入れて来た。ユネスコへの請願と結びついたプランに加えて、次のような活動を展開している。

ユネスコの招待によってUEAは、一九五八年十二月十日世界人権宣言十周年記念を祝してその活動に参加した。簡潔なプランが一九五六年の十月に既に出上っていた。

一九五九年三月には、人権と基本的自由についての二四三の講演が各国のエスペラント会とか彼等の主催による講演会でおよそ一九〇、〇〇〇名の人達に対してなされ、エスペラント機関紙の中で一〇八の論文と報道がなされ、各国の報道機関や雑誌の中におよそ一二〇種の論説が各国語でなされ、ラジオを介して九つの講演と人権について国際語で印刷されたユネスコの写真入りポスターが発行された。

一九五八年八月五日、協議委員会は一九五九年のザメンホフ生誕一〇〇周年を祝すための膨

大なる基本行動計画を採択した。

行動計画は十七のポイントから構成されていた。UEAの会長G・カヌート博士 (Prof.

D-ro G. Canuto) 書記長I・ラペンナー博士 (Prof. D-ro Ivo. Lapenna) 、そして副書

記長、N・R・スミス (N. R. Smith) から構成される国際組織委員会 (IOC) が結成され

た。選出の後、直ちに一九五八年八月五日、国際組織委員会は声明書を採択した。その声明書をもつて委員会は、一〇〇周年記念にふさわしい行動を起すために、国際的なあるいは各国の科学、教育、文化、商業及びその他の機関、テレビやラジオ局の役員会、雑誌や新聞の編集部、あらゆる世界的な文化人といったあらゆる国際的な政府機関や私的機関に呼びかけを行った。

声明は世界中くまなく知られていった。まもなく「国際語の父委員会」が結成された。それは科学、文学、芸術やその他の分野の文化人といった世界的に著名な一二四名の人達から構成された。著名人のリストは一九五九年のUEAの機関誌「エスペラント」の一月号と二月号に掲載されている。一九五九年の間、道路や公園から科学者達の会議に至るまでザメンホフの名前がつけられていった。ビヤリストク市への訪問を織り込んだワルシャワでの世界エスペラント大会 (一九五九年) と十二月のザメンホフ生誕祭が詳細に企画されたプラン通りに、ザメンホフ年の二つの頂点を画した。最も傑出したイベントは—計画の中にはっきりとうたわれていたわけではなかったが、熱望して止まぬものであった (特に計画された歩みもたらしたものである) —一九六〇年二月十五日にやって来た。ユネスコ理事会は、ユネスコ執行委員会が第五

十五回総会に於いて、L・L・ザメンホフ博士を人類の最も偉大な人物の一人とする事を宣言したという事を総ての政府と総ての非政府機関へ通報したのである。そしてその時から、各国の中等学校の国語の教科書に「国際語 에스ペラントの父、ザメンホフ博士」という国際語を紹介する文章が数頁に渡って掲載されるようになった。優れた組織、国際的に調和のとれた行動、多くの団体や個人の目的に叶った働きのお陰で、特別基本行動計画の基本的考えや、国際語の創始者への賛美と同時に、彼の作品を世に広く知らせるといふ二つの面をもったザメンホフ年の本質的な目的が非常に満足した形で実現した。一九六〇年、L・L・ザメンホフ博士の生誕一〇〇周年記念に際して、CEDの出版物として発行された「記念書」の中にこれ等に関する全資料が掲載されている。

一九六三年六月、幹部会は世界人権宣言十五周年の祝年に貢献するため、簡潔な行動計画を採択した。計画は六つのポイントから成りたっており、それは世界宣言のエスペラント版の出版、一九五八年の十周年記念を祝して行った行動に準じた論文や講演、そしてその他の催しといったものを取り決めたものであった。この計画もまた完全に実現化されていった。

最も偉大で、最も重要な運動方針の一つが一九六四年に作成された、それは一九六二年十二月十九日の国連総会の決議案にそって実施される一九六五年の国際協調年にUEAが積極的に

参加しようという主旨のものであった。協議委員会は一九六四年に開催されたハーグでの世界大会の席上、最終的な運動方針を採択した。運動方針は第一に国際協調年の主たる目的、即ち民族間の協調の発展、国際理解、緊張の緩和、世界平和の強化に対するU E Aの貢献に関するものであり。第二は国際関係に於ける言語問題を好意的に解決しようという行動の目的にしっかりと結びついた作業に関連するものであり、言語問題の解決なくして完全な相互理解など、想像も出来ないという二つのパーツから構成されていた。ドキュメントは国際的な、国家的なそして専門レベル上でのかなりの数の行動を予見したものであった。それはU E Aの機関誌「エスペラント」一九六五年一月号、一九六五年の年鑑そして更にはエスペラント組織に結集された総ての会員や協力者達に配布された。計画の枠内での特別に重要な活動は国連への提案であった。U E Aと非常に多くの個人会員といった枠内で、世界中の総てのエスペラント団体が参加した。

この巨大なキャンペーンの帰結は、エスペラント運動の歴史の中でも、ひときわ目だつ最も傑出したものであった。計画は各国の新聞、雑誌に掲載されるエスペラントと各国語での論文、一九六五年に開催される東京での第五〇回世界エスペラント大会のプログラム、国際夏季大学と弁論大会のプログラム、エスペラントを正規の科目として教えている学校との文通、録音テープ・サービス、C E Dの大量な資料サービス、国際協調年を記念して発行される記念切手、

国連への提案、国内でのあるいは地域でのエスペラント大会、その他多くのこれに類する行動といった総てあらかじめ予定された行動にそつて、総てのレベルの上で遂行されていった。信頼すべき報告の上になつて作成された統計 (CED I/VII/5) を掲載しているCEDのドキュメントによれば、UEAの活動によつて国際的あるいは国家的なレベル上で少くとも5億の人達が何らかの形で、国際協調年について、あるいは国連の作業のあらゆる面について知らされたと評価している。活動の補側のな効果は膨大なものであつた。あらゆる情報機関を活用した大量の情報を考慮に入れなかつたとしても、提案がおよそ一〇〇万の個人と七、三〇〇万の会員を有する四、〇〇〇に近い団体によつて正式に署名されたという事実だけで、期待した効果を十分に凌ぐものであつた。

ユネスコの招待にそつて、一九六六年簡潔な行動計画が一九六八年の人権の年を祝すために採択された。特に取りあげられた点は、国家的なあるいは国際的なレベルでの言語の差別待遇についての調査と資料の作成であつた。一九六八年、マドリッドで開催される世界大会で、人権と基本的自由の討議が十分な時間をかけて論議されるようにという計画が練り上げられた。もう一つの点はエスペラントでの世界人権宣言の第二版の発行と、国際語で印刷された記念切手が発行される事であつた。そしてそれ等の総ては実現された。

特に重要な事は、マドリッドの世界大会でなされた人権についての講演と各種の論文であつ

た。近代的大量虐殺と人権という論文が一九六六年のUEAの機関誌エスペラント十二月号に発表され、後に各国語に翻訳され、幾つかの重要な専門的機関誌に発表された。

一九六九年七月には、一九七〇年のためにユネスコによって創案された国際教育年のための行動計画が練り上げられた。七月末にそれはユネスコ理事会へ通報されている。その重要な点は、各国に於ける教育問題についての資料作成と学校でのエスペラント教育の普及についての国際会議、教育問題についての展覧会、国際教育年というシンボルマークの活用といった外国語の教育とエスペラントの教育に関するものであった。国際教育年一九七〇(International Education Year 1970) というユネスコの機関誌の中にUEAのプログラムが殆んど完全な形で掲載された。エスペラント教育者国際連盟とUEAの青年部がこの行動に積極的に参加した。UEAは年鑑一九七一年第二巻の中で発表された幹部会報告の中に見られる特別計画にそつた課題を成功裡に遂行した。

7、国連大学いよいよ実現

一九六九年九月、ウ・タント国連事務総長が国連大学設置を提唱、一九七〇年五月、日本が国連大学構想試案を国連に提出、一九七〇年六月、国連事務局が国連大学構想案(国連大学に

関する可能性の研究草案)をまとめる。一九七〇年七月、国連経済社会理事会で、日本代表が「国連大学に関心がある」と発言、非公式な誘致声明を行う。一九七二年四月、国連大学専門委員会が設立推進の結論を出す。

一九七二年九月、国連経済社会理事会が国連総会に国連大学設立を勧告。英、米、仏、ソなどが反対。一九七二年十二月、国連第二委員会が国連大学創設決議案を可決。米、中国等が賛成。一九七二年十二月、国連総会で国連大学創設を決議。賛成一〇一、反対七、棄権四、一九七三年七月、国連大学憲章まとまる。一九七三年十一月、国連大学本部の日本設置決まる。

国連大学いよいよ実現——本部は都内の公算、十二月本決まり、仮事務所急ぐ——

我が国が初の本格的な国際機関として誘致に努力を傾けて来た国連大学の本部設置について、ワルトハイム国連事務総長が日本を名指して国連総会に推薦の手続きをとることになったことで、実現がほぼ確実視され、文部省などの準備に拍車がかけられている。すでにユネスコ国内委員会では「誘致実現」を前提に、来年度予算の概算要求に本部仮事務所費など約三億六千万円を要求しており、あとは十二月の国連総会決定を待つだけとなっている。

国連大学の誘致には、一九六九年に当時のウ・タント国連事務総長が構想を打ち出して以来、

他国の追隨を許さない程の熱意で取り組み、とくに本部（企画調整センター）と数多くの研究教育センターに分離して世界的なネットワークで結ぶという青写真が出来てから、「本部誘致」を最大の目標として努力、下工作を進めて来た。

国連大学設置委員会が、さる六月末にまとめた国連大学憲章によると、大学本部はⅠ、大学の研究、教育についての企画立案 Ⅱ、大学の全般的な事業計画を管理する。Ⅲ、世界の学会の学者の交流、知識情報の交換を促進する——ことを主な任務としている。世界各国に研究テーマごとに設けられる研究教育センターを総括する中枢機関となる。

日ごろ慎重な外務省もこの誘致には積極的に立ち回り、政府もさる六月に「大学基金一億ドルの支出」「本部建設費は全額負担する」など、「経済大国」の実力を見せつける決定をしている。ワルトハイム国連事務総長の今回の勧告も、ユネスコ国内委員会などでは「これほど明確に日本の立場を支援してくれるとは期待以上のもの」と喜びの色を隠していない。ただ当面の課題としては、アカデミックな分野を経済力で獲得したのではなく、四年にのぼる日本の熱意と貢献が今回の勧告につながったものとして、各国の賛同を得ることが大切。全世界から祝福されて日本誘致決定に持ちこまねばならないというのが関係者の意見だ。

一方、誘致が実現した場合の本部設置場所は、これまでのところ東京周辺の首都圏内としか決まっていない。この条件に当てはめた場合、立候補している東京、青梅市、筑波学園都市に加え、新たに千葉県が成田国際空港周辺部を候補としてあげてきている。しかし、大学本部スタッフが国際的分野から構成されるため、生活面、子弟の教育施設面などからみると東京都内になる公算が強い。

文部省のユネスコ国内委員会が四十九年度予算の概算要求として打ち出した国連大学設置準備費は三億六千三百十六万円。誘致が決定すれば、東京都内に大学本部仮事務所を設けるとともに、建設地の土地調査、敷地造成、基本設計を手がける予定となっている。

国連側でも、十二月の総会で誘致国を決定しだい。来春までに二十四人の理事会メンバーを国連事務総長、ユネスコ事務局長が協議して決定、理事会から選ばれた国連大学学長指名委員会で、初代国連大学学長候補を推薦したうえ、七月には国連事務総長が任命する。このため仮事務所は来年九月ごろには、第一次スタッフ約三十人を招いてスタートさせる。(読売新聞、一九七三年十一月三日号より)

一九七四年十月には発足—国連大学東京本部—総長は米人起用か。

〔ニューヨーク七日共同〕ナラシマン国連副事務総長は、国連大学設置に関する決議が本会議で採択された翌日の七日記者会見して「国連大学理事二十四人は来年初めに任命され、三月には国連本部で第一回理事会を開ける見通しであり、十月には東京の大学本部も発足する予定である」と述べた。同副事務総長によると、国連大学総長は、大学理事会で候補者を三人ないし五人に絞った中からワルトハイム事務総長が任命するが、来年半ばには正式に決まる見通しである。ナラシマン副事務総長は国連大学総長の条件として、国際的、学問的に尊敬され、かつよく知られた人物である事を挙げているが、外交筋では米国の財団等から寄付を集める必要上、米国人が選ばれる可能性が強いとしている。

同副事務総長はまた、一九八〇年には国連大学は、世界各地にわたって二十五ヶ所程度の施設と、一万人の学者を擁する大きな機関に発展しているだろう、と予測している。

国連事務局によると同大学の研究施設を誘致したり、自国の機関を国連大学に結びつけたりする事を希望している国は日本の他に、オーストリア、ベルギー、中央アフリカ、チリ、コスタニカ、キプロス、ダメオ、デンマーク、エクアドル、エジプト、フランス、ガーナ、アイスランド、インド、イスラエル、イタリア、ケニア、クウェート、マルタ、オランダ、パキスタン、ペルー、ルーマニア、スペイン、チュニジア、トルコ、ザイルの二十七ヶ国に達している。

また各国が希望している研究機関の中には人権問題、天然資源、石油、海洋、環境、水利および洪水制御、人口問題、開発などがある。(一九七三年十二月八日、朝日新聞より)

一九七四年十一月、初代学長にヘスター氏を任命、一九七四年十二月、国連大学本部が帝国ホテル内に仮事務所を開設、一九七五年一月、日本が国連大学基金に二、〇〇〇万ドル供託、一九七五年三月、国連大学副学長に加藤一郎前東大学長を任命、一九七五年十一月、米国一、〇〇〇万ドル、国連大学へきよ出。

世界の頭悩を指す―国連大学。

国連大学の構想は、一九六九年秋の国連総会に始まる。当時のウ・タント事務総長(故人)はこの総会で「国連大学の設立を真剣に考慮する時期が到来したと思う」と呼びかけ、各国の一流学者を教師とし、世界から集まった学生が共に学び生活することにより、国家や文化の障害を打ち破る、という夢を明らかにした。

このウ・タント構想は、その後の国連やユネスコの討議で一般教養中心の普通大学という構想から、世界一流の研究と大学院レベルの研究教育機関にするという計画に変わった。現在の構

想では、学長以下約二百人の職員で構成される本部のほか、世界各地に研究教育センターを置き、さらに既存の大学や研究所などと協力関係を結び、世界最高級の研究情報センターにすることを目指している。

(一九七五年五月八日、朝日新聞より)

—この書によせて—

雄弁法や韻文は美しいものを愛好する世代が民族や民衆の驚くべき可能性を有する言葉より開花させた2つの芸術である。

両者共長年の間結合し合い、混合し合っていた。偉人ホメロスの豊かな川の流れを想わせる明文、ヘブライ預言者達の熱情をかきたてて止まない激しい言葉、何が我々の心をとらえて離さないであろうか、言葉のもつ魔力なのか、それとも論証が有する説得力なのであろうか。我々の世紀よりも五世紀もの以前に於いて、ヘレナの思想家達はこれ等の2つの現象の考察や分析に自己の非凡な才能を駆使していった。彼等はそれ等の原則を定義し、それ等の法則を公式化して行つた。このようにして、雄弁法や韻文が生れ育つて来たのである。韻文は合理的な韻律をもつて、精神の中にある非合理的な力を呼び起そうと努め、我々の深奥にある自我といった潜在意識の内存在を満そうとするものであった。雄弁法の方は、もう一つの同じような格調を有した道を、より社会的役割を担いながら進んで来た。

「ソフィスト」と呼ばれる雄弁学や哲学のこれ等の古代の教師達に、我々はどれ程の思恵を受けているか測り知れない程である。

彼等は言語問題を研究した最初の人達であり、彼等はまた理路整然とした論証の美しさや、

力強さを明らかにした最初の人達でもあり、彼等はあらゆる人間同士の鬭争は平和的に話し合えるものであり、武力によって解決するのではなく、話し合いのテーブルの上で解決し得るものである事を思考し、声を大にして言明した最初の人達であった。文章の中に言葉の調和ある並びをもたらしした努力、演説の中に思考の調和ある秩序を作り出していった努力、社会の中で人間の利害関係に調和をもたらしした努力、これ等の総てを我々に伝え、佳麗に話すという芸術をヘレナの教師達は我々に残してくれたのである。こうして精神文明社会が、彼等の足下に根をおろしていった。

雄弁学は破廉恥な術策の集合体とか奸智にたけた技術のよせ集めでもなく、扇動政治家とか独裁者がその威力をかりて大衆の嫌悪すべき激情をかきたてたり、彼等の心の中に憎みや狂気の炎をたぎらせるといったものではない。真実の雄弁学は、自由の中に於いてのみ開花するのであり、それこそが生来の民主主義なのである。ラペンナ博士は雄弁学の倫理上の問題にこの本の相当のページをさいている。

雄弁学は教師の側に於ける単なる倫理や精神の高潔さを説いているだけではない。それは音や音色、子音や母音が奏でる物理的満足から、頭韻法やカデンツアによって創られ、正しく凍結された論証や堅固に組立てられた論理の軽快な感情の吐露が生み出す知性の歓びまで、人間

の言葉がおりなす愛情を説いている。ラペンナー博士の演説を聞く機会に恵まれた総ての人達は、彼がどれ程雄弁家の典型であるのか確認する事が出来るであろう。無比の度胸、はりのある音声、すばらしい音色をもった声、こういった自己の生来の天性に加えて、彼は大学の教師として豊富な個人的経験や理論から学び取ったばかりではなく、ハーグにある国際司法裁判所である世界最高の法廷で弁護の弁舌をふるう現実の国際法弁護士活動より生れる豊かな個人的経験より学びとった疲れを知らない不断の研究の成果が総てつけ加えられ、彼の血となり肉となつているのである。彼の熱血ほとばしる説得力をもった弁舌の背後に、我々は常に緻密な資料と潤沢な教養を感じとるのである。

ラペンナー博士は 에스ペラントの事業に自分の才能をおもいきつて捧げた人である。ヘレナの最初の「ソフィスト」と同様、彼が好気心を抱き、エスペラントについて深く掘り下げて研究したとしても、別に驚きに値することでも何でもない。それがどこから来たのか。何故それが言語発展の最終段階を示すのか、どのようにしてそれは国家の支えもなしに存在し得るのか、総ての真面目な人達が抱いている重な問題点を、彼が説明したいと考える重な問題点を、明らかにしている。彼は言語学者の道を選ばなかったけれども、フランス語、英語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語、クロアチア語を完璧なまでに自分のものとしており、これ等の言語で書を著しており、この他にも6ヶ国語を身につけているといった彼の博識は、自分の考えに逆行

するかのようにあるが、言語の規則とかしくみの有する無秩序の中に正しい方向を見い出す力を彼に与えたのである。

更に彼は法律の研究論文を作成する時と同様に、細心の注意力をもって、豊富で貴重な資料を集め、それを詳細に渡って調べあげる事により、言語の起源と発展についての解決すべき論題に対する最新の論理を発表する事が出来たのである。彼は歴史上の重要資料を詳しく調べあげ、それ等の適切な意味を思考し、どういった通説にも左右される事なく、真実にのみ留意して記述している所から、自己の説をより明確に不偏不動のものとなしている。

この書のように、系統的に編集され、適切で役に立つ、思索に富んだこの種の書は多くの国語で書かれた文献にも見当らない。世界のあらゆる人達にこういった貢献をなすために、国際語でこの著者に私は深甚の敬意を表したい。

G・バランギャン

第一章

イントロダクション

言語は意志の伝達と思索の主要な媒体である。それは揺りかごから墓場まで、人間と行動をともにする。母親の愛撫から幼児のわるさ、青年の情熱、成年時代の労働、死への忍従——これ等の総ては言語を介し、言語によって態度を示し、自己を表現し、休みなくこだまして行く。大自然の征服において、人間の形成、世界の建設において、重要な武器ともなり、人生の戦いの中で鋭い攻撃用武器ともなり、相手に協力を得る仲介者であり、相手を説き伏せたり納得させたりする手段である言語は、人間の息子であり、同時に父親でもある。それは日常絶対不可決な手足として、あるいは相手を傷つけ時には殺傷しかねない両刃の剣として、あるいは和合や平安、平和や愛の種をまく媒介として、日常生活の中で重要な役割を演じている。人間によって創造され、それは人間自身を養み、人間によって進化発展させられ、人間自身と共に進化発展して来ている。

言語の役割は思考や感情の単なる技術的表現に限定されることなく、それは数々の芸術を生み出す素材でもある。彫刻家は石や金属を活用して芸術を削り出し、版画家は木材や銅塊を用

いて芸術を創り出す。建築家はコンクリートや鋼鉄を用いて建築美術を創造している。画家は色彩でもって自己の意志を表現し、作曲家は音を微妙に織りなすことにより音楽芸術を創り出している。一方、詩人や作家、芸術家は言語を用いて、自己の考えや感情といった自己の深底から噴き出す魂の発露を理解させようと意を尽している。

彼等にとつての言語は、思想を述べたり、互いに情報を交換し合うといった月並みの手段としてよりは意義深い。意味慎重で、深奥なものである。彼等の手の中で、それは、芸術を創り出す道具となるものである。詩人や作家、雄弁家は通常の生活で用いられているより、もっと異つた目的のために、そしてもっと違つた方法により言語を活用している。彼等にとつての言語は芸術の表現手段である。

人間の活動の総ての分野に於いて、それに附随する行動を可能ならしめ、助勢し、前進させる手段を知らなければならぬ。職人は自分の作業道具を使いこなせなかつたとすれば、上手に自分の仕事をやり遂げる事は出来ないだろうし、医者や技術者、兵士、運転手に於いても同様の事が言えるわけであり、技術関係者にはどのような例外も見出し得ないであろう。彼等は自己の表現手段としての道具の内部構造やあらゆるそのものつ性質や性能を研究しつくさなければならぬ。細心の注意力を傾注して、真剣に、徹底的に研究してゆけばゆく程、ますます上手に使いこなせるようになる。

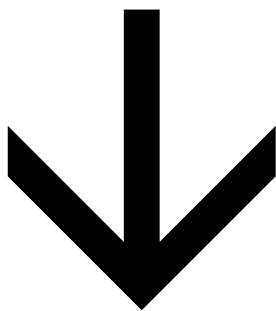
才能なくして芸術家たる事は出来ない。これは疑う余地の無い所である。しかし単なる才能のみでは不十分である。芸術上の成功は――芸術ばかりというのではないが――単に才能と努力の積み重ねの上に成り立っている。学問と不断の研究が必要であり、学問と研究の大部分がそれを用いて仕事をするといった石とか色彩、音、語彙……等の対象物に向けられる事が絶対に不可決である。

雄弁家は言語を活用する芸術家である。言語が素材であり、それを用いて芸術を創り出す。幾つかの、少くとも普遍的な言語の有する重要性に鑑みて、では雄弁学を研究しようとする場合、何が最も自然で、効果的な研究の成果を生み出すのであろうか。

ギリシャのソフィスト達は――雄弁法の最初の教師であった――同時に、最初の文法学者でもあったという事は、確かに偶然ではない。雄弁学を教えるために、彼等は言語のもつ構造を研究する必要があったし、語彙の有する力量や広がり、豊かさ、範囲、限界そして文体や独自の表現手段を研究しないわけにはいかなかったのである。雄弁学のおかげで言語学の最初の基礎が芽ばえ始めたのである。

第 1 部

言 語



第二章

言語の起り

言語の起源、言語の形成方法、言語の発展過程の諸問題を取り扱っている仮説や理論は、数多く存在する。

一元発生説かそれとも多元発生説かという言語起源に関する重要な起源論争は、特に大いなる興味を呼び起すものである。

今日の言語はたった一つの統一性を有した古代言語からその源を発し、派生して来たものなのであろうか。あるいは逆に数多くの古代言語がかって存在しており、そこから今日の言語は発展して来たのであろうか。

この疑問に対する一正確で、綿密な、科学的解答を得るには、言語の徹底的な理解と社会の中で果しているその役割や機能を徹底的に知る事が第一の条件である。

科学はこれ等の基本的な解決すべき問題に対し、総ての面に渡る詳細な解答を与えるまでには今日まだ至っていないけれども、しかし数多くのすばらしい発見が新事実をもたらして来ており、偉大なる科学的立証をもって、それ等の事実が証明されて来ている。

1、暗闇の中で

幾多の宗教的概念よりすれば、言語は超自然の力である神が人間に与えたものであると断言している。インド国のバラモン教では、聖典ベーダーの中で、言語に神格の地位を与えている。バラモンの妻、サラスバティは言語の女神であり、教養の女神とみなされていた。似かよった同一性を有する考えはキリスト教にもある。

新約聖書には「初めに言葉があつた、言葉は神と共にあつた、言葉は神であつた。」と書かれている。(ヨハネによる福音書、一章の一) 旧約聖書には、人間はその創造主より直接に、話す能力を附与されたものであると記されている。

そして、主なる神は、野の総ての獣と、空の総ての鳥とを土で造り、人の所へつれて来て、彼がそれにどんな名をつけるかを見られた。人が総ての生きものに与える名は、その名となるのであつた。(創世紀、第二項の一九)

人間性自身の積み重ねによつて話すという能力を身につけてきた人間が、動物達に名前をつけるよりも以前に、人間は人間に話しかける創造主とお互いに意志を通じ合っているとされている。

「主なる神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせた。主なる神はその人に命じていわれた、「あなたは園のどの木からでも、心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べるときつと死ぬであらう。」」（創世記、第二章、十五、十七）

アダムとエバ、それに彼等の子孫が使っていた言葉は、総ての地球上で一つの統一性を有するものであった。バベルの塔が試みの時代に建てられ、その時以後、その言葉は人間が罪を犯したために混乱させられ、人間はその時から、お互いに異った数多くの言語を話すようになったと言っている。

「全地は同じ発音、同じ言葉であった。……時に、主は下って、人の子たちの建てる町と塔を見て言われた。「民は一つで、みな同じ言葉である。彼等はすでにこの事を始めた、彼等がしようとする事はもはや何事もとどめ得ないであらう。さあわれわれは下って行って、そこで彼等の言葉を乱し、互に言葉が通じないようにしよう。」こうして主が、彼等をそこから全地の面に散らされたので、彼等は町を建てるのを止めた。これによって、その町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を乱されたからである。主はそこから彼等を全地の面に散らされた。」（創世記、十一章一、五、九）

キリスト教の影響下にあつて、選民思想の上にたつ言語が、他の総ての言語の頂点にあると考へるのは、至極当然である。(1)

このような、聖書の基盤の上にたつた初めの言語学についての考へは、—より詳しく言えば、宗教的信念、又は神秘的で、非科学的な仮説とでも言うべきもの—ヘブライ語が最も最初の言語であり、今日までの総ての言葉が湧きいでて来た源であると主張して来た。

聖ヒエロニムス(S. S. S. Hieronymus)は次のように言っている。

“総ての古代の遺物は、旧約聖書が記されたヘブライ語を、総ての人間の言語の最初のものであると立証している。”

ヘブライ語が—神の啓示による言語であり—人類の最初の言語であるといったカトリック聖職者達によつて固められ、形成されていった思想は、幾世紀の間、人々の心を支配して来た。ダンテでさえ、一三〇三年か一三〇四年に書いた自分の書 *De Vulgari Eloquentia* の中で、ヨーロッパ言語の起源を、バベルの混乱に結びつけている。この神秘性を秘めたアダム・イブ説に基づく概念は、偉大な詩人の死後も、長らく生きつづけて来た。十六世紀の前半に於いても、まだその当時の有名なイタリアの歴史家、ピエールフランチェスコ・ギャンブラーリ(Pierfrancesco Giambullari) は、イタリア語—フローレンスのトスカナ語—がヘブライ語と直線的なつながりを有していると相当まじめに自分の書の中で書いている。(2)

へブライ語とヨーロッパ言語の関連性を立証するために、彼等がどのような論証や術策を苦心して、この事に適用して来たか、我々には殆んど信じられぬばかりの努力をしているのである。偶然に起る総ての一致は、ヨーロッパ言語がへブライ語から派生して来たものであるという証拠として用いられている。例え二つの比較に価する言語が、どのようなものであれ、意味上の連りを持つているとすれば、音とか文字の並び換えを平気でやってのけるのである。へブライ語が右から左へ書いて行くのに対し、一方ヨーロッパの言語は、左から右へ書いていく事実さえも、言語学の解明に於ける、文字の最も強制的な置換のための十分な根拠であるとしてとらえているのである。(3)

発達して来たナシヨナリズムの最初の萌芽は、新しい理論を生み出して来た。

或るスペイン人は、十六世紀の後半に、アダムの言語はバスカ語であつたとロマンチックにも言い切っている。ゴロピウス(Goropius)は一五八〇年、アントワープ市で刊行された自分の書の中で、オランダ語のみが地上の樂園、エデンの園で話されていた言葉であるかもしれないと述べている。(4)

こういった考えをもつ言語学者の中でも、A・ケンペ(A. Kempe)は多少公正さを有しているけれども、彼の主張によれば、三つの言語が使用されていたと言っている。

神はアダムにスエーデン語で話しかけられた。アダムは神にデンマーク語で返事をした

一方蛇はエバをフランス語で誘惑したのである。(フランス人へのお世辞によるものか、中傷しようとしたものかわからないけれども)(5)

これ等以外の言語も人類の最古の言語として、また取り上げられている。

ブルトレイッシュのジョン・ウェブ(John Webb)は、一六七八年ロンドンで刊行された彼の書の中で、中国語こそがバベルの混乱以前に、世界中くまなく話されていた世界最初の言語であるといったくらいか信憑性のありそうなことを書いている。他の著書で、フィリップ・マツソン(Philippe Masson)は、バイブルの言葉に中国語を関係づけているし、十九世紀の末期には、言語の元祖としてアナマン語を取り上げているフレイ將軍(Generalo Frey)という著者がいる。

(6)

今日ではこういった種類の主張をなす人達はもう居ないであろうと考えるとすれば大きな誤りである。一九三四年に開催されたトルコの言語学者会議に於いて、トルコ語は世界中どの国の言語にも見いだされる、それは人間の注目を引きつけ、特定の名をつけないではいられない第一の物体、太陽というトルコ語 *güneş* から総ての地球上のこの名が派生していつているという理由による、といった至極真面目な論証で終止したことがあった。(7) ニューヨークにあるアイスランド出版社によって発行された本の中に、聖書はアイスランド人によって書かれ、

へブライ語はケルト語の単なる方言にすぎないといった事がまことしやかに書かれてあった。(8)

このような似かよった専門家の意見を羅列する事は容易である。だが、今まで述べた幾つかの文献を引用しただけでも、言語学がどういった所をさまよっているのかを示すのに十分である。現在も、まだ無智蒙昧の暗闇の中で、幾度となくさまよい歩き続けているのである。

(1)、その後の時代に於いても「諸々の選民思想」が自分達の尊重している国語の「優位性」を力説して来たという事実は、大変に注目に価するものである。これに似かよった主張「言語の有する並外れた優秀性」が由に、それぞれの言語が国際関係に於ける国際語となるのは至極当然であるといったばかげた要求を見るのは今も昔も少くない。

(2)、ピエール・フランチェスコ・ギャンブラリーが一九六九年、フロレンスにて出版した書「*Origine della Lingua Fiorentina*」(フロレンス語の起源)から。

(3)、オット・イエスパーセン(Otto Jespersen)によってロンドンで出版された書「*Language—its Nature, Development and Origine*」(言語—その資質、発展と起源)から。

(4)、一、五八〇年アントワープ市にて、ラビヌス・トレンティウス(Laevinus Torrentius)

によって編集された「*Opera Ioannis Goropii Becani*」書の中で発表された「*Iannes Goropius Becanus, Hermathena*」から

(5)、フェデリーゴ・ガルランダ (Federico Garlanda) により一九〇〇年ローマで出版された書『La Filosofia delle Parole』(言語哲学)の中にも見られ、又同様な論理をマリオ・ペイ (Mario Pei) は一九五七年ロンドンで出版した自分の書『The story of Language』(言語歴史観)の中で論じている。

(6)、一九五二年、パリにて、A・メイエ (A. Meillet) とM・コーエン (M. Cohen) の編集の下に言語学者のグループが著した『Les Langues du Monde』から。

(7)、註(5)に記したマリオ・ペイの書から、

(8)、一九四三年五月五日付、ロンドン雑誌『Evening Standard』にレオポルド・ステイン (Leopold Stein) が掲載した論文から。

2、科学分析の起り

偉大な科学者、G・W・F・ライプニッツ(G. W. F. Leibniz)は、*ヘブライ語からの言語の派生*についての仮説を鋭く攻撃した。

ヨーロッパの大多数の言語とアジアの大多数の言語、そしてエジプト諸国の言語は、それぞれ同じような起源語を有しており、自分固有の源をもっているのだという考えを彼が発表した。ライプニッツは言語に関する研究や理論的帰結は真実に基づいたものでなければならぬと主張している。

(9) 彼の意見に従って、ピョートル皇帝はロシア帝国領内にある種々の言語資料を収集し始めた。

言語問題に関する一八世紀の最も思索に豊かな思想家の一人であるJ・G・ヘルダー(Johann Gottfried von Herder)は生れ育つて来た言語科学の上に、偉大な功績をなしている。

一七七二年に彼が著した「言語起源」という研究論文の中で、その時代の通説であった「言語は人間によって創り出されたものではなく、言語は神によって直接附与されたものである」といった思想を激しく攻撃した。

彼の証明はその当時、大変に興味あるものであった。ヘルダーの最も力強くて、中心的な論

証の中の一つは、もし言語が神によって創り出されたものであるとすれば、言語は實際存在している言語よりも更に論理的であり、合理的でなければならぬであろうという点にあった。現存する言語は、かなりの無秩序を含んでおり、種々の角度より見て、あまりにもまずい配列をなしている所から、言語は確かに人間の創り出したものであるにちがいがなかった。(10)

ライプニッツの主張やヘルダーの考えは、しばらくの間まだ世間的評価をうけないままであった。一九世紀の初期、特にサンクリット(11)の発見や比較言語学の誕生後、言語のもつ謎を解明しようという科学的手法を用いた最初の真に真面目な試みが生れて来た。

言語の現代的意味からする真の科学としての言語学の誕生は、殆んど同時化に生き、言語の研究に比較歴史分類法を適用して、新しい道を切り開いた4人の偉大な人物、一人のデンマーク人と三人のドイツ人に依る所が大きい。

言語学の父として正しい認識をうけていたF・V・シュレーゲル (Friedrich von

Schlegel)は、自分の書“*Über die Sprache und die Weisheit der Indier, 1808*”(インド人の言語と知恵)の中で、サンスクリットとギリシャ語、ラテン語、ドイツ語は同一のカテゴリに属するものであるという考えを発表した。彼はギリシャ語やラテン語、ドイツ語の中にあ

る単語で殆んど変形しなくとも、同一の単語がサンスクリットの中にも見い出せるといったそれ等の実例を取りあげてみせた。シュレーゲルは比較文法学について論じた最初の人であった。シュレーゲルの考えによれば、総ての言語は二つの大きなグループに分割されるとしている。その一つはサンスクリットとその親族であり、その二つは他の総ての言語である。言語の間にある大きな構造上の相違は、それ等が同一の源から派生して来ているのではないという考えに彼をいたらしめていった。

もう一人の偉大な言語学者、フランツ・ボップ (Franz Bopp) は比較的高い精度をもって、インドヨーロッパ語の共通言語体系に関する学説を確立した。「ギリシャ語、ラテン語、ペルシヤ語、ドイツ語の動詞活用体系とサンスクリットの動詞活用体系に関する比較研究論」(12)という自分の書の中で、ボップはヨーロッパ言語とサンスクリット語の近似性を指摘し、これをもってヨーロッパ言語の比較文法学を生む今日の研究的基盤を確立した。彼の著した書に「サンスクリット・センダ語、アルメニア語、ギリシャ語、ラテン語、リトワニア語、古代スラブ語、ゴート語、ドイツ語の比較文法学」があり(13)、その本を彼は一八三三年から一八四九年の間、書き続け出版して行つた。これ等の言語に関する自己の比較研究の成果を、この膨大な書の中に書き残している。彼はギリシャ語、ラテン語、その他のヨーロッパ言語がサンスクリットから派生して来ているとは考えずに、同一の根元となる共通言語から別れて多様化して来たもの

として、総てのこれ等の言語をとらえていた。

偉大なドイツの言語学者の三人組の中の一人、J・グリム(Jacob Grimm)は、"Deutsche Grammatik"(ドイツ文法)というタイトルの下に、ドイツ語のすばらしい歴史上の比較文法論を著した。その第一巻が一八一九年に発刊されている。(14) グリムはポーランド語の熱愛者であった。彼は非常にささいな取るに足らぬ方言であっても大切にするといいたあらゆる総てのものの重要性を強調した人であった。グリムはギリシヤ語やゴート語、東部ゲルマン語にある二、三の子音のアレンジについて、自分の法則を発表した事で更に名を高めている。この分野でデンマークの言語学者が実質的な貢献をなした事から、オット・イエスペルセン(Otto Jespersen)によって「ラスクの法則」と名付けられていたこの法則は、後にいたる所で応用出来ない事がわかって来たけれども、だがラスクとグリムのこの事に関する仕事は言語学に対してすばらしい貢献を意味するものであった。

一八一八年「古代北方言語とアイスランド語の起源」というラスムス・ラスク(Rasmus Rask)の書が出版された。ラスクはゴート語、スラブ語、リトワニア語、ラテン語、ギリシヤ語についてのとてもなく正確な比較文法論を著している。彼はサンスクリットを知らなかつ

たのでその事について自分の書の中で触れてはいないけれども、ペルシャ語やインド語はアイスランド語からギリシャ語までの言語の源とかなり離れた位置にあるのではないだろうかという意見を述べている。ラスクは並外れた完璧さを有し、非常に明確さを有する分割を、インドヨーロッパ語の分析の中で行っている。特定のグループに何故それ等の幾多の言語が属しているのか。どのような関係をそれ等の言語は内に秘めているのかといった疑問を明らかにしている。彼のおこなったそうした分割は、長年の間、大変すぐれたものであるという評価がなされていた。オット・イエスベルセンはラスクの書について次のように書き残している。

“この仕事が完成した時点で、この論文を公表してたとすれば、特にデンマーク語よりも広く知られている言語で著していたとすれば、彼の書は一九世紀の前半に著された言語学の研究の中でも真の分類法に基づくとてもすぐれた解説を載せているのだから、ラスクは現代言語学の創始者として容易にその地位を得たであろう。彼はこの分類法を今まで未解決のまま山積みになっていた言語学の解明に適用しているのである。” (15)

このころから言語についての科学があらゆる国で急速に開花していった。生存し続ける言語やすでに死滅してしまった言語の文法書が数多く著されて来たし、重要な比較研究が企画されて来た。少数民族の言語や未開地の種族の言語も探求されて来ている。

一般の言語学はかなりの進歩を遂げて来ており、複数の言語理論が起つて来て、数種の学派が形成されて来ている。ここで述べる価値のあるものだけでも、レイプニッツ大学で主に形成された「若い文法学者」と呼ばれる学派の中に、アウグスト・シュライエル(August Schleicher)の自然主義生物学的理念、H・シュタインタール(Heymann Steintal)の心理学的指向がある。偉大な言語学者H・スチュアート(Hugo Schuchardt)がその最も優れた指導者である。「言語と物体」と呼ばれる学派の中に、F・デ・ソシュール(Ferdinand de Saussure)の理論と彼の偉大な二人の門下生A・メイエとJ・ヴァンドリエス(Jacques Vendryes)の社会学指向があり、G・ボンファンテ(Giuliano Bonfante)の新言語学指向がある。N・I・マール(Nikolai Jakovlevich Marr)のヤフェード理論は、言語学の中でも特異の地位を占めている。(16)

(9)、カタリナ二世のこういつた奨励と支持が、後に P・S・パラス(P. S. Pallas)の膨大な著 *Linguarum Totius Orbis Vocabularia Comparativa Augustissimae Cura Collecta*. (皇帝階下の配慮の下に蒐集された全世界言語比較辞典)の刊行をもたらしている。

最初の出版は二巻からなりたっており、一七八七年から一七八九年の間刊行されたが、その中にはアジアの言語とアジアの方言を含めて、一四九の言語が網羅されているのを始め、それに加えて、五十一のヨーロッパ言語が記載されているから、合計すると二〇〇の言語が掲載されている。第二の出版は四巻からなりたっており、一七九〇年から一七九一年に出版され、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、米国のおよそ二八〇の言語を記載している。

—他の重要な言語の収集には、J・アテラング(J. Chr. Adelung)の書 *Mithridates oder Sprachkunde* (ミトリダテス及び言語学) 全四巻、一八〇六一一八一七年、ベルリン発行があり、その中にはその当時の世界で知られていた言語が総て網羅されている。—更に貴重な書に、H・バンドール(Hervasy Pandurro)の著した *Catalogo de las Lenguas de las Naciones Conocidas* (著名国の言語目録) 全六巻、一八〇〇—一八〇五年、マドリッド発行がある。この書の著者が言語の比較とか言語の親族関係の確立にとって本質的なものを文法であると考えていたという事は、注目に値するものである。一方、それよりもずっと以前、—大半はその後になされているのだが—人々は語彙の類似性を分析し、親族関係に対する明確なその規準を思考していた。

(10)、註(7)で引用した書による。

(11)、インドの古代宗教やカースト言語という庶民階級の民衆言語、プラクリットと區別して「高貴な言語」を意味する。サンスクリットはインドのカースト制の4つの階級のうち最高位にあるバラモンの宗教言語として、最初に形成されたもので、ペーダ聖典はこの言語で書かれている。そのずっと後になってサンスクリットは、文学の目的のために、他の階層の人達によつても用いられるようになって行き、幅広い文学が形成されていった。紀元前五世紀以前の古典サンスクリットは、インドの言語学者によつて研究されて来た。サンスクリットで幅広い文学が形成されており、インドの科学者達の知的交流に役立つ「文学言語」として現在までサンスクリットは保存されて来ている。サンスクリット語に平行して、かなり広い領域で使用される諸種の平民階級の共通語が発展して来ており、プラクリットに関係なく無数の方言が個別の発展を遂げて来ている。

(12)、フランツ・ポップ(Franz Bopp)一八一六年、フランクフルト・アン・マインで著した書『Über die Conjugationssystem der Sanskritsprachein Vergleichung mit jenem der Griechischen, Lateinischen, Persischen und Germanischen Sprache』

(13)『Vergleichende Grammatik des Sanskrit, Send, Armenischen, Griechischen, Lateinischen, Litauischen, Aflawischen, Gotischen und Deutschen.』

(14)、第二巻は一八二二年に刊行され、一八三七年、全四巻をもつて完結している。

(15)、註(7)で引用した書による。

(16)、完璧な書誌学は一九五二年、パリにて発刊されたA・メイエ (A. Meillet) とM・コーエン (M. Choen) の著した書 *Les Langues du Monde* (世界の言語) の中に在る。

3、モノゲネーズかポリゲネーズか

一元発生説が正しいのか、多元発生説を取るのが正しいのかといった今日の言語起源に関する論争は、今なお後をたたない。

詳細に至るまで考え方が一致しているというわけではないが、昔の理論家達は統一性を有する共通言語がかって存在していたはずであると考えていたというのが通説である。

彼等は幾つかの今日の言語、一つにはこれ等の中にあつて制御可能な古代言語 (特に、サンスクリット、ギリシャ語、ラテン語、古代スラブ語、古代ヘブライ語) 二つにはそれ以外のものの中に見られる多少とも大きな類似点の上に、大部分、自己の立脚点を置いている。彼等はこのようなして言語を群、亜群、族によって區別けし、詳細な系統図を仕上げていった——

確かに一見して感銘深いものがある。この手法によって、言語を系統的に分類していった最初の人、ドイツの言語学者、A・シュライエルであった。彼は自然界に存在するあらゆる現象のように、誕生、生成化育、死滅といった自然界の法則に支配された有機的組織体として言語をとらえていた。(17) 彼はインド・ヨーロッパ語の発生を、幹としてとらえられる起源語から、

枝へと成長して行き、最後には枝葉へと袂を分かつて来た現在のインド、ヨーロッパ語といった樹枝状系図の形で解き明している。

シュライエルはこういつたかつて存在したであろうインド、ヨーロッパ語や、インド、イラン語を復興しようと努め、その言語で短かい物語りを書くことさえやってのけている。

他の言語学者達は、シュライエルの分類法を見習っていった。それを特に一般大衆化したのは、その当時の著名なドイツの言語学者、マックス・ミュラーであった。

言語の樹枝状系図の考えは、(18)人類がかつて唯一の起源語を有しており、その言語は(原因がはっきりしないのだが)、後に複数の言語へと分枝して行ったという事を示していた。これ等の言語は、更に今日の言語を生み出しながら分枝していった。このような言語の発展性向を認めれば、大昔に存在していたであろう一つの言語から、今日の言語の多様化へと進み、おそらくは将来に於いて、もっと多くの言語へと多様化の道を歩まなければならないことになる。この点に関し、マックス・ミュラーは次のように言っている。

我々は言語の起源を理解出来るというだけでなく、その必然的な崩壊もまた考える事が出来る。言語の実質的な要素や形式上の要素の中のどのような量的相違も、仮定される唯一の共通言語源に異論をはさむものではない。言語学は我々を高所へ導いてくれるので、地

地球上で人間の生活が始まったころの状態を見る事が出来、我々が子供のころよりよく耳にする言葉——全地の上は同じ発音、同じ言葉であった。——は、自然で、理解しやすく、納得性のある意味を伝えてくれる。(19)

他の論文の中で、マックス・ミュラーは最古の世代から、どのような新しい語根もかつて考え出されたものではなく、「神という創造主の口より出でた語彙と同じものを我々は使用している。」と言える。総ての言語の変化は「表現形式の変化」のみであり、言語の本質自身には何もつけ加えられてはいないと主張している。(20)

言語の発生について、同様な一元発生論理を展開している多少とも名の知られた多くの著者がいる。彼等の中でも特に、特色ある論理を展開している著名にイタリアの言語学者、アルフレッド・トロンベティがいる。言語全体をもてあそびながら、彼は勇敢にも説得しようとする。努めている。

「私が今日まで行って来た米国の言語についての研究は、欧州の言語と米国の言語の関連性、そして欧州の言語と東部アジアの言語の関連性を証明するのに十分であり、人間の言

語が統一性のある、一つの源をもつた言語起源を有しているという主張に対し私の結論は幅をもたせるものである。(21)

トロンベティは統一起源語とはどういったものであつたのかという疑問にまた立ち向つてゐる。もちろん、彼は解答をさけている。彼だけでなく、どういった言語学者であれ、その事に解答を与える能力を持つには至らなかつたからである。兎に角、そういった幻想的な統一起源語はトロンベティによれば、その形成の後、すぐに解体していったのではなく、その変化して行く過程は、想定される起源語が単語や文法の発展を併う、しつかりした言語体系を有する所まで到達してしまつた後に始まつたと考へなければならなかつた。「従つて、それより派生して来た言語は、起源語の有する多量の語彙と文法体系を受けついでいなければならぬ。」と著者は考へている。何故に、どのようにして、それは崩壊もなしに長年生きながらゑる事が出来たのか、何故、どのようにして、それは一定の発展段階に到達した後、直ちに分枝し始めたのであろうか。著者は答へる事が出来ない。これ等の総てが単に自己の立脚点を正当化させようとして考へ出されたものである事は疑いの余地がない。その起源語が、例えば幾つかの関連性のない音であるとか、複雑な音からなり立つてゐるものであるとすれば、どのようにして彼は自己の理論を語彙の類似性の上に向ちたてる事が出来るのであろうか。(22) 起源語が例えば家事労働や親族関係に係する、今日話されている言語の語根に相当するだけの数を有する

多くの語彙を、すでに有していたと考えているのであろうか。研究されて来た確固たる基盤の上に、理論をうちたてようとはせず、著者は逆の手法をとっている。自己の理論的主張を正当化しようとして、彼は事実を考え出している。

この問題に携わる言語学者や哲学者は、かつて複数の起源語が存在していたのだと考えた。こういった考え方にたつ人達に例えば、フレンドリッチ・ボン・シュレーゲルや(Friedrich von Schlegel)、フリッドリッチ・ミュラー(Friedrich Müller)が居り、彼等は唯一の共通源から今日の言語が派生して来たのではなく、数種の源から派生して来たのだという考え方をしている。高名な英国の言語学者、W・E・コリンソンは、一九二七年に刊行された書の中で、この問題に関し自分の考えを述べている。

世界の言語は唯一つの源に端を発しているのか(一元発生論)、複数の源から発生して来ているものなのか(多元発生論)、はつきりしているわけではないという事を明らかにしておかなければならない。——と彼は書いている。(23)

「歴史の曙のころ、すでに別々に分かれた言語グループがあった」と彼は強調している。(24) 言語起源に関し、一元発生説の観点をとる著者達でさえ、現実と自己の考えの立脚点をどう

にかして調和させようとして、多元発生論を取り入れなければならなかった。統一起源語についてのマックス・ミュラーの考えはすでに引用しておいたが、次のようにも述べている。

「原語の起源がどのようなものであつたにせよ。その最初の性癖は無限の変化を目ざさねばならなかつた。」(25)

同じ書の中で、統一性をもつた起源語があつたと主張する者は、真実の前に眼を伏せる事が出来ずに、この統一起源語は大量の言語や方言へと急速に分解して行かざるを得なかつたという新しい、全く証明されていないとても証明出来そうにもない仮説をうち立てた。

今日では全人類に共通な唯一つの起源語があつたという仮説に基づき、まじめくさつた理論をととめるものはいなくなつた。G・レベツツは自分の書の中で、言語起源と有史以前の言語について、次のように述べている。

「言語の樹枝状系図の概念は、最近の研究の中で払拭されて来ている。起源語についてのジョー・スミツツの考えでさえ、単なる幻想としてしかとらえられていない。「最初の人間」

「最初の住民」「最初の言語」という発想のように、それは生成化育の概念の証明し得ない解釈の上に成り立つ、根拠のない仮説といった幻想にすぎない。……この仮説に対して、歴史上の、あるいは比較言語学上のどういった証明も成り立つものではない。」(26)

マリオ・ペイは、共通の起源語についての思想に組していたけれども、インド、ヨーロッパやマラヤ、ポリネシア、中国、ホットントットといった言語グループを結びつけるものは何もないし、あったとしても極くわずかであるという認識をもっていた。(27)

他の理論家達も、彼等の仕事の上に重くのしかかって来ている一元発生説についての考えから十分に解放されずにいた。唯一つの起源語が存在しなかったとすれば、少くともせめて限定された数の起源語が存在していて欲しいと考えていた。この事はとりもなおさず、彼等のこの事に関する研究の核ともなるものであった。

- (17)、アウグスト・シュライエル (August Schleicher), *Compendium der Vergleichenden Grammatik der Indogermanischen Sprachen.* (インド、ゲルマン語の比較文法学大要)、ワイマル発行、一八六一年—一八六二年、シュライエルはダーウインの理論の強い影響下にあった。自分の書「ダーウインの理論と言語学」の中では、言語を有形で、真にナチュラルなものとし

てとらえている。「史学上から見た言語の意義」と言う書の中で、彼はこの立脚点を弁護している。

(18)、最も著名な言語学者達でも、言語の明確な分類についてとか、分類の規準について決して意見が一致しているわけではない。

二つの分類法が主に活用されている。一つは系図による分類法、即ち、共通起源といった考え方に基づく同族関係による分類法、二つには類型学による分類法、即ち言語の構造上の特徴に基づいて分類する方法である。この二つの分類法による現実的応用面で、一連の言語学者達は新しい規準をもたらしした。これ等の中で最も重要なものがウイールヘルム・ボン・ハンボルト (Wilhelm von Humboldt) によって導入された心理学基準であった。そして後にそれは、特に H・シュタインタール (Heyman Steinthal) によって応用されていった。

言語学者達の間にある大きな対立点を明らかにするために、幾つかの考え方を取り挙げてみよう。マックス・ミュラー (Max Müller) によれば、言語は三つの大きな群に分割され、それ等は更に、亜群、族、等々に分割されると言っている。イタリアの言語学者、アルフレッド・トロンベティ (Alfredo Trombetti) は自分の書『L'Unità d'Origine dell' Linguaggio』(言語の統一起源)、ポローニヤ発行、一九〇五年の中で二〇の群を識別できると言っている。彼は後に自分の考えを『人名代名詞』と『数詞』という書の中で述べているが、数度に渡り考え方を變えている。科学者としての生涯の末期に於いて(一九二二—一九二九年)、トロンベティは大きな言語群を九つにまで縮少している。A・メイエ (A. Meillet) と M・コーエン (M. Cohen) の書『Les Langues du Monde, paris, 1952』(世界の言語) パリ発行、一九五二年)の中に、『世

界各地の言語を調べあげ、「族」という言語の分割単位でとらえた「多様な結論」が紹介されている。

この輩出した書によれば、古代世界の総ての言語はかなりはつきりと立証される二〇以下の「生命族」に分割され得るとしている。だがアメリカには一〇〇を越える言語族があり、これ等に数多くの「孤立した言語」が属している。

(19)、マックス・ミュラーの書、“Lecture sopra la Scienza del Linguaggio”（言語学講義）
G・ネルツチにより英語からのイタリア語訳、ミラノ発行、一八六四年、

(20) マックス・ミュラー(19)で引用した書から。人間の創造についてのその当時の公式の概念を認めた上で、（これに関し、ダウイーンの辿る運命は、非常に教訓的である。）、信頼し得る言語学者が、具体的に研究した事実に基づき、多くの科学的結論をなしたという事を述べておく必要がある。

(21)、アルフレッド・トロンベティの書、“L'Unità d'Origine dell' Linguaggio”（言語の統一起源）、ポローニヤ発行、一九〇五年から。

(22)、トロンベティは語根の間に見られる類似性の上に、自己の考への立脚点を置き、言語の関連性を説いた数少ない言語学者の一人である。文法上の類似性の重要性を説いた、H・Y・パンドール(Hervas y Panduro)の考へは、すでに取りあげておいた。（註、九参照）このころの

言語学者のほとんどは、言語の関連性に対し本質的なものは文法上の類似性であると考えていた。A・メイエは(A. Meillet)「語彙は他の言語から借りてきたものではないと決して主張出来るものではないのだから、語彙の一致は決して絶対的な証明とはならない。」と言っている。この事について、彼は自分の書「Linguistique Historique et Linguistique Generale」(歴史言語学と一般言語学)、パリ発行、一九二六年の中の特にその八十八ページ上で、「言語の関連性は語彙の上にあるのではなく、文法学や音声学上から見た結びつきの上にあるのだ」と言っている。マリオ・ペイはまた、註(5)で引用した書の中で、「語彙の類似性は純然たる偶然の結果であるかもしれない。」と言っている。一方、A・L・クレーパー(Alfred Louis Kroeber)は

“The Determination of Linguistic Relationship”(言語の関連性の決定)の中や“Anthropos”誌、一九十三年に掲載された論文の中で、トロンベテイの考えに類似した考えを表明している。

(23) W・E・コリンソン(W. E. Collinson)の書「人間の言語」ベルリン発行、一九二七年より

(24) 註(23)で引用した書から

(25) マックス・ミュラー、註(19)で引用した書から

(26) G・レベッツ(G. Révész)の書“The Origins and Prehistory of Language”(有史以前の言語と起源)から、この書はJ・ブトラーにより、ドイツ語から英訳されたもの、ロン
ドン発行、一九五六年

(27) マリオ・ペイ (Mario Pei) の書 "The story of Language" (言語史) 第二版、ロンドン、一九五七年から。

4、言語形成に関する諸々の見解

言語が発生した方法論やどのようにして言語が形成されて来たのかといった方法論は数多く論議されて来たし、今日もまたたいへん熱心な論議が繰り返されて来ている。

この点に關してもまた、非常に異なる考え方があつた。言語は人間固有の資質として人間になつてゐるものであるとか、人間性自身の上に本来そなわつてゐるものであるといった非常に単純な主張がある。人間が神の栄光の下に、或る日突然、我々が今日ある姿で、地上に現れたといった事を信じてゐる著者達にとつて、この事に関して解決困難な問題は存在しない。もし超自然力が—信仰に属する—實際に人間を創造し、人間に明確な資質を与えたのであるとすれば、これ等の資質の一つが十九世紀や二〇世紀に於いてさえ、一部の言語学者達がその言語を用いて、ロマンチックな物語りを書く事が出来る量的に十分な語彙と、しなやかさを有する完成され、磨き抜かれた表現を持つて話す事の出来る能力であらねばならないといった考え方をしたとしても、この事にどのような異論をもとなえる事は出来ない。

一方、科学的なサークルや科学的性格を有すると主張する人達のサークルに於いて、時折、奇妙な考え方が生れてくる事がある。それ等の内の一つは、ここで實際取りあげるだけの価値のあるものである。フランス言語学会は一八六六年、この問題に関する総ての討議を公式に禁

止してしまった。

科学が権力やドグマの前に頭を下げたり、こういった禁止令を遵守するものではないといった事を口にする事さえ余計なことである。この不思議な現象は、人間の興味をとらえて離さないし、この事を理解しようとして、その発生原因やその意味、その最も深底にある意義を人々は見い出そうとした。

数世紀の間、古代の哲学者をとらえて離さず、古代の思想家を二つの主要な分野に分岐して行った中心的な問題の一つが語彙の間にある関連性と物質とその名称の間にある関連性についての疑問であった。この領域でもまた、ギリシャの思弁哲学者達が最初の種をまいたのである。

思弁哲学者、ヘルモゲネス（紀元前五世紀中ごろの人）によれば「言語とは言語を使用している人達の間にかける或る種の約束事以外の何ものでもない」といつている。

「なし」は「すもも」と名付けられてもよかつたし、「すもも」は「なし」と名付けられようと人間にとって好ましいものであれば一向にかまわない事であったと彼は解き明かしている。ヘルモゲネスは「言語とは人間の完全に独断的な創造物である」と云っている。

もう一人のギリシヤの哲学者、ヘラクレイトス（紀元前六世紀の人）はこれと反対の立場をとり、語彙は「ナチュラル」な実体を有していると主張した。語彙のもつナチュラルな資質の外で語彙を用いる事は、意志を通じ合う事が出来ない事を意味しており、もしそのようにすれば、ただ騒音を作り出すだけだと言っている。人々は自分の好みによって、どのような名称であれ、どういったものであれ、物質に対して勝手に名前を付ける事は出来ないが、総ての物質は物質のナチュラルな資質にかかわる自分固有の名称を有しているのだと言っている。ヘラクレイトスの考えによれば、物体と物体を意味する語彙との間には、或る種の決定論が存在するとしている。こういって考えを人々はどう理解したらよいのであろうか。

偉大な思想家、デモクリトス（Demokritos）（紀元前五世紀の人）は語彙を「アガルマータ・ホネエンダ」と名付けた。それは「音像」という意味をもっている。ギリシヤの唯物論者によれば、語彙とは自然界が人間の心の中に投影され、それは必ずや明瞭な音の複合体といった形で、再現されずにはおかないという自然界の映像ではなく、語彙とは石とか銅より創り出された芸術作品と同じく、音より出来上った像であるとしている。デモクリトスは言語に関して、意識的な創造の原則を採っており、ヘルモゲネスが考えていたように独断的な創造といった考えはしなかった。一方、ヘラクレイトスは言語の自然発生といった立場をとる哲学学派に属していた。

こういった議論の本質は、語彙が物体の有する十千ユラルな資質によって、自己の性質を表しているものなのか。あるいは語彙と物体の間にある法則や合意、慣例の上に基づいたもの、即ち多少とも意識的なものであるのかといった疑問に関連したものであった。この問題を論じている書に、プラトンの「クラテュロス」という有名な対話集がある。この書の中で、クラテュロスとヘルモゲネスは、双方の立脚点にたつて、論証や反論を詳細に論議し合っている。プラトンは自然界からもたらされた言語は、思想の中だけにしか存在し得ないのだから、二つの考え方のうちのどちらも正しくないという主張でもって結論づけている。

また、アリストテレス（紀元前三八四―三二二年）は言語に対して大きな関心をよせているが、特に「韻文法と雄弁学」という自分の書の中でその事を述べている。彼は語彙を区分けしていった。彼の仕事は後の世代に大きな影響を与えている。

この分野でもう一つの歩みをなしたのは、エピクロス(Epikuros)(紀元前三四一―二七〇年)であった。言語の最初の形成は、接触、くさめ、嘆息と同様に人間が無意識的に行つたのだというふうには彼は考えた。所が、本来の言語が生れて来るよりも以前に、そしてその言語が生れて来るためには、それ等の奇妙な音声があったい何を意味するのかという事が総ての人にわかるように人間達の間にある種の合意がなければならぬ。――と哲学者は解き明している。――

エピクロスもまた、言語の使用者の間にある合意や少くとも或る種の解明し得ない約束事の中に、言語の最も深い源があるのだと言っている。従つて、彼の観点にたてば、言語は人間の口から自然に発せられる音声の上に成りたつ人間の創造物であるという事になる。

以上の考えはとても簡潔に表わされているとはいえ、古代ギリシヤの哲学者にとつては主要な考えであり、ずっと後におこつて来る言語形成についての指向を示す主たる発芽となるものであった。それ等の主要な考え方を次に示すと。

(1)、語彙は全く「自然に」物体や思想にそなわつていゝものであるという考え方、こういったものに、ヘラクレイトスの観点がある。自然界の資質によつて定められたものとして言語をとらえている、即ち超自然の力による創造物として言語をとらえている繪ての人達は、この事に関し、こういった神秘的で、非科学的な見方と本質的に同様な立場を取つていゝと考へざるを得ない。

(2)、明瞭な音声を発する能力は、人間が生れつき持つていゝのだといゝた考へ方をする人達が居る。これ等の音声を組合せて、諸々の物体や思想、資質、行為に對し、任意にあるいは断的に名前をつける事が出来るのだといゝている。この考へはヘルモゲネスの考へでもあり、同

じような考えを、ジョン・ロック(John Locke)は、特に“An Essay Concerning Human Understanding”(人間の理解に関するエッセー)と言う彼の書の中で表明している。それは彼の哲学とも調和している。ロックは思想を形成するためには特別な文字がなくても可能なのではないかと考えた。彼は人間の頭脳とは、単に概念を形成する能力を有しているだけでなく、言葉のこういった助けもなしに、あらゆる文章を作り出す能力を有しているのだと信じていた。ロックの観点にたてば、古代の人間達は自分の有している諸々の思想を、全く独断的に、音声をもつていい表す事が出来、自由に使いこなせる明瞭な音声からなる言葉を用いていた事になる。言語の発生についてのロックの特色ある発言を次に示すと

“明瞭な音声と特定の思想の間に、あたかも存在するかのような、あらゆる生れもつた結びつきによってではなく、なぜならこういった事は総ての人間にとつてたつた一つの言語にしか在り得ないであろうから、その思想に独断的につけられた音声から成り立つ、特定の語彙による意図的な権能によって、本来この目的のためにうまく採り入れられて来た言葉は、思想を表現する道具として人間によって使用されて来たのだと我々は理解し得るのである。”(28)

この意図的ではあるが、殆んど独断的な言語の創造といった、ジョン・ロックの考え方によ

れば、膨大な異った言語を生み出して行かざるを得ないという事は、自ずと明らかである。高度な発展を遂げて来た現代の言語の有する明瞭な音より生れる語彙形成の可能性は、ほとんど無限に近いものである。

偉大なドイツの哲学者、ライプニッツ (Leibniz) は "De Arte Combinatoria" (人工配列論) というよく知られた自分の書の中で、二十三文字から出来る異なる語彙の数は、二五、八五二兆を超えるといっており、二十四文字から作るとすれば、語彙の数は六〇〇、〇〇〇兆にも達するのであろうと言っている。それは語彙というより一より正しく言えば一 お互いに異なる音の組合せが出来るという事を言っている。

既に存在する明瞭な音声から、独断的な語彙の創造がなし得るといった立脚点を受け入れるとすれば、無限の創造可能性は必ずやお互いに無限の相違を有する言語の膨大な多様性を必ずや引き起して行くであろう事は明白である。お互いにどういった関連性もち合せない二つかそれ以上の言語の中に、全く同じか似かよった思想を表す二つの全く同じか似かよった語彙があったとしても、それは全く純粋な偶然でしかない。実際、ロックの思考の枠外でさえ、イタリア語 "donna" と日本語 "onna" は言語的にはどういった共通性も持ち合せていないのだが、似かよった音声よりなるその語彙は、双方とも同じ「女性」を意味している。一方 "in" という接尾辞も女性を意味するものとして、幾つかの言語の中に見られる。ラテン語 "regina" イ

タリア語 *regina* フランス語 *reine* ドイツ語 *königin* エスペラント *regino* 等々。

(3)、三つ目の考え方として、話し言葉は自然が奏でる音の模倣から始まっているのだという主張をなす人達が居る。原始人は自然界の中にある自分の囲りの種々の音を間断なく耳にする事によって、動物達や物体、自然現象に、それが発したり、引き起したりする最も特徴ある音を擬すという形で名前をつけていった。擬音語の発生や言語の形成についての理論を展開し、特に名声を博していったのは、ドイツの哲学者 J・G・ヘルダー (Johann Gottfried Herder) であつた。言語の発生は成熟した胎児が母親の体内から自ずと生れてくるように、本能の有する内的な衝動による所が大である。最初の言葉は人間の注意力が物体の有する最もはつきりした特徴をとらえ、五感を通して得られた感情の高まりが言葉として生れいづるだけの成熟度に達した時形成されたのである。例えば、羊を見てその鳴き声を聴き、人間はその動物の最も特徴ある、はつきりした目印として鳴き声を記憶しておく。後に同じ動物と再び逢つた時に、人間はその鳴き声を模倣して動物に名前をつけていった。

擬音語による理論は、語彙と物体の間にある「ナチュラルな」結合性とか従属性についての仮説に近い。

少々つつこんだ研究は、総ての言語の中に、實際そ、ういつた幾つかの擬音語のある事を明らかにしているが、それ等の数は非常に限定されたものである事も明らかにしている。(29) この仮説の上に、真面目な科学的理論をうちたてる事は出来ない。マックス・ミュラーは少々あざけて「バウ・ヴァウ」の理論と名付けており、全く根拠のない理論だとして相手にしていない。彼は言っている「實際擬音の上に成りたっている語彙の数は、全体の語彙の中の割合としては……」極く小さなものである。従って、言語は何かもつと他の起源を有している……は、ずだという確信がわれわれにはあるのである。(30)

(4)、もう一つの仮説として、原始人は明瞭な言語を持っていたのではなく、いつも成る種のうめき声や嘆息あるいは叫び声を発声していた事は明らかであるといった主張をなす人達が居る。これ等の音声が少しずつ物体や現象、行為の名前となつて行つた。

多くの哲学者の中でも、特に偉大なフランスの思想家、E・B・コンデイラック (Etienne Bonnot de Mably de Condillac, 1715—1780) は、その考え方は動物に劣る存在として人間を考へる思想であるという事を強調して、擬音語理論に対し声を大にして抗議した。

これ等の哲学者達は、人間の祖先が自然界から、動物、風、波といったものから、……

(犬が)ほえる声、(ネコ)が鳴く声、(鳥の)さえずる声、うなりとどろく音、きしる音を学び取らねばならなかつたという考えに同意する事が出来なかつたのである。

叫び声やうめき、しゃくりを作り出しているのは人間自身である——と彼等は云っている。

——人間が自然界からそれ等を借りて来たり、動物の鳴き声をまねたりする必要等なかつた。人間が恐怖とかよろこび、かなしみ、愛、憎しみに触れたり、遭遇したりした時に発声したそれぞれの音声を、人間達は言葉としていった。

人間の身振りと結びついた叫び声とか、あるいは不意の叫びを、かなりの哲学者や言語学者は言語の源泉としてとらえている。

この理論によれば、言語は自発的に表現された身振りや、自発的に発声する音声によって、はっきりした意味をもつ事になる。だから、話し言葉や身振り言語は、自発的に発声される音声とか、自発的に表現された身振りによって組立てられていると言える。幼児が意識的に発声する音声や身振り動作で、自発的な感情の動きを表現するように、話し言葉が自発的な身振りや音声によつてはなされるといふ事に着目して、これ等の著者達は言語の原形とか言語以前の形として、このような自発的表現手段を思考していた。この思想は幅広い支持を得ている。この思想を支持している学者は、E・B・コンディヤックの他にも、C・ダーウイン(C. Darwin) H・スペンサー(H. Spencer) W・ヴント(W. Wundt) H・ヘフディング(H. Höffding)・エルサ

ンフ (W. Jerusalem) 等々が居る。(31)

諸種の状況の中にある人間のナチュラルな反応としての自発的な叫び声に、もっぱら言語の発生が依存しているという仮説を、マックス・ミュラーは既に引用した書の中で「プフーフ」の理論と名付けている。

言語の源泉としての身振りについての思想は、後にマールの理論の基盤として受けつがれて行った。

(5)、言語を使用しようとする人達の合意をもって、言語の発生をエピクロスが説明したという事はすでに述べておいた。

今日迄の、多くの哲学者や言語学者でさえ、色々形を変えてはいるが、同じ考え方をしている。例えば J・J・ルソー (J. J. Rousseau) は総ての社会秩序の基本である社会契約に於いての考えにあてはめて、合意の上になり立っている言語の発生を想定した。だが、ルソーは言語をもたない人間がどうやって、解決すべき問題を討議する事が出来たのか、それぞれの思想を意味するであろう音声について、音声の組合せについて、言語の創造や機能について、どのようにして合意に至る事が出来たのかといった事を明らかにしていない。同じ思想が傑出した世に広く知られた、現代の言語学者、マリオ・ペイに於いても見られる。彼は若者向けの書

の中で次のように述べている。

「特定の音声や音声の集りは、双方あるいは総ての人達にとって、同一の意味を持たなければならぬという事を、二人かそれ以上の人達が決めた時に、言語が実際に始まった。この考え方の上に、言語は生れて来たのである……」。

我々が確認する次の事柄は、我々が想像するように、言語がもし、お互いの合意の上で成長して来たものであるとすれば、世界中に多くの異った言語が存在するという事実さえも、驚きに価する事ではない。(32)

マリオ・ペイは何時そういった合意がなされたのか、どのようにしてお互いの合意がなされたのかという事を述べていない。同じ言葉を話す人間達が、或る種の契約の形を有するあからさまな合意の基に、話しをしているという事はあり得ない。「合意」という語彙は、ルソーが考えていたよりも、全く違った他の性格を有しており、全く他の手段によるものであるとマリオ・ペイは言っている。このようにして、言語の発生や発展を説明して行く事は、若者向けの書の中で述べているとは言え、物事を単純化するというよりも、それ以上の意味がある。

マックス・ミュラーは協約合意についてのエピクロス思想を、ダーウィン説、即ち自然選

扱とか——彼がそれを自分の書「言語学講義」の中で名付けているように——自然淘汰の考えでもって置き換えている。

では、「自然淘汰」の下に彼は何を理解していると言うのであろうか。

多くの感覚的印象は、心理的映像とか知覚を生み出し、数々のこの種の知覚は特殊な概念をもたらす。一定の数の感覚的印象は、泣き声とか叫び声といった音声表現を引き起さざるを得ないし、音声の擬倣は感覚的印象の一部を形成し得るのだと理解する事が出来る。それと同様に、数多くの種類の音声表現は通常の表現に置き換えられ、通常概念に關係している文字としての語根となつて行くのだ……と理解する事が出来る——とマックス・ミュラーは言っている。——(33)

通常概念が形成する問題を取り扱つてみて、著者はそれが偶然に形成されたものではなく、確固とした法則にそつて形成されて来たものであると言つてゐる。この法則は人間の理性自身の中にあるのだとミュラーは確信している。

この法則は外部の理性に答える、我々がそのように言えるとすれば、自然界の理性に答

える我々の内的な理性である。自然の選択は……常に変であり、常に理性的な選択
……である。あらゆる偶然の知覚は、たった一つの……最も力強い、最も有益な、一
般的概念に集約される事はない。従ってそれ等が或る種の名前をもつようにはならない。(34)

ミュラーは例えば、総て真青であったり、総て真赤であるといった花に關係する語彙は存在
しないし、馬とか牛の思想を内含していたり、犬とか猫の思想を内含している語彙も存在し得
ないのだと解き明している。(35)

(6)、これ等の仮説や理論的試みによって、言語の發生を説き明かす事に満足し得なかつた数
多くの思想家達は、人間の祖先の言語の芽ばえを理解するために、幼児の言葉のなりたちを研
究しなければならぬという考えに到達した。

この思想は實際とても古くからある。

ギリシャの歴史家、ヘロドトス (Herodotus) は次のように語っている。

紀元前六世紀のころ、エジプトの王、プサメティコスはこの国の言語が最初のものであつ
たのかという事を知ろうとして、乳児が人間の言葉を聞く事が出来ないように二人の新生児を
メスのヤギによって育てるといふ実験を試みた。少したつと、その乳児が言葉を発するように

なった。その言葉はペーコスであった。どこの国の言語が最初のものであったのかという疑問に對して、王はその言葉がフリギヤにあり、その言葉はパンを意味するという解答を得た。そのため、王、プサメティコスがフリギヤ語が人間の最初の言語であるという結論を下した。古代ローマの名高い修辞学の教師、クヴィンティアーノ (Kvintiano) は乳児がおしの乳母に育てられたのであれば、乳児はおしでなければならぬはずだと言った。ジョン・ロックはその乳児の言葉はヤギの声、ベックだけであり、側近がそれにギリシヤの接尾辞—オスをつけたのであると言った。(36)

こういつた実験が実際に試みられたのかどうかといった疑問に関係なく、その逸話自身、興味あるものである。それは非常に古い時代に、古代世界の国々に於いても、言語の起源についての興味の人々の中にあり、人々は子供の生長過程に於ける言語の形成を研究して、言語の起源を説明しようと試みた事を示しているからである。

こういつた観点より言語を研究した科学者の一人に、フランスの哲学者であり、歴史家であり、批評家でもあった、ヒポリート・テーヌ (Hypolyte Taine, 1828—1892) が居る。彼は自分の子供の成長過程を観察し、研究した。

テーヌは生後三ヶ月半に成る乳児が母音だけからなる種々の叫び声を発声し始める事を確認

した。その二ヶ月後に、その乳児は子音の混った声を発声し始め、その叫び声は常に明瞭に発声されるようになった。

最初のころ、乳児は自分の発する音声と思考の間には何の結びつきも持ち合せていなかったが、生後十二ヶ月目に入ると「プーポー」という言葉が彼女には種々の色をした遊び道具を意味するようになり、一才を過ぎ、一才半程になると、彼女はパパとかママ、ワーワー（犬のこと）という言葉が言えるようになった。殆んどこれ等総ての言葉は、自然界の音を擬した二重単音節語であるとテーヌは言っている。生後十七ヶ月目に入ると、その乳児は「アムン」という言葉を言うようになったが、その言葉は彼女にとって「何か食べたい」とか「食べものをちようだい」という意味をもつものであった。(37)

タイネだけでなく、後の多くの科学者達もそうであつたが、中でもF・ガルラング(F. Carl-Anda)は、幼児の発声する「ムン」とか「アムン」という初期の言葉は「食べもの」とか「食べものをちようだい」とか「食べものが欲しい」或いは「食べたい」といった複数の意味をもっているのだと結論づけている。

最近の10年間に於ける幼児の言葉の研究は、大変大きな進歩を遂げた。児童心理学の非常に興味ある諸種の成果を、ここに発表するだけの紙面をこの書は有していないけれども、二つの

重要な事実が一般に確認されて来ているという事を述べておきたい。

(1)、最初の泣き声だけでなく、最初の明瞭に発音される音声は、気に入ったとか、気に入らないといった単なる感情に結びついたものである。

(2)、明瞭に発音される音声は、初めのころは何の意味も持たないが、後にその言葉は複数の意味をもつたものになる。C・W・ヴァレンタインは自分の子供を観察した所、生後一ヶ月の終りころには、泣き声を、空腹とか、痛い、満足しているといった三つの種類に聞き分ける事が出来たといっている。だが、彼はこれ等の泣き声を言葉として受けとめる事は出来ないと言調している。生後三ヶ月目に入ると、主に安心した状態とか、満足した状態にある場合、明瞭な音声を発する「練習」を始める。

明瞭な音声を発する練習によつて得られる成果は、次第にしつかりとしたものとなって行く。その後、乳児は聴き取った言葉をまねし始めるようになる。しかし、まだ、この状態に於ける言葉の活用は、感情に結びついたものである。

最初の「ダア・ダア」(母親が父親を意味する言葉として、子供に教え込もうとした言葉)という現実的意味を有する言葉でさえ、或る共通した感覚上の表れを通して見た父

親から玩具まで広がっている或る普遍的な感情である。「ナン、ナン」という言葉も「ダア、ダア」という言葉が父親から玩具までという意味をもつ音声であるのと同様に、母親が子供に与えている品物の象徴であったり、よろこびの声としてみたりする普遍性を有するものである。(38)

この問題についてのもう一人の専門家、レオポルド・シュタイン (Leopold Stein) は、未熟の表れとして、生後二〇六日目に乳児が最初に使ったマムーアンという表現は、三五四日から六〇二日の間に、自己の欲求を満そうとして、あらゆる人とか、あらゆる食べもの、その他の物や出来事を表す言葉として用いるようになると言っている。そして次のように彼は結論づけている。

この時期にある「語彙」は現実的な文法上の（理論的な）カテゴリーに含まれているあらゆる法則を無視したものである事は明らかである。(39)

言語の発生を理解しようとするれば、生後一年間の乳児の言葉を研究しなければならぬと考へた言語学者の一人に、オット・イエスペルセン (Otto Jespersen) が居る。彼の考へによれば、人間の歴史の中で、最初に使われた言語の比較研究を試みようとするれば、人々は生後、一年間

に話す乳児の言葉に目を向けなければならない。(40)

乳児の言葉　―特に生後一ケ年間の言葉の成り立ち―と原始種族の言語との比較研究を試みてみて、幾人かの言語学者達は、言語の発生を子供の言葉の形成が事細かに解明してくれるという幾つかの共通した面を見いだしている。中でも、原始人が使っていた初期の言葉は、名詞や形容詞、動詞といった違いが見分けられなかったり、或いは主語と述語等々の区別がつかないといった混み入っていて、複数の意味を持った音声であったのだと推断している。これ等の違いは、人類の一層の進歩とそれと平行した言語の発展のおかげで、後になる程より一層はつきりしたものになっていった。

今日では、子供の言葉の研究から、原始人の言葉の始まりを明らかにしようとする努力は、科学的手法に外れたものであるかに見えるが、しかし、この概念は言語の性質のよりよい理解に多少とも役立つものであった。

子供達は両親から言葉を話す能力、即ち、明瞭な音声を発する事の出来る生理的機能を今日受けついでいる。これ等の機能は人類の長い歴史の中で、代々親から子へ、子から孫へと受けつがれて来ている。その発展して来た過程に於いて、人間の言葉の発声器官は、常に発達して来ている。この事からもわかるように、子供の言葉の形成過程が、現代の人達のような音声器

管をもつていかなかった原始人の言葉の形成を解き明す事は出来ないのである。未開地に今もなお見られる未開種族の言語と子供の言葉との比較研究もまた、満足し得る結果をもたらす事は出来ない。なぜなら、オット・イエス・ペルセンが指摘しているように、最も未踏の未開人でさえ、彼等の過去には幾世紀にも渡る言語の「発展過程」を有しているからである。その条件は原始人が生活を営んでいたその時代の条件と余りにも違って来ているのである。更に、総ての子供達は、特定の社会環境の中で育ち、そこから言葉を学び取っているのだという事を忘れてはならない。子供達の誕生の瞬間から、母、父、家族、そしてその他の多くの人達が、子供が何も理解し得ないとわかっていながら間断なく話しかけている。子供達にわかりやすいように自分達固有の言語の幼児ことばを用いて話しかけている。しかし、人間の言語の初期の段階に於ける一つの音声、より詳しく言えば音声の複合体が複数の意味をもっていたという結論をなした場合、その理論は全く正しいものであると言える。これ等の総てが、この概念を受け入れられるものではない事を示している。

(7)、不意の叫び声に人間の言葉の発生を結びつけて考える数多くの科学者達が居る一方、数少ないけれども、身振り動作に不意の叫び声結びつけて言語の発生を解き明かす科学者達が居る。言語の源として身振り動作を研究する思想は、既に古代社会に於いても見られる。世に知られたラテンの詩人、ルクレティウス (Lucretius) (紀元前九八年—五十五年) は "De Rerum

Natura. (自然論)という自分の書の中で、この事に触れている。彼は「まだしゃべれない子供が、自分の前にある物を欲しがる場合に指でもって指し示す」と同じように、本能自身か或る種の音声を人間につくらしただと言っている。

乳児の身振り動作は、感情とか欲求の自発的表現以外の何ものでもないと言われている。この時期の身振り動作は、言語の本質的なものであり、はっきりした思想的意味をもつ意図的象徴として解明出来るものではない。しかし彼は続けている。—— こういった自然な表現しぐさは、意味をもつ、身振り動作に発展していく事が可能であると理解出来ないわけでもない。(41)。

L・シュタイン(L. Stein)もまた、意志疎通の原始的形態としていたる所で身振り動作に触れている。(42) F・ガルランダは、今日に於いてもまた、身振り動作が話し言葉の補助物として、広く使用されている事実を認めて、次のように言っている。

話し言葉は言語全体の中の単なる一部に過ぎない。我々は手をもって、あるいは目、総ての体を使って話しをしているのである。(43)。

その後、人間の言葉が複数の意味を持っていた事を講義している際に、ガルランダはその

言葉で明確に意志の疎通が計れない事柄にぶつかつた時、どのようにして、人間達は理解し合つていたのかという質問をうけた。彼はその質問に「人間は手とか頭、そして体全体を用いる身振り動作の助けをかりて、話し合う事によってのみ理解しあえたのだ」と答えている。(44)

相当な研究的基盤の上に、ソビエトの言語学者であり、歴史家でもあり、人類学者でもある N・I・マール (Nikolai Iakovlevich Marr, 1864—1934) は意志疎通の最初で最も原始的な形は、専ら身振り言語であつたという学術論文を発表している。彼の考えによれば、こういった身振り言語から、少しずつ話し言葉である音声言語が生れ、発展して来たのだと言っている。

(8) John Locke の “The Philosophical Works of John Locke” (ジョン・ロック哲学全集) の中の第三卷、第二章にある “An Essay Concerning Human Understanding” (人間の理解についてのエッセー) ロンドン発行一八四三年から

(9) Koko (にわとり) Kokeriki (にわとりのコケッコと鳴く声、boji (犬のはえる声、maui (ネコのニャオーと鳴く声) iai (ろばの鳴き声) 等々は多くの言語にみられる擬音語である。中国語に於いては多少異っている。例えば、にわとりは Kiao—Kiao と鳴くし、鎖の音は tsiang—tsiang、鐘の音も tsiang—tsiang、ドラム缶の音は kan—kan 風の音や雨の音は siao—siao である。(註、(9) で引用した、マックス・ミュラーの書から)

(30) 註(19)で引用したマックス・ミュラーの書から

(31) 註(26)で引用した、G・レベッツの書から

(32) Mario Peiの書“*All About Language*” ロンドン発行、一九五六年より

(33) Max Müller “*Nuove Lecture Sopra la Scienza del Linguaggio, 1870*”

(言語学新講義)、G・ネルツツイ訳、ミラー発行、イタリア語版、一八七〇年、

(34) Max Müller 註(33)で引用した書から

(35) Max Müller註(33)で引用した書から

(36) John Locke 註(28)で引用した書から

(37) F. Garlanda 註(5)で引用した書から

(38) C. W. Valentine “*The Psychology of Early Childhood*”

(児童心理学) ロンドン発行、一九四二年から

(39) Leopold Stein “*The Infancy of Speech and the Speech of Infancy*”

ロンドン発行、一九四九年から

子供の言葉の発達についての簡潔ではあるが、大変によく整理され、わかり易い内容の論文が、註(23)で引用したW. E. Collinson “*La Homa Lingvo*”(人間の言葉)という書の中に紹介されている。

(40) Otto Jespersen 註(3)で引用した書から

(41) C. W. Valentine. 註(38)で引用した書から

- (42) L. Stein 註、(39)で引用した書から
(43) F. Garlanda 註、(5)で引用した書から
(44) F. Garlanda 註、(5)で引用した書から

5、多様化した言語から統一言語へ

あらゆる言語についての問題に関してマールは本質的に新しい唯物理論を確立したが、言語学が今日までに到達した言語起源の考え方についての実証的な結論をも、もちろん活用している。自分の理論をN・I・マールは「ヤフェード理論」あるいは「最新の理論」と名付けたが、今日この名の下に、彼の理論は世に知られている。(45)

長年の研究と調査、分析の結果、マールは幾世紀にも渡って人間と科学をとらえて離さなかった幾多の疑問に解答を与えている。

言語創造に於ける人為の介入の程度について、言語形成の手法について、あるいは一元発生説が正しいのか、多元発生説が正しいのかといった重要な問題を、マールは多くの書物や研究論文、雑誌の論説の中で解き明している。これ等の疑問に関する主要な彼の結論の要約を紹介しよう。

最初の言語は全く音声を併なわれない手による合図、またはマールが名づけているように、「運動学上の」言語であった。類人猿から少しずつ今日の人間の姿が形成されていった時代に、我がの祖先は最も自然な意志伝達機能として手を使用していた。手は真実、主要な道具であった。それは他のどの器官よりも、素朴で、具体的な思考手段の中心に直接結びついたものであった。マールは言っている。

「手による会話は、自己の思想や象形概念を表現する可能性を与え、共同生活を営んでいる人達との意志疎通を計る可能性をもたらすだけでなく、それは想像をかきたてる可能性を与えたり、その時代にはまだ自分達の共同生活に組み込まれてはいなかったが、個人生活には欠かせなかつた文化をもっていた原始人の一団のような見知らぬ種族や、部族達との意志疎通を計る可能性を与えるものであった。」(46)

身振り言語でもって、完璧に、どれ程の意志疎通が計れるのかという疑問に対して、マールは次のように言っている。

現在に於いてさえ、世界の片すみのいたる所に、身振り言語の多くの实例がある。オーストラリアに住む、例えば、ワラムンガ族(Warramunga)の未亡人は、夫の死後、完全に十二ヶ月の間、どんなさ細なことでさえも、しゃべってはならない。その期間中、彼女達はもっぱら身振り言語によって意志疎通を計っているのである。未亡人達は習慣的にこの方法が身につけてしまつて、禁止期間が過ぎ去つた後でさえ、音声言語で話すよりも、身振り言語を使つてお互いに話しをしようとする傾向がある。レヴィ・ブルーフ(Lévy-Bruhl)を引用して、彼女達が野外で会合を催している時、ほとんど完全な静寂がその場を支配する事がある、それは彼女達が指や手、腕を用いて活発な会話をしているからであつた。余りにも早く話す彼女達の身振りをまねする事は至難にさえおもわれたと彼は言っている。手を用いて話す言葉はアメリカ中にある。異つた種族に属するインディアン達は、総ての者が自分達固有の音声言語を使って話す場合、お互いに理解し合う事が出来ない。だから「彼等はお互いの意志疎通を計るために、身振り言語を活用している。」アメリカの探険家は「マールは続けていっている——身振り言語の部厚い文法書を書く事も可能であるかもしれないと主張している。身振り言語の豊富さは、異つた種族のインディアンが、お互いに指の動きや頭の動き、足の動きだけでもって意志を通じ合いながら、二日間を過したという事実を話せば十分に納得が行くであろう。(47)

マールの考えによれば、手を用いて話す言葉は数十万年とは言えないが、数万年は続いたであらうと言っている。

大自然の猛威に対する戦いや、労働の中で、類人猿のかつての前足は次第次第に新しい要求に叶ったものとなっていった。それ等は次第／＼に、基本的な人間の器管となつて行くと同時に、人間の生活を支える武器となつていた。

新しく形成されていった器管をもつて、石を投げつける事を覚え、食べ物を取つたり、外敵から身を守る手段としていった。

彼等は――既に旧石器時代の中に於いて――使えそうな木の枝をたたき折つたり、たたいて穴をあけたり、穴を掘つたり、切り取つたりするためのけい石より作り出したくさびを使いこなしていった。毎日の労働の中で、絶えず活用してゆき、同時に自分達の群れの枠内でのお互いの意志疎通手段として用いられていった前足は、常に発達し、鋭敏になっていき、きめ細かな動きをするようになった。この事は道具としてのそれ等の活用を絶えず向上させていくと同時に、意志疎通手段ともなつて行くといった新しい機能を備えてゆき、それ自身の本来の資質を本質的に変えていったという程の変化をもたらした。それは手となつていった。

人間の祖先、後に原始人は種々の音声を発する能力を持つようになっていった。彼等の始めのころの音声は SAL. BEL. JON. ROSH であつたとマールは推断している。これ等の複合音声の総ては、同音階にある一つの音として喉から発せられる重苦しくて、低い音声であつた。その後の話し言葉の発展を可能ならしめて来たのは、これ等の音声が喉頭や口腔から発声される音律の高い音に代つて来て、発音に差異が生じて来た事に始まつている。(48)

原始人は最初のころ、何等、意味をもたないこれ等の複合音声を発声していた。これ等の音声は少しずつ何らかを伝える信号となり、後にそれは人間集団を取り囲んでいる利害関係をもたらず現象の印、あるいは代用品（信号）となつていった。音声と物体、あるいは現象との間に最初の結合が生じて来た。

未だぼんやりとしていて、混乱したものできえあつたその結びつきは、音声とそれが意味する現象との間に、継続的に起つて来た象徴的な結合より他の何ものでもない話し言葉にとつて本質的な要素となるものであつた。

この真に革命的な可能性について、人間が意識し始めるまでに、数千年の歳月を過ぎねばならなかつた。手と目が口唇や口腔といった頭脳と直接に結びついた頭の中に集中された機能に

代行されたその瞬間——マールは言っている——革命的な意義が大きなものとなっていった。

この可能性を知ってしまえば、人間はそれを活用していく道を必ずや進まなければならぬ。身振り言語はまだ長い間、主要な意志疎通の手段として用いられていた。それは音声言語によりだんだんと補足されていくようになっていったが、まだその音声言語は数多くの物体、現象、環境、あるいは行動といった人間の集団の生活手段に関する総ての事柄についての非常にぼんやりした複雑で、種々の意味を有する概念を持つものであった。このようにして、例えば「手」という言葉は単に現在使われている手という意味だけではなしに、力とか力強い、あるいは権力とか権力のある、あるいは富とか神、理性……といった意味を有していた。(49)

特にその中でも、理性という意味が重要である。こういった意味を「手」という語彙は、幾つかの言語の中で持つており、それは例えば、アルメニア語、カルトベラ語、或いはロシア語の中にみられる。(50)

この事ほどの程度、原始人が手と自分の精神とを結びつけて考えていたかを示すものである。この事は、原始人が同じ種族の人達との意志疎通手段として、何を用いていたのかといった重要な事柄を解き明すものでもある。

手による会話から、音声言語による意志疎通へと少しずつ変化して行く過程は、一千年の歳月を費している。(51)、音声言語が発展し、成長を遂げていき、微妙なニアンスの違いが音声言

語の中に芽ばえて来ると、次第／＼に身振り言語を押しやっていった。とはいっても、今日でさえ、この身振り言語は人間の会話の中で部分的にはあるが使用され続けている。初期のころ、未発達状態にあった音声言語によって、補足され、使われて来た身振り言語は、後には音声言語の単なる補助役をかって出るだけになって行き、その役割は逆転していった。音声言語である語彙を強化し、色づけし、微妙なニアンスの違いを表す身振り言語は、今日の日常生活の中でさえ、まだかなり重要な役割を演じつつづけている。その大いなる真価が演劇とか雄弁法といった特に二つの芸術分野に於いて今日、發揮されている。この事から、この書の第二部に於いて、身振りの問題を特別の注意を払って述べることにしている。

起源語の数についての問題は、多元発生説を取っている「ヤフェード理論」の中で説明されている。人間同士の意志疎通を計る最初の言葉が身振り言語であり、人間自身の進化発展をうながした長い年月の中で、少しずつ我々の祖先が音声言語を形成していったとすれば、明らかにその言葉は統一された一つの言語ではなかったはずである。マールによれば、「言語の始まりには」一つの言語があったというのでもなく、複数の言語があったというのでもない。無数の人間の集団の総てが、自分達固有の言語を創造していったのであるといっている。従って、音声言語が芽ばえ始めていった時代には（約一千年の間）、非常に多くの多様化された言語が存在していたのである。

「最初のころ、多くの言語が地球上に存在していた——とマールは言っている。——それ等の言語はお互いに交りを持って変化していったり、合流し合ったり、吸収し合ったり行ったりしたが、中には分割されていくものもあった。この結果、言語の結合が起ったり、分割が起ったりしながら、流動してゆき、よりいつも言語の数が減少していく方へと現在も流動し続けている。この事は、最終的には将来の統一された人類に、一つの共通語を与えずにはおかないであろう。」(52)

他の箇所で、マールは遠い過去にあつた言語の多様化社会から、おそらくは近い将来に於ける統一言語社会へと導く、普遍的な発展過程を力強く強調するといった同様な考えを表明している。「ヤフェテード理論」は人類の歴史が一つの唯一なる言語を用いて始まつたのではなく、人間の歴史は言語の多様化社会から、全人類の統一言語社会へと進んで来たし、進んでいるのだと教えている。

マールはもちろん、種々の言語の間にある種々の語彙（語根）の相似や文法（構造）上の相似、あるいは音声学上の相似といったものを見落しているわけではない。この事実を、彼は仮定したかつて存在したかもしれない唯一の起源語についての根拠のない主張をもって説明するのではなく、諸々の人間の集団である遊牧民の群、部族、種族、民衆、等々に属する生れつき

異なる言語同士の交わりや融合、たまに起る分割、そして新しい結合、語彙の貸し借りといったもので説明している。

マールの理論の内の幾つかは、受け入れる事の出来ないものである事は確かである。(53)、とは言え、言語の進化発展についての今まで紹介した理論的帰結に対し、他の科学分野に於ける最も新しい発見が力強い裏づけを立証して来ている。

(45)、他のヶ所で述べたように、言語の樹枝状系図の中で言語は血縁関係によって種々の族や群に区別されている。それ等は「高貴」(アーリア語)とか、聖書の中に出てくるノアの息子の二人の名、セムとハム(セム語、ハム語)といった名がつけられている。三人目の息子の名、ヤフェタは用いられていない。マールはその名前を、自分が発見し、研究して来たその当時まだ樹枝状系図の中に組み込まれていなかったコーカス地方の言語につけた。名前はもちろん、どんなものをつけても良いというものではなく、それなりの規定がある。これについては「A. P. Andreev, "Revolucio en la Lingvoscienco" レイブニッツ発行、一九二九年を参照するとよす。

ヤフェテード理論についてのマールの著書には、論評等を収集した「ヤフェテード理論の発展過程」一九二六年、モスクワ・レーニングラード発行、「ヤフェテード理論」パーク発行、一九二七年がある。

(46) Nikolai Jakovlevich Marr. "Po Etapam Razvitiija Jafeticeskoj Teoriji" (ヤフェテ

ド理論の發展過程)モスクワ・レーニングラード発行、一九二六年より、
 (47)、特にアメリカ・インディアン言語研究の分野で偉大な貢献をなしたアメリカ合衆国の
 科学者、E・サピール(E. Sapir)は身振り言語についての研究報告をしている。身振り言語は
 異った言語を有する種族同士との意志疎通の便宜を計る最適な言語であると彼は言っている。

Edward Sapir. "Selected Writing in Language, Culture and Personality"

re-edited by David. G. Mandelbaum, London. 1949.

を参照するとよい。

(48)、A. P. Andreev 註(45)で引用した書から

(49)、最初の言葉は名前であったのか、それとも行為を意味するものであったのかという疑問
 に次のような解答が与えられている。

偉大なスコットランドの科学者(経済学者)であり、哲学者でもあった、アダム・スミス
 (Adam Smith)は、世に余り知られていない自分の書の中で、動詞は人間の使った最初の意識的
 な言葉であったと述べている。

名前はそれ程重要なものではなく、それ程急いで必要とされるものでもなかった。と彼は
 言っている。物を指さしたり、まねたりする事は出来るが、行為を同様の方法で表現する事は
 出来ないからである。

動詞は言語形成過程の中で、最も最初の人間の行為と共に生れる事が必要であった。それ
 はどんな主張も、或る種の動詞の助けなしには表現する事が出来ないからである。原始人は
 ライオンを見て言葉を作り出したが、それは「来た」という一言であった。その後の言葉の発
 達によって、人間達は種々の物体に名前をつけて行き、「来た」という言葉に名前をつけ足して

いった。熊が来た。狼が来たという表現をした。——と彼は言っている。アダム・スミスの書
“The Theory of Moral Sentiments” (道徳情操論) の中の “Considerations Concerning the
First Formation of Languages” (初期の言語形成に関する考察) の章を参照するとよい。

J・Gヘルダー (Johann Gottfried von Herder) もまた、最初の言葉は行為を意味するものであったと考えていた。これ等の学者の中にあつて、スコットランドの哲学者、ドガルド・スチュアート (Dugald Stewart) は異なる見解をもつた異色の学者であつた。最初の言葉は名前 (名詞) であり、一方動詞は身振り言語を用いていた。——と彼は言っている。双方の見解とも誤つた考え方をしている。彼等は、原始人が有していなかつた思考能力を当てはめて考えている。音声言語が形成されていつた時代の我々の祖先は、今日のような思考能力をもちあわせていなかつたのである。最初の言葉はどのような特別な文法上のカテゴリーにも属しておらずに、その言葉は状況に応じて広がりをもつ、幅広くて、不確定な意味を持つたものであつた。

(50)、「手」を意味するロシア語の語彙は、*ruka* である。それは *rushit* (*ruhnut*) という動詞から変化していつたもので、更にそれは *ruh* から、「精神」を意味する *duh* or *duša* と変化している。同様な語形変化がクロアチア語やセルビア語の中にもある。

(51)、音声言語以前に、人間は各種の体の器官の動きをもつて、理解し合つていたのだという考えを、ジョン・ロックは発表している。アダム・スミスは、言語起源に関する論文の中で、ロックの考え方を支持し、人間は「お互いの同意の下に、定められた意味をもつ人工の言葉が必要であると考える始める、まで身振り言語を用いていたのだと主張している。

(52) A. P. Andreev 註(45)で引用した書から

(53) N・I・マールの理論の中で、私が受け入れられない点があると考えているという意味

は、マールに対しての言語学者のいかさま言行とかのしり言行や一九五〇年以前にスターリンやその部下達が行った言語学上の分野での彼等の行為や攻撃を支持するという意味では決してない。

マールに対する、スターリンの行ったキャンペーンの本当の意味する所は、政治的なものであり、スターリンはマールの理論に実際異論があつてなしたという単なるそれだけのためではなく、マールの理論は社会主義、大ロシアの利害關係に答えないばかりか、「社会主義の国際語」としてのロシア語を栄光あるものにしようとした彼の考えに答えないものであつたがために、マールの学説を公然と否定したのである。

この事を L. Laurat はフランス語で Staline, "La Linguistique et L'Impérialisme Russe" Paris, 1951. (スターリン、言語学とロシア帝国主義) パリ発行、一九五一年というタイトルの下に、とてもすぐれた研究の成果を発表している。

6、人類学は何を言わんとしているのであろうか

純粹に言語学上の観点からのみ音声言語を見たとすれば、人々は言語を十分に理解しているとは言えない。意志疎通のために、言語を用いる可能性は話したり、聞いたりする生理能力によって規定されている。この事からも、話したり、聞いたりする器官の生理は、言語の学習の中で、重要な位置を占めていると言える。生理学は言語と思想の間に關係している精神作用の観点から、特に言語を論じている。しかし、言語は歴史的事実であり、この事からも歴史は言語を無視する事が出来ない。幾多の科学分野に於いて、言語はあらゆる意味で研究の対象となっている。独特な風貌をもったユニークな存在であったホモ・サピエンスのように、動物の世界から人間が形成されていったという考え方をしている科学の分野である人類学は、言語の解明にとって第一級の意味をもっている。

地球のあちこちで、我々の祖先の化石が発見されて来ている事は、よく知られている。これ等の化石の研究の成果により、――しばしば頭骸骨の一部であったり、その他の骨の一部であったりするのだが――人間形成のとてつもない歴史を、系統だてて再建する事が出来たのである。この簡潔な言語論議の枠内では、ただ幾つかの本質的な事実だけを記憶しておくだけで十分であろう。

最初の疑問は、人間と動物との間にある区別がどういった所にあるのかといった事である。純粹に生理学上の見方よりすれば、地表面をはって歩いていた時代には、動物の世界の枠内にあり、少くとも人間と動物の区別は、人間が立つて歩けるようになった時に始まるのだとしている。この考え方は人類学の考え方と同一である。しかし、これだけでは不十分である。眞の決定的な基準は、自分で作り出した道具と、道具と結びついて平行して使われていた初歩的な言葉の創造である。「手と言語、それが人類である」とJ・ヴァンドリエス(Jacques Vendryès)の書“*Le Langage*” (言語)の中で、ヘンリー・ベル(Henri Berr)は言っている。そして次のように彼は続けている。

“動物であった歴史の終りを告げ、人間の歴史の始まりを意味するそれは、手の発明――
もつとはつきり言えば言葉を意味する身振り言語の発明であり、それは現実的な論理の決

定的な発展や精神的な論理の決定的な発展をうながしていった……と我々は考えるのである。(54)

生命はおよそ一〇億年前に地上に発生し、約一億七〇〇〇万年前までの古世代は無脊椎動物である魚とか両生類の時代であった。約六、〇〇〇万年前までの中世代は、は虫類の支配した時代であった。第三世紀は六、〇〇〇万年前に始まり、この時代には、ほ乳類が地上に広く棲息していたがその中に混って最初の最も原始的な霊長類がいた。一〇〇万年前に始まった第四世紀には少しずつ人間が形成されていった。

解剖学的には、人間は猿の祖先や猿と一緒に霊長類のグループに属している。猿の中に、解剖学的観点から見て、人間に最も近いとされているものに、尾のないチンパンジーやゴリラ、オランウータン、手長猿がいる。T・H・ハックスリー(Thomas Henry Huxley)によれば、人間とゴリラ、或いは人間とチンパンジーの間にある構造的な違いは、下等なサルとゴリラを分割する違いの差より小さいものである。だから、今日では類人猿科(Parapithecidae and Pongidae)とホモ・サピエンスを含む人科(Hominidae)と人科の祖先は、ホモイード(Hominoidea)と呼ばれる一つの共通類に一括されている。他の猿から発展して来た東洋の共通類にCercopithecoideaがあり、一方、アメリカや西洋の猿はCeboidaeと呼ばれる第三の共通類を形成している。

最初の最も原始的な霊長類は、第三世紀の初期、およそ六、〇〇〇万年前に現れた。彼等はパレセオセン期や始新世紀の中で、一〇〇〇万年の間増殖し続けた。およそ三、〇〇〇万年前の漸新世紀になると、きわめて原始的な類人猿と最も原始的な普通の猿との区別がはっきりとして来た。次の中新世紀（およそ二、〇〇〇万年前）には、類人猿はすでに広い地域に棲息していた。この事を実証する化石がヨーロッパやアジア、北アフリカ、東アフリカといった広い地域で発見されている。これ等の早期の類人猿の或るものは、既にホミニーデに変化しており、そのうち最も古いとおもわれる化石が現在までに発見されているが、それは早期の最新世紀に属するものであった。

そういった大昔の時代の密森の中に、二種類の猿が棲息していた。一方の猿は四本の足を使って枝から枝えとび廻っており、もう一方の猿は、片方の前足で枝をにぎり、もう一方の前足で次の枝を捕まえ、体をゆすらせながら枝から枝へと渡り歩いていた尾のない類人猿の祖先であった。彼等は二本の前足を使うというすばらしい技能を発達させてゆき、本当のアクロバットを演じるようになっていった。

多くの類人猿の祖先は、その後もずっと木の上で生活し続け、彼等は猿のままだった。尾のない人間の祖先の幾つかのグループは、森林のまばらな土地の地表に降りて来て生活するよう

になり、少しずつ新しい環境に適合していった。新しい環境の中で、すでに熟達した二本の前足をもったこれ等の類人猿は二本の前足を他の目的のために活用しながら、二本の足だけでうまく歩けるようになっていった。平行して起って来た頭脳のすばらしい発達は、世界の歴史の中で起った最も革命的な変革の中の一つを引き起して来た。それは人間の誕生であった。

最も原始的な類人猿の中に、ケニアで発見されたプロコンスル (*Proconsul*) の化石がある。

幾人かの科学者によれば、ホミニーデ (*Hominidae*) の多少とも近い祖先であろうといっている。二本の前足と二本の後足の長さの関係から、足の形から割り出して見て、ホミニーデは木の上で生活していたのではなく、地表の上を歩いたり、走ったり、とんだり、跳ねたりしていたのだと結論づけている。最も大きな興味をもたらしてくれるのは、一九二四年に南アフリカ共和国のタウングスで新しく発掘されたアウストラロピテクス類 (*Australopithecinae*) に属する猿人である。彼等の頭脳は類人猿の頭脳に近いものであるが、歯と手足が人間の手足に近いものであるといった所にこれ等の最も顕著な特徴が見られた。鈍器でもって骨折されていたひひの頭蓋が猿人の化石の近くで発見されたという事から、科学者達はアウストラロピテクスは石とかそれに近いもので狩りをしたり、殺したりする能力を持った少くともそれ程知性的な猿人であったと推断している。彼等が実際にそのように行動したとか、最も原始的な道具さえ、自分で作ったのだという証明は今の所ない。

現在までに発見された最初の人間が作り出した道具は、およそ六〇万年前の最新世期の早期に属するものである事が今日までに証明されている。しかし、おそらくもっと後のものではないかとも言われている。所が現在までに発掘されている本当の人類の祖先は、第二氷河期、およそ四十五万年前の最新世紀の中程のものである。これ等の化石は、ジャワ島でピテカントロプス (*Pithecanthropus*) が、北京の近くでシナントロプス (*Sinanthropus*) が、発見されている。四十種にもものぼるこれ等の化石が、現在までに発掘されている。それ等の化石が、ピテカントロプスやシナントロプスは人間に近いものであり、彼等の体はすでにかなり真直になって来ているという事を示している。彼等は願(おとどい)をもっていない。

彼等は確かに火を知っており、おそらくは同種族の猿人さえも共喰いしていたのではないかと見られている。北京原人は、自分達でつくった種々の道具、石器をもっていた。この事から、或る種の言葉もなしに道具の使い方をお互いに話し合うといった事は出来ないし、新しい世代にその経験をうけ継がせていく事も出来ないわけであるから、彼等は意志疎通の可能性を持っていなければならぬはずである。ピテカントロプスやシナントロプスは、およそ五〇万年前の第一氷河期に位置するものであると主張する幾人かの科学者達が居る。

ジャワや北京とおよそ同時代の似かよった類人猿の化石が、世界のあちこちで発掘されている。それ等の中でも、最も重要なものは下顎骨の発見された土地、ドイツのハイデルベルグに

ちなんで名付けられたハイデルベルグ人(Heidelberg)である。ジャワ島や北京で発見された化石と同様、ハイデルベルグで発見された化石にもつき出した頤が無い。

一九五四年、アルジェリアに於いて、ハイデルベルグ人によく似た二つの顎の骨が発見されており、それ等のそばで石器が発見された。幾人かの科学者達は、ハイデルベルグ人は第二氷河期に当るおよそ四十五万年前に棲息していたと言っているし、他の科学者達は、第一氷河期に当るおよそ五十五万年前に棲息していたのだと主張している。

その事はどうであろうと、人間の祖先は、およそ五〇万年から四〇万年前、すでにジャワや中国あるいはドイツ、アルジェリアといった地域に広がって棲息していたのだという事を十分な科学的立証をもって、証明がなされているのである。この事はもっと古い時代の類人猿の祖先が、大きな広がりをもって棲息していたのだという事を立証してくれるものである。そして実際、それ等の化石が、最新世期の化石と同様、世界の各地で発見されている。

次のタイプの類人猿は、その化石が発見されたドイツのネアンデルタールの地名にちなんで、ネアンデルタール人(Heanderthal)と名付けられている。ネアンデルタール人は第三氷河期にヨーロッパやアジア、アフリカといった広い地域に集団をなして棲息していたと見られており、最後の氷河期の終りまで棲息していた。これ等に変似かよった類人猿が、アフリカやジャワに於いても発見されている。これ等の類人猿の特徴として、中でも太い鼻、発達した眉上弓、

頑丈な上顎、立派な歯弓、そして彼等がまだ真すぐに立って歩けずに前かがみの状態であった事を示す少し曲った大腿骨が挙げられている。

ネアンデルタール人の下顎骨は頤いを欠いているが、ピテカントロプス層の古人類よりいずれもその程度は弱い。頭蓋容量は一、三〇〇cc程度で、ピテカントロプスよりも、いちじるしく大きく、完全な形での頭脳の発達は、話し言葉をもっていた事を示している。

パレスチナのカルメル山で、一九三一年—一九三二年に頭骸骨の他、十二本の骨が発見された。これ等の中の一つに構造的に女性のネアンデルタール人であるとみられる骨があったが、それは現代の人間のもつ幾つかの特徴をそなえたものであった。これ以外の洞屈でも、現代の人間の特徴をもつ幾つかの骨が発見されているが、それ等の主たる骨格は、ネアンデルタール人の特徴を有している。ネアンデルタール人は今日の人間を形成していった祖先達と交りを実際にもつていたと考えられている。この事からも、ほとんど真すぐに立って歩き、中でもつき出した頤をもつ今日の人間の祖先よりも古い最後の類人猿としてカルメル山の化石を見る事が出来るのである。

要約すると次のような進化過程を有している。尾のない類人猿の祖先とホミニーデの共通の祖先として中新世に出現した霊長類——二本の足で歩く事を可能とする骨格を有してはいるが、

猿のような頭蓋と小さな頭脳を持った南アフリカの類人猿——最も初期の道具の作成者であり、発達した頭脳をもち、人間によく似た頭蓋をもち、真すぐ歩けるようにはなったが、まだ頤をもたない類人猿（ピテカントロプスと世界各地で発見されている同種の類人猿）——ネアンデルタール人は大きな頭脳をもっており、まっすぐに歩けるけれども、まだつき出した頤がない——ネアンデルタール人と今日の人間の祖先であるホモ・サピエンス (*Homo Sapiens*) の中間にある類人猿として、カルメル山の化石人類があり、その後、ネアンデルタール人は時代と共に消滅していった。

幾十万年にも及ぶ、これ等の進化過程の中で、眉上降起の突出は、全くかげをひそめ、大きな口が前方へと押しやられて来た、一方、鼻の洞を被うとして鼻がつき出して来ている。言葉が起つてきて、広く日常生活の中で用いられるようになっていった事と結びついて顎が発達して来たし、平行して特に舌の発達といった言語器官の発達が挙げられる。話し言葉の最初の基本といったものが確立してからの舌は、大きな仕事をやってのけねばならなくなった。殆んど休むひまなく、毎日、毎日、生れてから死ぬまで、一世代から次の世代へと、それはますます活発な働きをするようになっていき、頤が前の方へ押しやられて来た。同時に、新しい役割を担うだけの広さをもった舌の筋肉が強化されていった。このようにして、数千年の歲月の中で、最終的には今日の形を形成していく基となる顎が形成されていった。

實際、下顎全体が變形して来ており、今日の形をとるようになって来てゐる。手の自由は、人間形成の中で最も重要な意味をもっている。手の動きは、目といつても調和した働きをしており、人間の目は猿の目や幾つかの猿の祖先と同様に、色を識別する事が出来ると同時に、両方の目は視点を一点に合せる事が出来、その事が物体の位置を正確に見とどける事を可能にした。り、物体同士の間にある距離を測る事を可能にしたり、特に重要な事は、手の動きのコントロールを可能にしたことであつた。頭腦の發達は、頭蓋の中で大きなスペースを要求するようになり、頭蓋は薄くなつて行つた。頭腦の中でも嗅覚に関する部分は縮小して行き、視覚に関する部分が広がつていった。数千年の間に、頭腦の中の会話を司る中枢機能が少しづつ進化していった。

人間の起源を調べたり、人間形成の變革の過程を調べていく、比較解剖学や人類学による多くの立証を、発生学が確認して來てゐる。受精した卵子が成長して赤子の誕生に至る人間の個體發生の経過は、初期の人間進化の過程を繰り返しており、原始時代そのままの器官からなる胚の形を（腕、小さなしっぽ、筋肉の組織、動脈、等々）、色々な成長過程の中で再現しながら成熟して行き、現在の人間の器官を作り出していつてゐる。今日の大人の体の中にも、原始時代の器官の遺物がいくつが残つてゐる。広義の意味で、九ヶ月間の胎児のたどる胚の成長過程は、数百万年の人類の進化過程を、走馬灯のように通り過してゐるのだという事が、發生

学より立証されて来ている。

これ等の疑いようもない確認されて来た事実が、言語の多元発生説概念に強い支持を与えている。J・ヴァンドリエスは、言語起源に関する問題は人間の起源の問題や人間社会の起源の問題と切り離して考えられるものではないとはつきりいつている。(55)

今まで確認して来た事柄は、何をでは示しているのであろうか。

先づ第一に、言語はそれ自身でもって、生命を持ってゐるものでもなく、神から与えられたものでもなく、自然に生れて来たものでもないが、言葉は長い年月の中で、人間によつて少しずつ創り出されていったものであるという事をこれ等の事柄は示している。最も単純な意志疎通の手段として用いられた或る種の言語の起源は、最初のホミニーデが最初の最も原始的な道具を作り出した最新世期の初期というとても古い時代にさかのぼるものである。それはピテカントロプスの時代に確かに生れたものであるが、もっと早期に生れていたかも知れない。

ハイデルベルグの下顎骨は、その時代の類人猿が明瞭な音声言語をもっていなかつた事を想定させるものである。H・G・ウェルズ(Herbert George Wells)は、ハイデルベルグの下顎骨は今日の顎よりずっと重く、頤を欠いており、言葉を創り出す舌は、自由に動き廻る事が出来

かねるといった幅の狭いものであると主張している。(56) 他の著者達も、ハイデルベルグの顎と類人猿の顎との間にある相似点を強調しており、同様の考え方をしている。彼等は舌のもつ筋肉の構造との関連性に於いて、ハイデルベルグ人は話しをするために舌を使う事が出来なかつたという事を示しているといつて加えている。

従つて、ハイデルベルグ人とその祖先からホミニーデまでの類人猿は、明瞭な音声を持ち得なかつたけれども、しかし他の方法でもつて意志の伝達を計らなければならなかつたとすれば——彼等が道具を作り出していたという事実から照らして考えて見て、その必要性を満すために、身振り言語を用いていたであろう事ははつきりして来る。この事は人間形成の過程に於いて、手と目がとても大きな役割を担つていた事から考え合せて見て、ますます真実味を帯びて来るのである。

原始時代の人間に於ける意志伝達と思考の最初の形態は、はつきりした特徴をそなえていなければならぬはずだといふ、その事がまた、意志伝達の最初の手法が、手の動きであり、他の体の一部、特に人間のさまざまな心の動きを表現する事が可能である顔の動きであつたといふ概念に、力強い支持を与えるものである。これ等の身振り動作に、初めのころ無意識的にではあつたが、感情の凝結した叫び声をもなつていた。後にその叫び声は、次第に身振り動作のシンボルとなつていった。

ジャワ島で発見されたピテカントロプスの頭骸骨には、人間の会話中枢機能を司る前頭葉の発育徴候が見られる。幾人かの科学者達は(57) この徴候をジャワ原人がすでに話し言葉のきざしを持っていたのだという証拠としてとらえている。

十二万年前に始まり、六万年前に終わった最後の永河期に属する地層から、化石が発見されている。最後の間永河期（およそ十五万年前に始まった）に棲息していたネアンデルタール人について考えてみると、ネアンデルタール人に於ける頭脳の会話中枢機能は未だ完全な発達を遂げてはいないが、口蓋の大きさや、特徴からして、あるいは下顎骨の形といったものから考え合せてみて、ネアンデルタール人は既に音声言語をものにしていただけと考えられる。このように考えてみると、マールが考えていたような、人間の祖先が最初に発声した複合音声は、*SAL. BER. JON. BOSH* であるとか、あるいは他の音声であったかどうかはそれ程重要ではない。何が重要なのかといえは、それはとりもなおさず、音声言語が幾万年もの年月をかけて、とてつもなくゆっくりと、人間や人間のもつ意志伝達器官の進化と相まって形成されていったという疑いのような事実である。話し言葉の漸進的発達は、少しづつではあるが、意志伝達としての手や体の動きによるものから、新しい形である音声言語へと移り変っていった。

所が、意志伝達の最初の方法であった身振り言語についてのこれ等の真実味ある仮説を受け

入れなくて、音声言語だけが最も初期のころから用いられていたのだという考え方をすれば、人間形成の最も初期のころ、即ち最初の道具が作り出された時から、我々の祖先は地球上いたる所に広く生棲していたのだという事実が残る。ネアンデルタール人の化石やその子孫の化石だけでなく、ピテカントロプスやハイデルベルグ人の化石、そしてそれ等の同族達の化石が、お互いに地球上のかなり離れた色々な地点で発見されている。この事から、では、小さな集団を作ったり、小さな群をなして生活していた、まだ足が半分曲っており、まだよちよち歩きの我々の祖先が、この広大な地上で、或る種の統一された言語を創り得たという事を想像し得るであろうか。

全くそうではない。

その事を何も立証してくれない。総ての事柄は、反対の事実を示している。原始時代の我々の祖先は、文字を書いたり、文学について語り合ったり、学校に行ったりする事はなかったし、似かよった言葉のもつ要因を育み、言葉の統一を促進してくれる電話器やラジオ、テレビ、あるいは船とか鉄道、飛行機、その他のあらゆる交通機関をもち合せていなかったという事を忘れてはならない。又その当時の人間は地上のあちらこちらにはばらばらに住んでおり、お互いの接触は殆んど皆無であつたという事も忘れてはならない。我々の祖先は、他のグループから完全に

孤立した形で自分の所屬しているグループの中でのみ、生活していたのである。

こういつた環境の中に於いて、驚く程多くの言語が形成されていつたであろう事は明白である。総ての人間の集団が、自分達固有の言語を創り出し、その言語の形態や語彙の内容は、彼等が生活していた特殊な物質的環境（地理的位置、氣候風土、等々）に依存しており、自分達の生活を支える特殊な周囲の条件（狩り、魚取り、野生の果実の採収、等々）やその時代の相対的な言語の到達水準に左右されていた。

これ等の数多くの言語は、より大きな人間の集団のための共通語を形成しながら、お互いには併合されたり、あるいは単に一方の言語に飲み込まれていつた。又それは逆の経過をたどるものもあり、人間の集団（民族、支族、等々）が分割されていつたり、まとまりを欠いていつた時に、言語は分裂していつた。経済やあらゆる面の社会生活のより高度な、より幅広い形態をつくり出して来たより大きな統一体へと進んでいく途上で、人間達は幾つかの言語から、あるいは数多くの生れ育ちつつある言語からさえ、新しい統一性のある言語を形成していつた。

純粹に社会現象である言語は、経済生活、知的生活、道德といつたあらゆる顔をもつ、社会生活の実態を忠実に映し出して来たし、今も映し出している。言語は人類の発展と共に歩んで来

たし、その發展を助ける働きをしている。大きな社会統一体の創造にいつも大きな統一された言葉が歩みを同じくして来ており、その言葉はその統一体の結合をより強固なものとして来た。大きな社会統一体の崩壊は、彼等の共通語の終焉を必ず引き起して来た。だが、ゆっくりとした大きな歴史の流れの中で、人類はあらゆる種類の分割体（遊牧民の群れ、族、支族、部族、国、一方ではカーストとか階級）から統一体へと向って来ているし、言語もまたかつて数多く存在した多様化したものから、多少とも統一性をもった共通語を創り出す方向へと發展して来ている。(58)

この疑いようなない科学的証明は、国際語の位置や役割についての疑問の正確な理解に対してもまた重要な意味をもっている。国際語もまた、他のあらゆる言語と同様に社会現象である。国際語は正常な流れに対抗する人工的なものとしてあるのではなく、それは反対に言語の統一へと向って流れる本質的な深い流れと完全に調和している事は全く明らかな事実である。更にそれは大きな流れ、即ち、人類の総括的な統一がもたらす言語の大規模な接近といった流れを早めており——この事を証明する人達は、新しい時代を担う世代に生きる人達である。——同時に、それ自身、あらゆる言語の發展線上にあって、發展して来ており、とても高度な、真の国際性を映し出して来ている。

(54) J. Vendryès, "Le Langage" Paris 1921. から

(55) J. Vendryès 註(54)で引用した書から

(56) H. G. Wells, "A Short History of the World" London 1927. から

(57) 例えば V. G. Childe, Elliot Smith, J. G. Kerr, D. Davison, etc.

(58) マリオ・ペイは自分の書 "All About Language" ロンドン発行、一九五六年の中で次のように述べている。

“年と共に民族語が次第に使われなくなって行き、国際語がますます広く、あらゆる場所で、あらゆる機会に使用されて行くであろう。一方、民族語は固有の領土でのみ使用される限定された範囲のものとなっていくであろう。もし、そうなれば、英語や仏語、独語、ロシア語といった言語は、ついには話し言葉としてよりは、文学とか朗読といった目的のために学習される言語——ラテン語やギリシャ語に似かよったものと成って行く事を意味しているのである。”
(一六六—一六七頁)

第三章

社会現象としての言語

言語は或る種の自然、あるいは生物学的現象ではなく、社会現象である。それは言語が人間社会の中で生れ、人間社会の枠内でのみ発展して来たし、発展しているという事を意味している。言語は生物学的法則に支配されているのではなく、社会的法則に支配されている。それは言語の推進者が常に人間の集団であるという事を意味している。それは言語の推進者が「国家」であり、「国家」であらねばならないという意味では決してない。深い思慮やどういった科学的責任観念もなしに、言語の唯一の創造力になって来たものが「国家の魂」であるとか、「国家の精神」であると強調する人達が今日に於いてもいる。

確かに、言語に関する「国家の魂の深さ」その「神秘的創造力」という語句は、詩歌のような響きをもち、美しく聞えてくる。だが、それ等は現実とのかかわりあいを何一つもっていない。言語についてこのように言う事は、例えばエバが蛇とフランス語で話したというのに似ており、非科学的であり、神秘的でつじつまの合わないことである。(59)

社会現象である言語は、社会の中で語彙を得、同時に発展してゆきながら、言語自身、自己固有の文体を形成していった。このようにして、言語は他のあらゆる社会現象（宗教、芸術、政治、法律、流行、等々）と同様に、自己の性格に関わる総ての事柄が、社会との相互作用をもったものとなっている。

1、自然主義的—生物学的概念について

言語の社会的性格が何を意味しているのかという事をはつきり見定めるために、言語がもし次に示す二つの意味をもつ社会現象ではないとすれば、言語は一体何であるのかという事を少々掘り下げて考えてみる必要がある。(a)、言語は人間の形成と平行して生れ育つて来たと同時に、人間の形成を助長しながら生れ育つて来た。従って言語は人間社会の専有物である。(b)、言語の発生、進化そしてあらゆる進化過程の中で起つて来た変容といったものは、個人の気ままな気持の表れとして起つて来たのではなく、言語を支配している力の影響下にあつて、社会の枠の中で、集合的に起つて来たものである。

この問題の答は、言語が或る種の自然主義的、生物学的現象であるという事に成りそうである。その立脚点の最初の最も一般的な帰結は、——多くの理論的帰結に触れる紙面はないが——人間社会の中に脈うっている全く特有の法則ではなく、自然の法則とかあるいは生物学的法則が言語に適用されねばならないという事である。

もちろん、自然の生物としての資質を有する世界の一部として、人間とか世の中をよりよく理解するために、自然の法則を研究していく必要性を誰れも否定するものではない。特に人間の音声器官や聞く、話すといった頭脳の中樞機能の生理、特にその研究がそれ等の器官の発達にまで及ぶとすればまことに有益である。しかし、それ等の研究は話す能力とか、話す能力の発達のメカニズムの理解に大いに役立つけれども、言語の本質自身を何ら明らかにするものではない。人間以外の多くの生物は、自己固有のナチュラルな資質により、種々の音声やうなり声を発し、空腹や不安、恐怖等の幾つかの基本的感情を本能的に表現する。所がこれ等の音声やうなり声は、感情や状態を示す意識的な表現として、それ自身意味あるものではなく、動物固有の音声である。それはせつぱくした生理的表現としてのみとらえ得るものである。幾種類かの動物、特に家庭で飼ひ養はられている動物は、人間の諸種の言葉や暗示といったものに反応するように教育する事が出来る。動物達、例えば犬や猫は泣き声でもっておねだりする事を覚える。おおむはどういった言語であっても、人間のしゃべった言葉をまねしてみせる。この

事をもって、オランウータンや犬、羊でさえも、幾つかの人間の言葉をしゃべれるように教育出来るのだと主張する人達がいる。(60)、所が、これ等の総ては真の意味に於ける。即ち思想を表現したり、意識的な意志伝達や思考の仲介者である音声体系としての組織された特異な媒介者といった意味に於ける言語ではない。犬がワンワンとほえたり、ネコがニャオーと鳴いてみたり、馬がいなないたり、馬がさええずったり、クックツツと鳴いたりする事は出来るが、しゃべる事は出来ない。動物達がこれ等の音声やうなり声を発する場合、感情の表現として発声しているのではなく、喜びや恐怖、苦痛、空腹等々——といったさしせまった生理的感情の表れとしておこなっているのである。話し言葉の生理的基盤は、音声を発声する能力であるのだが——その能力は言語の発達と平行して常に発達して来ている——その事自身をもってしては言語となり得ない。音声や複合音声には特定の物体とか思想が結びついており、他の者が聴いた時に、その音声の有する意味を特定の物体や思想として社会的にとらえ得る時にのみ音声言語として成り立つ。これ等の言語は人間だけがもっており、人々は人間としての形成過程の中で、言語を身につけて来たのである。言語を、特にそういった言語を、人々が社会現象としてではなく、ナチュラルな生物学的現象として解明しようとしたその事について、ここで論じてみよう。

この「自然主義的」思想は、種々のニアンスを有する幾つかの理論の逃げ口としての役目を果している。

倒えば「若い文法学者」と呼ばれる学派を形成しているA・シュライエルや彼の部下達は、ナチュラルな有機体として言語をとらえている。シュライエルは次のようにいつている。「言語は総てのナチュラルな有機体と同様に生命をもっている。それ等は人間達のようにふるまう事はないし、歴史ももっていないのであるから、我々は「生命」という語彙を非常に狭い範囲の意味でもちいている。」(61)、シュライエルによれば、言語の生命は他のあらゆる「生きずいている有機体—植物や動物」の生命と本質的に識別出来るものではないといっている。動物達のように、言語は非常に単純な構造を有するものから、とても複雑な形態へと成長していく過程を経て、最も高度な発展段階に到達したのち、しだいしだいに劣えていくといった老化現象を辿る時期を迎え、ついには死滅してしまうといった発展過程を有している。自然主義者達は——シュライエルが言っているが——それを「逆変性」と名付けている。彼はまた自分の書「ダウインの理論と言語学」(ワイマール発行、一八七三年)の中で、次の言葉をもってその立脚点を明確にいい表している。

「言語は人間の意志とかかわりあいをもたないナチュラルな有機体であり、言語の有する固有の法則に従って、生れ、成長してゆき、発展を遂げたのち老化してゆく、そして最後には死滅してしまふ」(62)

言語は人間の有するナチュラルな資質、動物によって作り出される鳴き声とかうなり声に相当する生物学的存在として、人間に凝縮された部分によって生れて来たのだと他の者達は考えていた。これ等の理論は、実際、言語以前、いや人間以前のホミニーデやホモ・サピエンスの時代の言語をもった、動物の世界からやっとはい出して来たばかりの人間の祖先の言語状態を取り扱ったものと同一である。聖バジールでさえ、子供達は「話すことを学ぶ」のだといった無神論を発表して、エウノミウス (Eunomius) に告訴されたという事よりも、この立脚点の本質を明らかにするものは何もないであろう。子供達は自分の周囲から言葉を学び取ったのではなく、言葉は子供達の人間性自身の構成要素として存在するのである。これが超自然の力によって前もって定着させられていたものであるのか、そうではないのかといった事は、この文脈では大きな意味をもたない。このようにして（音声をつくる器官といった意味ではなく）言語は生れて来たのである。

2、言語と社会

これ等の意味に於いて、言語をナチュラルな、生物学的現象としてとらえる考え方とちがって、他の学者達は、すでにずっと以前から言語を社会現象としてとらえ始めていた。もし言語

が人間社会の中で、単独に存在しているものであるとすれば、社会現象としてのみ言語は解明され得るものである。この概念もまた内部に矛盾を背おった、時折お互いに対立する数多くの理論の逃げ口として役立っている。しかしこれ等の理論は、言語を客観的に社会現象としてみているといった一つの漠然とした共通の顔を持っている。この基本的事実に同意を示さない学者は、少しでも真面目な文献学者や社会学者と言われる人の中には今日一人としていない。もう一つはこの事実の諸々の解釈があつたし、いまでもあるという事である。

この新しい、正確な言語の研究で、最も優れた貢献をなしているのは、スイスの言語学者、F・デ・ソシュール(Ferdinand de Saussure)である。彼は言語と話し言葉、話す能力の3つに明確な識別をなしている。話す能力には種々の形態があり、物理学や生理学、心理学といった多くの領域に関係している。話し言葉は個人的な行為であり、一方話す能力は「個人的領域にあつて、社会的領域にまで及んでいる。」言語自身について、ソシュールは次のように言っている。

言語とは何であるのか、それは我々にとって、話す能力の本質的な要素——それは真理である——の単なる一部にすぎない。言語は話す能力と混同するものではなく、それは話す能力を個人が使つていけるようにするための社会的しきたりであると同時に、話す能力

の社会的産物でもある。(63)

他のヶ所で彼は言っている。

話し言葉を分割してみると、一つには、個人的なものや社会的なもの、二つには本質的なものや副次的なもの、多少とも偶発的なものによって分割する事が出来る。(64)

言語は話しをする主体者の機能としてあるのではなく、それは個人が受動的に習得している産物である。一方話し言葉は、個人的な意志や知性の表れである。その個人的行為の中で(a)話しをする主体者が言葉を活用して自己の考えを表現するための話し言葉を識別したり、(b)その話し言葉を主体者が使えるようにしたり、自己を表現出来るようにしたりしている心理物理学的メカニズムを識別する事が必要である。一方、言語は、

“個人の外にあって、自分自身では言語を創造することも、修正することも出来ない、共同体の構成員の間にある或る種の契約の上のみ成り立つものであるといった話す能力の社会的部分……である。……言語は社会的制度ではあるが、そのものもつ多くの特色が、言語を他の制度である政治や法律等といったものと区別していると我々は見ている。”(65)

言語の社会的性格を論じている科学者達は他にもいる。歴史上、最も優れた言語学者の一人、アントニー・メイエ (Paul Jules Antoine Meillet) は自分の書「歴史言語学と一般言語学」の中で次のように述べている。

“ 実際言語は自分自身で発展して来ている自律的な物的存在である。言語は社会の共同体に属する制度であり、言語が経験する修正は、その共同体の歴史に結びついている。” (66)

もう一人の偉大なフランスの言語学者、J・ヴァンドリエス (Jacques Vendryès) は社会的事実として言語をとらえているといった同様の考え方をしている。「社会の胸部は言語が形成されていった所である。」と彼は言っている。ヴァンドリエスによれば、人間達がお互いに意志疎通の必要性を感じ始めたその時に言語は生れて来たのだと言っている。彼は続けて。

社会的事実である言語は、社会的接触の表れである。それは社会を統一する最も強いきずなの一つと成っており、社会的集団の存在に自己の発展を委ねている。(67)

この事から、言語の社会的役割を研究する事によってのみ、言語とは一体何であるのかといった問題解決の能力を得る事が可能となるのだとヴァンドリエスは考えていた。

一方、ソビエト連邦で言語を社会現象としてとらえている学者は、マールだけではない。引用すると長くなるので止めておくが、A・S・チコバヤにのみふれておきたい。言語とは一体何であるのかという疑問に対し、彼はとても明解に、ためらうことなく解答している。

言語は社会現象である。(68)

今日ではナチュラルな現象としてみる言語についての考えが、一般に払拭されて来ているとはいへ、言語の自然主義説といった考え方は、いろいろの弁解の下に、いろいろの目的をもって、様々な形で現在に於いても再現して来ている。例えば「ナチュラルなもの」として国語をとらえ、「人工的なもの」として国際語をとらえて話しをする場合、「自然主義説」崇拜が頭をもたげて来ているのである。この事は一般の人達の会話の中や日常の雑誌の中に見られるだけでなく、諸種の教科書の中や、西洋の著名な言語学者の著作の中にさえ見られ、特にソビエト連邦や他の共産圏に多く見られる。もし、こういった目的にそぐわない専門用語が、詩的許容の性格をもつものであるとすればそう問題は大きくない。しかし、そうではなく、「人工的」という用語が真の意味に於いて用いられており、国語はナチュラルな生命をそなえた有機体という成長しきったナチュラルな生物であり、一方、国際語は一人の人間によって「考え出された」反自然的な意味に於ける「人工的な」ものである。だから発展していく可能性もち得ないし、

文学もあり得ないし、生きものとしての生命の特質もち合せていない。……それは全く言語ではない。という最終結論を下している。こういったばかりの発言が、高名な言語学者達に於いてさえ、赤面もなしに繰り返しなされているのである。彼等は 에스ペラント に関する基本的事実について完全な黙殺を決め込んでいるだけでなく、言語の社会的性格についての十分な理解も同時に根絶している。

全世界の主要な言語が紹介されている A・メイエと M・コーエンの著した膨大な書『Les Langues du Monde』(世界の言語)の中で、エスペラントが取扱われていないのは偶然ではない。この著書によれば、世界の言語の数は、方言を計算に入れなくても、二、五〇〇から三、五〇〇位はあるといっている。これ等の内の二十九ヶ国語だけが各々一、〇〇〇万以上の人達によって使用されている言語である。およそ二十五ヶ国語が世界的言語の普及率の見地から、あるいは出版物等の見地から重要であり、一方、四〇ないし五〇ヶ国語のみがいろいろの文学を有している。(69)、何故に、国際語は出版物の見地から二十五ヶ国語の中に組み入れられていないのか、あるいは少くとも四〇ないし五〇ヶ国語の中にいろいろの文学をもった言語という見地から組み入れられていないのであろうか。その原因は全く単純で、意図的である。——とて非科学的なのだが——現実の前に目を閉じており、目をつぶる事によって現実を否定出来るのだといったうぬぼれた気持を持っているからである。

マリオ・A・ペイ(Mario. A. Pei)の書『The World's Chief Languages』(世界の主要言語)の中にあるように、世界の言語の列に 에스ペラント を加えようとするれば、著者はすぐにも、エスペラントの掲載は「その原理やその構文法の創始者によってなされた弁護や賛意を意味あるものとしてとらえているわけでは決してない。」といった註釈をつけて弁護しようとしている事もまた偶然ではない。(70)

自分の科学に真に忠実でありたいと願う言語学者に何を要求するのかといえば——どういった言語に対しても「賛成せよ」等といった要求を誰れもなさないのと同様に——「国際語を弁護したり、国際語に賛意を示したり」する事ではなく、単に 에스ペラント を知り、その認識の基となるあらゆる文化を具備した社会的事実として、それを認識する事である。幾人かの名譽ある文献学者を除いて、一般に言語学者達はこういつた考えをしていない。中央アフリカに住んでいる他の世界から締め出された種族の忘れさられた言語を発見しようとして、多額の子算を払い、その発見についての本を出そうとする。しかし、国際語が人間生活のあらゆる面で応用をもたらして来ており、特にこの言語ですばらしい文学が形成され、文献学者の書棚の上に並んでいるにもかかわらず、彼等は現実としてそれを見ないばかりか、見ようともしない。(71)

現実に於ける国際語の成り立ちは、——思想的背景や社会的役割、この言語で創作された文化

的評価といったものを除外して考えてみたとしても——自分自身でもって言語学上第一級の経験をして来ており、今後他のどんな目的のためにでもなく、ただその事だけのために、言語学者は真面目な研究をしなければならぬであろう。理論的計画言語としてではなく、社会的事実としてエスペラントの研究を行うことは、語彙のもつ最も幅広い意味に於ける社会的力である。言語を発生させ、言語の発展をうながしたり、その言語の崩壊をうながし、あるいは喰い止めようとする社会的力のよりよい理解にすばらしい貢献をする事が出来——これ等の総ては、言語学に興味をもたらすものである。

しかし言語学は、——幾つかの例外を除いて、もう一度いうが——この事実を無視し、あるいは黙視したり、あるいは意識してこの事を表わそうとはしなくて、演繹的(えんえきてき)主張をなし、不合理なことばかりを言っている。そして、真にこれ等の総ての閑談は、現実との何のかかわり合いも持ち合せていないし、科学的論理の基本的要求と何のかかわり合いももち合せていないといったばかげた発言をしている。国際語の原則的な反対者であるとか、国際語の思想の原則的な反対者だけではなく、一方、社会現象として言語を現実的に認めようとはするが、個人的信条から国際語を受け入れようとならない文献学者もまた同じような発言をしている。だが、彼等は自分達の原則的に正しいとされる出口である最後の理論的帰結にまでは至っていない。国際語の言語学上の位置は、一般に言われている事ではあるが、最も悪い発言がなされ

ており、その発言がエスペラントに対してではなく、国際語自身に向けられている。国際語のもつ最悪の環境を払拭して行く第一歩は、エスペラントについて考えていく場合でも、あらゆる国の言語だけでなく、他のあらゆる事柄をも研究して、「自然主義説」の崇拜から己れを解き放つ事である。こういった歩みをなす事によって、国際語は前方への正常な歩みを始めるであろう。

3、自然と社会環境

外にあって自然の力は、人間の誕生をもたらした。人間は外部の物理的波紋上にあつて、方方にもてあそんでうち棄てられた単に無能な人形ではない。人間が自己の生命を防護し、確固たるものとなすために、最初の道具を作り出した瞬間から、人間は自分の発展に有利なように、自然の力を利用し、従属させ、変えていく事を始めた。自然の一部にあつて人間は、自然のもつ原則や法則であるよりも、他の社会的な原則や法則に支配される、人間社会の新しく、より高度な世界へと入っていった。

人間は社会的存在であるが、人間の祖先もまたそうであつた。個人は常に或る社会の集団に属して来たし、今も属している。特定の社会集団の具体的性格は、数多くの要素、外部の要素

(周囲にある自然)や内部の要素(発展過程の中で集団自身の中に創られた社会制度や構築された施設)にかかわっているが、外部の要素は人間の利害に対し、自然の力の抑圧と並んで、その重要性をだんだんと失っていった。次第／＼に外部の要素は影響力を直線的、あるいはじかにではなく、社会的に意味のある価値への変換を通して誇示するようになっていった。人間の集団の形成に影響を与えたこれ等の力は、人間の集団に特殊な性格を与え、その集団の言語にも影響を与えていった。人間の集団が目立った特色をもった社会統一体として形成されるや、その集団はそれを引き起した総ての要素や、その当時の文化のレベルに左右されながら、具体的な要求を満す形で、自分達の言語を形成していった。言語は社会集団の結合を、自ずと助長し、その言葉の使用者は、集団への精神的帰属を強化させていった。

言語は物理的環境や社会的環境に影響されている。社会的環境——宗教、政治、組織、芸術、道徳的概念といった複数の社会的力——は、言語に直接反映して来ている。それ等の確立自身、言語の表現を形成していった。一方、物理的環境——例えば、領地の地形的構造(山、平野、海岸等々)や、気候、食物、飲用水——は実際、社会の中で有する具体的な価値の大小を反映して、言語の中に表れて来ている。自然環境の中に、動物や植物、鉱物があるのだから、それ等は名前をもつに至るであろうというわけにはいかない。もつとより大事な要素、動物、植物あるいは物体が言語となるためには、あらゆる意味に於いて、社会的重要性を帯びるようになる

事が必要である。

ヌートカ・インディアンは海岸に住んでいる。彼等の言語は多数の海の魚や海に住む動物、植物の膨大な数の専門用語を有している。同じような事が他の海岸地域に住むインディアン支族の言語にも見られる。彼等の辞書は、南西フランスや北方スペインのバスク人の辞書にも匹敵するし、またあらゆる魚獲民族の語彙の数にも匹敵するものである。

一方、アリゾナやネバダ、ユタの砂漠に住んでいる南パイウト・インディアンの辞書には、多量の専門的地形用語が見られる。もし、それ等の語彙が砂漠領域での住民にとって、生活の闘いの中で必要なものではなかったとすれば、それ等の用語は創られなかったであろう。ヌートカ・インディアンに於いても同様に、彼等が同じ領地に住んでいたとしても、魚獲によって主に生計を立てているのではなく、平地での狩りや農耕をもって生計を立てていたとすれば、海洋の生物の膨大な数の言葉は生れて来なかったに違いない。

野生の植物の種やあらゆる植物によって生計をたてている他の支族のインディアンは、この分野に於ける数多くの用語を持っている。時には同一の植物に対し、その色合いや成長過程、あるいはその植物が料理できるか否かという事によって、複数の異なる名称をもっていたりする。

一方、インディアン支族達の幾つかの言語に於いては、太陽や月の名前が共通したた一つの語彙で呼ばれる事がある。(72)、それはこれ等の物体が彼等の物質的な、あるいは精神的な生活の中心に確かに無いからである。

あらゆる言語の中に、自然環境の同様な影響が社会生活様式を通して表れて来ている。アラビア語の中にはアラビア共同体の生活に馬が重要な役割を担っている所から、馬についての語彙が豊富にある。ソマリ語にはラクダについての多くの専門用語がある。それもソマリ族の経済生活にラクダが大きな役割を担っているからに外ならない。しかし動物園とかキルコスだけではラクダを見る事が出来ないクロアチヤ人には、ラクダの間にある識別、メスのラクダとかラクダの子供、ラクダのメスの子供といった意味を示す個々の語彙で表す言語上の識別がない。一方、食卓の上に重要な地位を占める家畜である牛や羊、馬に関する非常に多くの語彙がクロアチヤ語にはある。これ等の語彙は性や年まわり、色といったものによってだけでなく、多くの他の特徴によってもまた各々の言葉をもって、それ等の動物を言語上識別している。

自然の中で生活している支族は、鋭利な目をもっている事は確かであり、堂々とした自然の美しさの中にある色彩の無限のニアンスを、人間が生理学的に識別する事を、何物もこばむものではない。所が彼等の言語には基本的な色の名称さえも、しばしば不足している事がある。

絵具や顔料の製造とか、他の色彩豊かな物質、色彩豊かな物体の製造を生業とする民族に於いてのみ、特に絵具製造工業を生み出した民族の言語に於いて、あらゆる可能なニアンスをもった、とても長い色彩リストをもった語彙の形成をもたらしした。

これ等の例を挙げる事によつて、この本を膨大なものとする事もたやすいことである。自然環境は、社会環境を通してのみ言語に影響を及ぼしているのである。E・サピールは次のように言っている。

「言語が自然環境にどれ程のかかわり合いをもっているのかという事を他の言葉に代えて言えば、総ての自然環境による影響は、社会環境の影響をうけて、その影響力を縮少して来ている。」(73)

社会環境は言語に直接の影響をもたらして来ている。このようにして、中でも言語は世代から世代へと引き継がれて来ている。あたかも子供が「自然の音」をまねて学んで来たかのようにな言われて来た擬音語は、単に子供が自分の環境から聞いた言葉の模倣にすぎない。子供達はダア・ダアと言う。それはフランスでは父親が自分のひざの上に子供をのせて可愛さあまりにダア、ダアといっているからに外ならない。子供達は親から、コオ、コオと言われて卵を口に

するから、卵やニワトリはコオ、コオであるというように、子供達は親の言葉をこまかくまねていく。現代の大都会に住む子供達は、殆んどと言ってよい程、馬やニワトリを見、その鳴き声を聞く事は無い。

最近まで大家族制度の中で生活して来たクロアチア人やセルビア人、そしてその他の同様な民族の言語の中には、血縁関係や婚姻による親族関係を表す多くの語彙がある。セルビアやクロアチア語の中には、例えば父の弟を表す叔父とか、母の弟を表す語彙、母の妹の良人を表す語彙、父の妹の良人を表す語彙等が、別々の言葉としてある。大家族制度の中の共同生活は、こういった言語上の識別を必要としているのである。大家族制度の崩壊に併なつて、こういった言葉の消滅もまた起つて来ている。ユーゴスラビアの新しい世代は、もうそれ等の言葉をほとんど知らない。今では伯父や伯母、姑とや姑めといった言葉だけしか残っていない。

環境の影響が、種々の支族の言語に変化をもたらししている。これ等の特色ある特徴は、発展して来ている共通語の中にある特殊な言語の性格に負う所が大きい。

(59) この事について、より詳しく知ろうとすれば次の書がある。

D-ro Ivo Lapenna, *La Internacia Lingvo en Historio kaj Hodiaŭ*, kroatingve, Zagreb, 1939

La Angla aŭ Esperanto ? Kroatingve, Zagreb, 1940.

Pri la t. n. Artefariteco de la Internacia Lingvo, franclingve en la gazeto L'Essor, n-ro 2/1950 kaj en multaj aliaj artikoloj.

(60) オランウータンに「パパ」という言葉を教え込ませる事が出来たという報告がある。他の報告書によれば、犬に「一から三までの数字を教える事」と「砂糖」という言葉を言えるように仕込む事が出来たといっている。

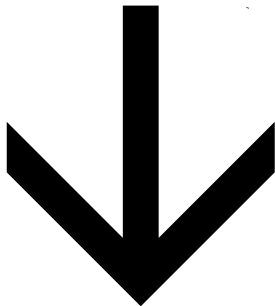
(61) A. Schleicher, *Compendium der Vergleichenden Grammatik der Indogermanischen Sprachen* (インドゲルマン語の比較文法学大要), Weimar, 1876, Antaŭparolo.

(62) Cit. laŭ Giuliano Bonfante, *The Neolinguistic Position*, publikigita en *Language*, Vol. 23, n-ro 4/1947.

(63) Ferdinand de Saussure, *Cours de Linguistique Générale*, publikigita de Charles Bally kaj Albert Sechehaye, en *kunlaboro kun Albert Riedlinger*, Lausanne-Paris, 1916, p. 25

(64) Ferdinand de Saussure 註(63)を引用した書から。

- (9) A. Meillet, *Linguistique Historique et Linguistique Générale* (歴史言語学と一般言語学)
Vol. I, paris, 1926. p. 79.
- (9) J. Vendryes 註(54)で引用した書から。
- (8) Prof. A. S Chikobava, *Vvedeniye v Jazykoznanije*, Parto I, dua eldono, Moskva, 1953, P.23
- (6) A Meillet kai Marcel Cohen 註(6)で引用した書から。
- (7) Mario A. Pei, *The World's Chief Languages*, tria eldono, London, 1954, p. 580.
- (7) より詳しく知ろうとすれば次の書を参照する事 G. Waringhien, *Eseoj II*.
- (7) 註(47)で引用したエドワード・サピールの書「インディアン語全集」から。
- (7) 註(72)で引用した書から。



第四章

言語の発展をうながす要因

言語は、一方では（確かに他の社会現象に関連して、多少とも高度なレベルで自己の役割を演じようとする）或る要因の影響に支配されており、他方では言語自身、社会の発展を積極的にうながすとても重要な要因の一つとさえなっている。

言語の発展過程の中には、崩壊への性向と統一への性向といった2つの対立する性向がはつきりときわだった形である。それは絶え間なくあらゆる時代やあらゆる環境の中で、同様の影響をもたらしているわけではないが――言語に影響を与えている要因である2つの対立するカテゴリーの示威以外の何ものでもない。一方のカテゴリーに属するものは、言語をばらばらにしたり、分割したり、崩壊させたりする複数の分裂をもたらす要因であり、他のカテゴリーに属するものは、言語を一致させたり、収束させたり、統一させたりする統一をもたらす要因である。

1、分裂をもたらす要因

分裂をもたらす要因の主たるものは、

(a) 地理的要因 — 気候、高山、広大な海、広い川、広大な湿地帯、荒涼たる砂漠といった地理的要因は、特に原始的発展段階にある人間の集団を、確かにお互いに分割させている。これ等の条件の影響下にあつて、総ての集団は自分達固有の言語を創り出しただけでなく、言語はお互いの接触をもつようなことはなかつた。この事はもちろん、言語の接近を不可能ならしめてきた。

地理的要因は、文化の非常に低い段階にあつては大変大きな役割を演ずるが、しかし今日でさえあらゆる意味を失っているわけではない。どういつた接触ももたない。あつたとしても非常に希薄な接触しかお互いにもたない、お互いに孤立した生活を営んでいる人間の集団は、自分達の集団以外では理解し合えない特有の言語を持っている。

南北アメリカの土着民がお互いに大変異つた膨大な数の言語を持っている事はよく知られている。しばしば数百人からのみ構成されるようなあらゆる支族が、自分達固有の言語をもっている。

南アメリカに於いては、トウピ・グアラニー・インディアンの言語のみが相対的に広く理解されている。彼等の言語はまたブラジルのポルトガル語にも影響を与えている。他の支族の言語は、時には家族同士でしかお互いに理解し合えないといった程、支族同士、あるいは子供達同士でさえ、さまざまに多様化している。(74)、高名な南アメリカの探険家の一人、ティボル・セケリイはブラジルでの数年に渡る探険の中で、同じような現象を指摘している。今日に於いてさえ、とても少数の集団からなる土着支族が、お互いに非常に異った自分達特有の言語を話していると彼は語っている。

北アメリカに於ける数多くの言語に関する鮮やかな記述を、十七世紀に於いてすでにカブリエル・サガード (Gabriel Sagard) が、自分の書「フロローヌ国に於けるすばらしい探険」(75)の中心でなしている。自分が訪ずれた地方の中には、2つの村が同一の言語を話している事もしばしばあったと彼は主張している。アメリカ・インディアンの文化の研究に、自己の生涯のほとんどを捧げたエドワード・サピール (Edward Sapir) は、土着民の有する無数の言語について述べている。彼は次のように言っている。

メキシコ北部に位置するアメリカの土着民(約一、一五〇、〇〇〇人)は、コロンブスがアメリカ大陸を発見した時代に——その殆んどは現在もなお話し言葉として使われてい

るのだが——驚く程、多くの言語を話していた。スー語 (Sioux) やナバホ語 (navaho) のようなそれ等の言語のうちの幾つかは、まだ開花しつつづけている言語である。(76)

一五〇、〇〇〇平方マイルの領土を有するカリフォルニアだけで、三十一の言語族と少くとも一三五の方言をクレーバ (Alfred Louis Kroeber) は分類している。前にも述べたように (77)、「世界の言語」という本には、今日でさえアメリカに於いては、一〇〇以上の言語族と膨大な孤立した言語があると書かれている。

その数がおよそ二〇〇、〇〇〇人と評されているオーストラリアの土着民は、少くとも五〇〇種類の言語を話している。

アジアに於いても同じような状態にある。その広大な大陸にある言語は、非常に異っており、その数は膨大なものである。数の観点や商業上、政治上、文化といった観点より見て、第一級の意味をアジアの言語の中に見い出すとマリオ・ペイは言っている。その言語の使用者は、相対的に見て非常に数が少なく、彼等は今までかつて高い文化水準に到達したことがない無数の少数民族の言語をそこに見い出すとも彼は言っている。(78)

ビルマでは、例えばアラウンパーヤ王朝時代 (Alaungpaya 1752—1885) の下でかなりの文化的

価値を生み出して来たビルマ語を、主に創り出して来た。その言語はその当時のビルマに於ける意志疎通の手段となつていただけではなく、英国支配の下にあつて後に英国領ビルマを形成していったアラカンやペグー（前者は一八二六年から後者は一八五二年より）に於いてもまた、その言語は意志疎通の手段となつていた。ところが、山岳地帯に孤立して生活していた数多くの種族達は、自分達固有の言語を話し守り育てていった。探險家でもあつたゴルドン大尉（Charles George Gordon）は三〇家族とか四〇家族単位のみで話されている言語をしばしば見出し、その言語は非常に身近な支族達の間でさえも理解しあえない程、異種のものであつたと、それ等の言語について書き残している。

一〇〇種にもものぼるアメリカの言語は、お互いに似かよつた所が無い。それは大陸の全域に渡つてまばらに彼等が生活しており、一つ一つの集団が孤立した形で存在するからである。(79)、同様な事が他のあらゆる地域に於いても見られる。もし人間の集団が、小さな共同体に分割され、孤立した状態で生活しており、お互いの接触が殆んど無かつたとすれば、人間の集団は、自分達の言語共同体以外では理解されない自分達固有の言語を創り出していく。

この事が、言語や文化の極めて低い社会にあつて特に意味をもつ地理的要因によつて分裂をもたらず本質的部分である。こつちといった低い社会水準の上にあつて、地理的要因が他の分裂を

もたらす要因と共に効力ある分割的意義を有していたという事実は、あらゆる分裂をもたらす要因がまだとても大きな影響力を誇示していた大昔に於いて、言語の最初の形成が無限の多様性を生み出していったのだという概念により大きな証言を提供するものである。

(b) 経済、社会要因 — このグループに属する要因は、複数の要因に区分する事が出来る。その中でも最も重要な要因は、

(1)、カースト及び階級要因、— 人類の進化や原始的共同体の分裂とあいまって、異なる階級の中や対立する階級の中でも言語は分裂していった。あらゆる経済的相違は、同時に社会的相違を意味し、それは必ずや言語の相違を引き起している。種々の階級がもしお互いにはつきりと分割されているとすれば、それ等の言語は重要な相違を表てに現わす。一方、階級同士がもし、お互いに活発な接触をもっていたとすれば、それ等の言語はほとんど差違のないものとなる。

古代のインドにあったカースト制社会は、ほとんど完全で、典型的なカースト分離の例を見せてくれる。インドに於けるカースト制は、サンスクリット語を話すバラモンという最上級のカーストに始まって、種々のプラクリット方言を話すカースト外に見られる最下層に至るまで、自分達特有の言語を持っていた。南インドや北セイロンのドラビダ族の言語には、性別でさえ

性に基づいて形成されるのではなく、女性とか女神でさえも無生物と同等のカテゴリといった最低の階級に位置しているように「高等」とか「下等」といったカーストによって形成されるのである。⁽⁸⁰⁾

ラテン語は初期のころ実際には、ローマに於けるパトリシウス（貴族）の言語であつた。言語の形成を論じながら、マックス・ミュラーは次のように推論している。

「平民がもし、パトリシウスに代つてローマを支配していたとするならば、ラテン語はキケロに於いて見られるものよりも、かなりかけ離れたものとなつていたに違いない。」⁽⁸¹⁾

同じような現象が中世ヨーロッパに於ける封建社会の中にも見られる。貴族やカトリック教会といった封建支配階級や科学は、中世に於けるラテン語の社会的推進者であつた。一方、農奴大衆は非常に数多くのさまざまな言語や、方言を話していた。

英国ではノルマン人に征服された後、支配階級はフランス・ノルマン語を話しており、一方田舎の人達や職人は、かなりの期間、サクセン人の言語を話していた。

現代では統一をもたらす要因によって引き起される言語現象のように、種々の社会階層がそ

れ程孤立していないといった事実が作用して、階級的要因が全く別々の言語を創り出すといった役割を演じるような事はなくなつて来ている。そうはいつても、その影響が全くなくなつてしまつたと考へるのは誤りである。種々の社会階層は別々の地域に集まつて生活する傾向を持つており、この事からもまた、領土の観点より見て、彼等は分割されているのだと言える。彼等の間の関係は、こういつた場合単なるうわべだけの形式的で疎遠なものになつてゐる。その結果、これ等の集団の言語表現もまた、大きく異つてゐる。ロンドンやパリ、あるいはあらゆる他の大都会に於けるブルジョア階層の言語と労働者の言語を観察してみた場合、それ等の間にある隔りが少くもないし、また意味のないものでもないという事に容易に気付くであろう。階級やそれに近いものが社会に存在すれば、必ずや階級特有の言語を併つてゐる。——とA・メイエは言つてゐる。(82)

マルガレット・スチュラウスはロンドンのコックネイについて次のように言つてゐる。

英語を話す世界の枠内で、非常にはつきりとしたコントラストが見られるのは、ロンドンの言葉、コックネイである。その一方は「上流階級」の言葉であり、もう一方の言葉は「下層階級」のものである。ロンドンの住民は、さういつたコントラストを認める事に何等恥らひを感じてゐないばかりか、彼等は言語の階級社会の存在に関して非常に誠実である。

マールが言語に対する階級の影響を過大評価したのは確かに間違っていた。だからといって、自分達の社会集団の具体的構造にかかわる言語の発展に、多少とも重要な役割を演じている力を否定する事は、また同様に誤りでもある。もう一度、メイエの言葉を引用してみよう。

「あらゆる社会体制や社会階級の違いは、言語の相違として表れて来る可能性を持っている。」(84)

(2)、職業上の要因、—労働の分割、その結果としての職業の発生は、職業上のあるいは技術上の特有な言語の創造を結果として招いた。労働の分割があるあらゆる所に、また言語の分割がはっきりと存在する。あらゆる職業やあらゆる業務は、その専門分野外では殆んど理解し得ない自分達固有の専門用語を持っている。人類が発展してゆけばゆく程、種々の仕事が専門化されてゆけばゆく程、仕事に携わる人達が自分達の専門に物理的、精神的努力を傾注すればする程、ますます自分達にかかわる専門用語を特殊なものとしていく。

「都会人が雄羊とか雌羊といった言葉をもって通常満足し得たとしても、英国の小作人達は、「一才の羊についての語彙や二才の羊についての語彙」の必要性を感じるし、特に通常用いられる言葉 Twinter (二冬を越した羊) と Teg (二才の毛を刈っていない羊) を区別して用いている。ウェールズの羊飼いは、自分達の羊が持っているそれぞれの特徴を区別するだけの膨大な数の名称を持っている。」(85)

同じように羊についての多くの語彙を、ダルマチアの山岳地帯に住む放牧民やユーゴスラビアの放牧地帯に住む放牧民が持っている。その他の同様な国の放牧民もまた同様である。しかし羊のための豊富な語彙をもち、各々一頭ずつの羊に名前をつけているダルマチアの同じ放牧民は、多くの山岳地帯に咲く花や草木、あたり一面に生えている植物の名前を殆んど知らないという事実は、何を意味しているのであろうか。当然のことではあるが、植物学者は総てそれ等の語彙や他の多くの専門用語を知っている。同様の事が動物学者や医者、法律家、歴史学者、電気技師、テーラーにも言えるわけである。また自分達の専門的職業や特殊な労働の分野で働いている職業人や専門家にも同様にあてはまるものである。

最も発達して来た言語の全語彙量は、今日では数十万にも達している。それ等の語彙の内の比較的極く少数のもののみがその言語を使っている人達に共通した部分である。非常に高度な発展を遂げた文化や文明を持った英国に於いてさえ、その当時行ったマックス・ミュラーのアンケートによれば、十九世紀の中ばごろの田舎の人達の中には、三〇〇語以下の語彙しか知らない人がたまに見られたとある。マックス・ミュラーは更に続けて次のように言っている。

高度な教育をうけた英国人は…… 自分達の日常会話の中でおよそ三、〇〇〇語ないし四、〇〇〇語を使って話している。また雄弁な話し家と言われる人達は、一〇、〇〇〇

語を自由に駆使する事によって話しをしている。(86)

D、オルセイという英国人は、一〇年程前、自分の研究の成果を発表している。その中で彼は「無教養な人達やそれに近い人達の有する語彙量は、五〇〇語を越す事はない。」と結論づけられている。(87)

リングフオン協会の会長は、最近「普通の人達が日常生活の中で使用する語彙は、約一、〇〇〇語であり、時折一、二〇〇を越える事もある。」と言っている。(88)

マリオ・ペイはとても数少ない評価をしているかのようにはあるが、彼はこの事についてはつきりした考えを表明していない。彼はただ心理学者グループの研究報告を掲載しているだけである。それによれば、4才の児童は五、〇〇〇語以上の語彙を知っており、十才児になると三四、〇〇〇語にも達する。マリオ・ペイによって紹介された他の学者の意見によれば、白痴の成人でも、一〇、〇〇〇語は知っており、一方、一般の成人は三五、〇〇〇語から七〇、〇〇〇語を知っていると云う。(89)

自分自身の考えを、マリオ・ペイは次の言葉で言い表している。

“完璧な英国語辞典は、およそ五〇万の語彙から成り立つと言われている。しかし、個人

はその数の四分の一の語彙、あるいはそれ以上を知っているかどうかも疑わしい。(90)

この評価を下した彼は、余りにも樂觀しすぎているかに見える。確かにそういった人はいたとしても数少ない。彼は続けて次のように言っているが、より現実的な意見となっている。

特殊な科学や職業上の用語あるいは専門用語に属する語彙を含めて、一〇万にも及ぶ語彙が大辞典に集録されてはいるが、一般の人達には用いられてもおらず、記憶されてもいない。現代の生活範囲のあらゆる分野は、自分達の従事する分野にだけ習熟されている自分達固有の専門用語を有しており、医学や心理学、植物学、音楽といった、それぞれの専門辞典がある。(91)

マリオ・ペイやその他の人達の考えを考慮に入れなかったとしても、一般の成人の内でも非常に無教養な層を含めた——非常に無教養だとされる人達の層はこの事に関し、決定的な役割を演ずる——言語の共通項を成す総ての人達に、真に共通している語彙量は、實際言語の有する全語彙量の一分にも満たないものであるという事になる。この評価は確かに樂觀的であり、この事は非常に無教養な人達でさえも、およそ四、〇〇〇語を知っている事を意味しており、一方、四、〇〇〇ないし五、〇〇〇語が（もちろん言葉の中で、その語彙は自律的な言語の価

値をつくり出す)中級程度の教養をもった個人の中間的な語彙量を示している。(92)他の総ての語彙は、職業上あるいは専門的、技術的言語に属するものである。これに付属的な種々の、人間がなす活動であるスポーツ、狩猟、旅行等々といったものの基に生れて来た特殊な言語上の用語を、また計算に入れなければならない。

(3)、性的要因 — 女性の身振り言語の問題についてはすでにふれておいた。種々の原始的支族や女性の話し言葉に於いても、男性の言葉と大変に大きな違いがあるという事がわかつている。カフラリアの女性は、男性の言葉にはない多くの特殊な言葉を持っている。女性に対するタブーのために、彼女達の最も近い親族関係にある男性の名前を表す音声を含む、どのような言葉をも使用する事が禁じられている。アフリカに住む他の土着民の言語もまた、タブー視された言葉が言語の相違に影響を与えている。テイボル・セケリイは、同様の現象がブラジルの幾つかの土着民の支族の中にもある事を指摘している。

アフリカには女性が全く違った言語を話しているといった支族がいる。こういった現象を一般には、征服した支族が征服された支族の総ての男性を去勢し、その女性を自分達のものとしたのだという事実にあてはめて考えている。

男性と女性の間にあるとても大きな違いの非常に興味ある事実が、北カルフォルニアにあるヤナ語に見られる。男性の言葉は単に男性の間のみで使用され、一方女性の言葉は、女性同士の会話にだけ用いられるのではなく、女性と男性の間の会話にも使われている。こういった特殊な女性の言葉を生み出す原因は、タブーの中にあるのではない、なぜなら女性達は自分の言葉に男性の言葉を引用する場合、男性の言葉を自由に使っている事からもわかる。控え目な女性の言葉は、その共同体に於ける女性の社会的地位の低さを象徴しているのであろう。(93)

古代インドの女性達はプラクリット語を話していた。これ等のプラクリット語は女性の身分が高貴であるか否かに関係なく、サンスクリットの演劇の中で用いられていたように、最初に文学の中に入っていた。一方僧侶や貴族の身分にある人達はサンスクリットを話していた。中世ヨーロッパの封建社会の中にあつて、女性は一般にラテン語を話していなかった。ダンテは民衆の言語 (*lingua volgare*) をイタリア文学の中に取り入れた最初の試みをなしたのは、女性達であつたと言っている。実際には、他の国と同様にイタリアに於いても封建社会の内的な弱体化とブルジュア階級の形成強化の始まりが、本当の原因となつていたのである。最下位にある聖職者や階級に關係のない女性を含む、社会的に最も低い地位にあつたあらゆる層の人達が、言語に関するこれ等の経過を助けている。

これ等の事柄の外でもまた、特に文化のとても遅れた民族に於いて、二つの性がつくり出す別々の仕事に従事する男性と女性の言葉の間には一般に違いが見られる。例えば、男性が狩猟に従事しており、一方女性は野生の果実を採集したり、あるいは野菜を栽培しているといった異なる職業の影響の中でもまた言語は、特に語彙の構成に関して相違を表に現す。同様の現象が遊牧民や国教忌避者達の生活環境の中に、現在に於いても、非常にはつきりとした形で見られる。女性は家事労働に関する言葉を身につけており、一方、男性は自分の職業に関する言葉や新しい土地での自分の専門に関する言葉を身につけている。

性的要因は、一見すれば 生物学的要因のようであるが、実際それは経済、社会要因である。特に今日に於いては、性は言語に重要な影響をもたらすような事はない。だがもし、二つの性の総てが限定された労働にのみ専ら従事するとすれば、性はとても大きな影響力をもつことになる。

(4)、宗教的要因 — 殆んど宗教は、自分達の宗教儀式に特殊な言語を用いている。古代ローマでは聖職者自身がラテン語の教師でもあったから、自分達の聖なる賛美歌をかううじて理解する事が出来た。日本の仏教全盛時代に於いても、サンスクリットでの祈りや聖なる呼声は、殆んど完全にそれ等の意味を忘れ去った僧侶達によって仏前で呟やかれている。 — とマリオ・

ペイは言っている。キリスト教のあらゆる宗派は、共通語から全く、あるいは殆んどかけ離れた特別な言語をどこでも用いている。カトリック教会は主にラテン語を用いているが、時には他の言語の古語や特別な形を用いている所もある。スラブの正統派教会は通常、古代スラブ語を用いており、ギリシャの正統派教会の宗教儀式は、古代ギリシャ語でとり行なわれている。……他の宗教でもまた特殊な言語が用いられており、イスラム教の祝詞には、アラビア文学言語が伝統的に用いられている。一方、例えば南部仏教は、パーリ語と呼ばれる言語を用いている。特殊な世界へとか、あるいは聖なる世界へと人間を運ぶように運命づけられた宗教儀式は、それ等と同じく特殊な言語を要求している。——とメイエは言っている。(94)

或る宗教が広い領土に広まって行き、生活の中に溶け込んでゆけば、当然それに関する宗教言語もまた同じ広がりをもっている。

所が、その古代言語がすでに石化してしまっているために、それ等の言語は言葉の通常の意味に於ける意志疎通として通常用いられているわけではなく、宗教的統一の象徴として専ら用いられている。しかし或る宗教の実際の推進者が経済、社会機構の最上層部にあつたり、それと同等の階層に位置していた場合、その宗教言語はカーリストや階級の言語と同一のものとなる。これ等の例として挙げられるものに、バラモンのサンスクリットがあり、中世紀のラテン語がある。一般に言われていることではあるが、或る社会集団に於ける宗教が重要性を帯びればお

びる程、ますますその言語は、より重要な意味をもち、その影響はますますより強力なものとなつていく。中世のハンガリアに於いては、民衆言語の筆記用法が犯罪だと考えられており、しばしばその犯罪者は死刑の宣告を受けていた。

他の要因もまた、分裂をもたらす影響力を持っている。これ等のものに例えば、古い世代から新しい世代へ言語を譲り渡す場合、地域的な交流や国際的な交流、これ等と同等の多くの事柄に対し、政治的な圧力や妨害がもたらされた場合が挙げられる。当然、これ等の要因は分裂をもたらす要因として少なからず重要な役割を担っている。そして、これ等の要因は、無視出来ないものでもある。

およそ八〇〇人のみから構成されている南インドの支族が三つの特別な宗教言語とその社会固有の一つのスラングと一つの方言を持っている事を考えてみれば、分裂をもたらす要因となる。宗教言語の重要性を理解し得るであろう。(95)

2、統一をもたらし要因

言語の発展に全く正反対の影響をもたらし要素は数多くある。統一をもたらし要因は、三つの主たる要因、経済、社会要因、技術上の要因、文明的要因に分割し得る。

(a)、経済、社会要因 — 人類の全歴史は本質的に新しい考えの上になりたつ、より高度な生産手段によって、より便利な生産物を創り出して行った歴史である。より高度で、より幅広い共同生活形態を限りなく追求して来た人類の歩んで来た道は、原始的流浪の民から部族へ、部族から民族へ、民族から国民へと今日の国家を形成するまで、人類を導いて来た。そして現在その道は、将来の人類の統一へと向って伸びている。

より高度なものへと向うその道の上には複数の要素がからみ合って、統一への影響力を示威している。その主なものを次に示す。

(1)、労働の分割 — より発達した生産システムへの移行は、労働の専門化を併うより幅広い社会統一、従って物質的のみではなく、精神的なより幅広い交流を併うより大きな社会統一の創造を生み出して来た。このようにして労働の分割は、一方では垂直的意味合いから分裂

をもたらず要因として作用し（職業言語の形成）他方では、広大な領土の上に住む人達を経済的に相互依存させるといった水平的意味合いから、国家だけでなく、国際的にもまた力強い統一をもたらず要因として作用している。労働の分割が進めばすすむ程、一つの労働分野が専門化されてゆけばゆく程、ますます他人の労働分野に負う所が大きくなっていく。交流は空間的に増大してゆき、領土的な広がりを持って拡大して来ている。今日それ等の交流は、一つの国家の枠を越え、全地球的規模でなされている。絶対主権的な方法でもって、この正常な経済の発展過程や、社会の発展過程をくい止めようとするあらゆる人工的な試みは、大失敗をして来た、将来に於いてもこりずになそうとすれば、必ずや完全な大失敗を経験せねばならないであろう。

こういった相互依存は、言語の分野に於いてもまた強力な統一をもたらず要因として作用している。偉大な統一文学国語を開花させ、後に国際語を開花させていった基盤自身の中に、統一をもたらず要因が見られる。(96)

(2)、平等思想 — 社会に於ける物質生活の発達、精神分野の発達を併っている。死や死後の平等をうたった宗教上の概念から、フランス革命によって宣言された政治的平等、出来るだけ大きな経済的平等や社会保障を願う現代の人達までを含めたより幅広くて、より深みのある内容をもつ人間の平等についての思想は、特別の意味を持っている。人間の本性に基づく本質

的な平等を願う意識は、あらゆる附帯的な相違をのり越えて、非常にゆっくりとはあるが実現への道を切り開いて来たし、切り開いており、この分野の上でも、まちがいはなく前方へと進んでいる。国際人権宣言の発効はこの事実のはっきりしたきざしである。(97)

奴隷制度や封建経済社会機構の中のカーストや階級のもたらす殆んど完全で、非常に厳しい隔絶と、一方、今日の階級意識や経済的隔りの間には大きな相違がある。あらゆる他国民は程度の低い野蛮人であると考えていた古代ギリシャの観点と、まだ殆んどは実現するに至っていないけれども、現代に於いて原則的に布告された総ての人民、国民、そして民族の平等の考え方の間には、また大きな相違がある。

今日の全世界に於ける文化や文明の格差の縮少（この事はもちろん世界の統一体を意味するわけではない）や民衆生活の民主化、政治制度の民主化といったこれ等の総ては、人間同士により活発な交流を可能にさせ、これ等の総ては言語の接近に反影して来ている。

(b)、技術上の要因 — あらゆる種類の交通機関や意志伝達機関の進歩は、一国の枠内のみではなく、国際的で大規模なあらゆる種類の交流を可能にした。船舶や鉄道、飛行機、バス、自動車、電信、電話、ラジオ、テレビは交流をもたらし技術的手段であり、同時に言語接近の強力な力でもある。これ等によって地域から地域へ、国から国へ行きかい飛び廻るのは商品ばかりでは

なく、人間だけでもなく、言語もまたそうである。この事によって言語間の表現方法の相違がなくなつて来ている。この事は文学言語同士の結合をまちがひなく堅固なものとしてゆき、それは同時に言語の大きな統一をもたらす過程をより促進させてゆき、国際語を生み出す大きな過程へと続いている。

(c)、文明的要因 — 文字の発明や文学の発生、印刷機の考案、科学や美文学の現代的開花、学校や大学、読書室や図書館、演劇や映画、ラジオやテレビ — これ等は文明的要因のほんの一部にすぎない。他の分野の発展と平行して増大し、拡大してきている文明的要因は、言語の統一をもたらす発展線上にあつて、それ等の非常に強力な担い手となっている。数万の教師や教授が、数百万の子供達に学校で自国の統一文学言語を教えている。その統一言語を民衆は毎日、ラジオから、劇場の舞台から、映画館で、テレビを通して聞いている。その統一言語を人々は本や月刊誌、雑誌、新聞等で読んでゐる。…… 今日の文明化された民衆が自分達の偉大な統一性をもつ共通語をもつていたとすれば、それは大部分が文明的要因の結果である。それ等の背後には国家の強制力があり、教育された軍隊やかなりの財政的基盤といった通常、物質的基盤がある。しかし道は逆であつたし、今も逆である。文字で書かれた文学言語は崩壊する事はないし、方言は消えて行き、全く意味をなさないものとなつて来ている。

これまで述べて来たように、言語には幾つかの要因が分裂をもたらずものとして作用し、その他の要因が統一をもたらずものとしての働きをしている。言語の上に表れるそれ等の影響は、単に機械的なものではなく、非常に混みいったものであるといえる。統一をもたったり、分裂をもたったりする要因は、一般的な言い方をすれば同時に作用し合い、お互いからみ合い、お互いに影響し合い、お互いに助け合い、あるいは対立し合うといったものであり、一つの社会集団の中では非常に重要性をもち、他の集団ではそれ程重要性をもたない。一つの発展過程では大きな影響力をもち、もう一方ではそれほど影響力をもたない。言語によって、あるいは言語を介して、それ自身影響をうけ、人間の精神に働きかけ、人間の精神によって変化をうけるといったものである。人間集団の言語は、表現思考の範囲とともに、これらの要因による最後の洗札に身をゆだねている。この意味からしても、「言語は人間集団が位置している社会的背景を反映している文字の集合体である。」というサピールの言語についての定義は、この意味に於いても正しいといえる。(98)

このようにして、カーストや階級、宗教や職業、性別から、もう一方では労働の分割や平等思想、文明的要因といったものにより、原始的流浪の民や部族の言語、民族や民衆の言語、国家や国際的に使われている言語の性格や成り立ちが解明されてきている。これ等の現象を一見ただけでも、人類の発展に併って統一をもたらず要因が大きく作用し、より重要性を帯びて

米ており、一方、分裂をもたらす要因は、単により控え目な役割を担っているにすぎなくなつてきている事にすぐ気づくはずである。結果的には、新しい、より高度で、より幅広い社会統一体の中の意志疎通に奉仕する共通語を諸々の方法によつて創り出して来た。そしてその言語がもし他の言語を駆逐するだけの十分な力をもつているとすれば、その社会統一体の枠外でも共通語としての役割を担っている。一方、弱い言語は消滅していつたり、保持されてはいくけれども一国家の言語として留まつたり、地域的な性格を帯びたものとしてのみ保持されて来ている。

これ等の総括的な言語発展の枠内にある 에스ペラントの置かれた立場の正確な理解や客観的な評価に対して、これから述べようとする事実は第一級の意味合いをもっている。

あらゆる言語のよさに 에스ペラントもまた明確な発展過程の上に誕生した。あらゆる言語のように人間社会の中に、それは自己の推進者をもっている。あらゆる言語のようにそれは種々の要因の影響にさらされた社会現象である。国際語はあらゆる全人類の胎内にある統一をもたらす力に自己の形成や生命、進歩発展をゆだねている。不断で、安定して速度を早めつつあるこれ等の力は、人類の統一をもたらす重要な要因ともなり、人類を自滅の淵におしやる要因ともなる。もし人類が自己の生存権や自由を卑劣にも放棄したとすれば、唯一つの独裁国家による奴隸的な束縛の下に、総ての民族や国家をしいたげさすような事に人類を押しやるであらうし、反対

に自己の生存権や自由を主張し、守り育てていけば平等に立脚した生きがいある社会を創り出すであろう。第一の問題を解く鍵は、あらゆる言語について取り扱ってみる事である。第二の考え方からすれば、世界の主導的立場にある国家の言語が支配する世界を創り出すであろう。唯一の理性的な最も信頼性があつて、許容し得る第三の事例は、国際語の内的な形成の促進を意味し、世界的な枠内での国際語の普遍的な活用を意味している。

中でも力本説の支配する世界の今日の言語事情は、明確な線引でもつてお互いに区割された言語圏をもつていて、というのではない。それは万華鏡の中にある色紙があらゆる色彩を織りなすように、色紙に相当する言語が互いに混り合い、浸透し合つて一言語領域から他の言語領域へと水平的に見て相違を成すだけでなく、一階級や職業、業務といったものから、他の階級やその他のものへと垂直的に見て多様化している。言語自身の中に、今日までの歴史的発展の到達結果といった現実の複雑な社会構造が映し出されて来ている。

3、個人かそれとも集団か

言語の創造に於ける個人の役割はどういったものなのであろうか。

社会的集団は常に言語の最高立法審議機関であつたし、今日もそうである。だからといって社会集団が任意に自分達の言語を創り出す事は出来ない。言語は提示され、規定されたものとして存在しているのである。偶然是普遍的法則の枠内でのみ影響力を持っており、従つてそれはその法則の単なる構成要素にすぎない。

社会集団の一員としての個人、従つて自分達の言語共同体の一員でもある個人は、言語の創造に一役かっている。しかし個人の創造は恣意的なものではなく、独断的になせるものでもない。そのように行動する個人がいたとすれば言語共同体から自分をはみ出させてしまう。

個人の資質だけではなく、社会集団の枠内にある特殊な団体の構成員としての個人も言語の発展に貢献している。この意味に於いて言語は人間社会の最も民主的な創造物であると言える。言語は社会の中に現実に存在している力の上に成り立つ、又は個々の団体が持っている現実の言語を創り出す要素の上に成り立つあらゆる人達の産物である。この言語を創り出す要素は

—この事をよく理解してもらいたいのだが— 例えば、物理的な力や数、経済力、社会的地位、知的要素等々（これ等の総て、又は彼等の中の幾人か、又は種々の階級にあるあらゆる人達のもつ性格や力関係によって各々の社会集団の中で決定的な役割を担っているとはいへ）といった総ての時代やあらゆる社会に対し、前もって固定された要素ではない。傑出した個人の役割 — 言語の初期の発展段階に於いても無視出来ない役割を担っているのだが — はますます注目すべきものとなって来ている。(99)

詩人、著作家、哲学者、科学者、言語学者、報道人 — こういった人達のうちの幾人かのみが意識的な言語創造に於ける影響力を強くもっている。しかし、こういった面でそれ程重要な力を持っていない他の個人もまた、意識的でないにしろ、積極的に言語の発展に寄与している。もちろん個人の言語創造活動が、自分達の間集団の同時代の要求に合致したり、言語の発展を支配している普遍的法則に合致した時にのみ個人は自己の役割を担う事が出来る。(100)

個人はしばしば、この法則を無視する事があるが、その事は重要ではない。個人の言語創造力がもし普遍的法則に合致しており、要求を満すために役立つものであるとすれば、言語の最終的で、異論のない立法者としての社会は、新しい言葉を受入れ、その言葉は言語の中に組み込まれていく。もしそうでないとすれば、個人によって生み出された新しい語彙や新しい表現、新しい文法体系は、跡形もなく消え去ってしまうであろう。あらゆる場合に創始者としての個人は、原始的流浪の民、部族、カースト、階級、職業、宗教団体、国家あるいは国際的な意志疎

通手段の必要性を感じ、その目的のために国際語をうけ入れていく国際的な人間の集団といった社会集団の共通言語活動の中で消滅してしまふ。だからどのように個人が言語の発展をうながしているのか、言語創造活動に於ける個人の参加はどれ程の大きさを持つているのかという事は一般には測り難いものであるといえる。一人一人の個性は消え去り、社会大衆の中に溶け込んでいく。言語学者のみが、時折その事に取り組み、言語に関するそれ等の影響や個人の創造力を研究する。言語創造力は今日に於いて、人々が考えているような「社会契約」とか「合意」に基づいたものであるより、もっと複雑な道にそつて実現して来ているという事が容易にわかるのである。

言語の創造活動は、かなり自発的なものであり、かなり意識的なものであるかもしれない。だが意識的という意味は、その活動がもし人間社会の要求に本質的に合致しているものであれば、「反自然的」という意味に於ける「人工的な」言語を創り出すといった意味では決してない。この事はエスペラントをも含めて、あらゆる言語に言える事である。

言語の創造や発展の中で個人が果す役割にもかかわらず、言語の実際の社会的推進者は個人ではなく、いつも集団である。この事を最もよく理解していたのはザメンホフ博士自身（エスペラントの創始者）であつた。だから彼は総ての個人的な権利を放棄し、あらゆる生きた言語が

創り出されてきた法則と全く同じ法則によってエスペラントが成長し、発展していくようにしたのである。そして、それは実際そのようになって来たし、更に発展を遂げつつある。



(74) 註(39)と註(71)で引用した書から。

(75) Gabriel Sagard, *Grand Voyage du Pays des Hurons* (フローヌ国のすばらしい探険) Paris, 1631.

(76) E. Sapid 註(47)で引用した書から

(77) 註(18)を参照の事

(78) Mario Pei 註(76)で引用した書から

(79) A. Meillet 註(66)で引用した書から

(80) Mario A. Pei 註(70)で引用した書から

(81) Max. Muller 註(19)で引用した書から

(82) A. Meillet 註(66)で引用した書から

(83) Margaret Schlauch, *The Gift of Tongues*, London, 1949, pp. 261—262.

文学英語だけしか知らない人には——英国人のみではなく——ロンドンのコックネイを理解する事はとうてい無理であるといった程のコントラストを持っているという事をこの事につけ加えておきたい。

(84) A. Meillet 註(66)で引用した書から

(85) W. E. Collinson, *La Homa Lingvo*, Berlin, 1927, p. 74.

(86) Max Müller 註(19)で引用した書から

(87) Mario Pei 註(27)で引用した書から

(88) Mario Pei 註(27)で引用した書から

(89)、これ等の数字は不合理なものである。それは確かに矛盾を内にはらんでいる。一〇才の子供の語彙所有量、三四、〇〇〇と中級程度の教養をもった成人の語彙所有量、三五、〇〇〇—だが中には七〇、〇〇〇の語彙を有するものもいるといっている—とを比較してみればよくわかる事である。

先ず第一に、例えばギリシャ語、ラテン語といったインド・ヨーロッパ語やセム語系の言語のように語彙が自律的価値を有する独立体である言語と幾つかの米国の言語のように自律的価値を持たずに語彙が文章の中に溶け込んでしまっており、語彙の数だけ文章があり、文章の数だけ語彙があるといった言語の間の識別をする必要がある。次に自律的価値を有する言語にあっては、能動的知識と受動的知識の間の識別をなさなければならぬ。なぜかといえば、この定義は部厚い辞典の中にある意味説明から、漠然とした広がりをもつて有する意味までさかのぼらなければならぬ。M・ミュラーはこの場合、能動的な語彙活用を考えているのだといっている。彼は語彙の社会的帰属といった知識について説いている。この意味に於いて、私自身は語彙所有量を考える場合、語彙のフレクションは当然考えに入れずに話しをしている。この事についてより詳しい知識を得ようとするならば、一九五八年、U E A 発行の機関誌に掲載された論文 *Kelkaj Lingvistikaj Demandoj* を参照されたい。

(90) Mario Pei 註(27)で引用した書から

(91) Mario A. Pei 註(27)で引用した書から

(92) 一般的に個人の語彙所有量は——個人の教養の反影——相対的に貧弱なものである。旧約聖書は五、六四二語でもって書かれており、シェクスピアは総ての自分の戯曲の中でおよそ

一五、〇〇〇語を用いている。一方、他の者は一六、〇〇〇の語彙を使って書いているという人もいる。マリオ・ペイによれば、ラシーヌ(Racine Jean Baptiste)は総ての自己の作品をたつたの六、〇〇〇語で書きあげているとしており、一方、ウイクター・ユーゴー(Victor Hugo)の作品は二〇、〇〇〇語少々をもつて書かれておりとしている。ウイクター・ユーゴーの場合には、おそらく同一の語彙の総てのフレクションや作品の中に出てくる多くの人名を別個の語彙として計算しているのであろう。ミルトン(John Milton)の総ての文学作品の中で使用されている語彙は、八、〇〇〇から一一、〇〇〇と評されている。これ等の語彙を前に掲げた一〇才の子供の語彙所有量と比較してみれば、シエクスピア・ラシーヌ、ユーゴー、ミルトン、そしてその他の世界的な作家達の語彙量は何とおそまつなものであろうか、優れた雄弁家は、八、〇〇〇から一一、〇〇〇の語彙をもたなければならぬ。エスペラントではおよそ三、〇〇〇の能動的語彙所有から、大量の語彙を得る事が出来る。

(93) E. Sapir 註(47)で引用した書から

(94) A. Meillet 註(66)で引用した書から

(95) A. Meillet 註(66)で引用した書から

(96) 国際語の形成に於ける経済的要因の役割については次の雑誌に掲載された興味ある研究論文がある。

L'Année Politique, Economique et Coopérative, n-ro 92, nov-dec, 1949
L'Espéranto, Langue Vivante, Lucien Laurat.

(97) この事について、更に詳しく知ろうとすれば次の書の中にある世界人権宣言の章を参照すべし、

Ivo Lapenna, *Aktualaj Problemoj de la Nuntempa Internacia Vivo*,
Roterdamo, 1952, Cap VII.

(98) E.Sapir 註(47)で引用した書から

(99) 次のような面白い逸話がある。

ローマ帝国の皇帝テイベリウス (Claudius Nero Caesar Tiberius) がかって文法的誤りを犯した事があった。その時側近の文法学者、マルセルが、その事について皇帝をたしなめたことがあった。その時丁度その場に居合せた他の文法学者は、マルセルに反論した。そして「それを口にされたのが皇帝なのであるから、例え皇帝が文法的に誤った言葉使いをしたとしても、それは正しい用い方である。」といった。その時マルセルは皇帝に向かって次のように言った。

「貴方はシーザーがなしたように、人民に対しローマの市民権を与える事は出来ても、言語に對してなす事は出来ないのです。」

マルセルの考えは誤っている。どれ程の文法的誤りが繰り返されて、ついには文法となってきたことであろう。影響力のある人の文法的に誤った言葉使いがどれ程広く、一般大衆に受け入れられて来たことであろうか。

(100) 言語が個人によつて変更され得るといふ思想は、かなり古くからある。古代ギリシャの

偉大な哲学者であり、言語学者の一人であるプロタゴラス(Protagoras)はギリシヤ語の性について、幾つかの規則をうちたてようと試みた。これ等の自己の規則を基として、彼はホメロス(Homeros)の叙事詩を正そうとした。——彼はそれを誤ったものだと考えていたからである。——だがプロタゴラスの仕事は不成功に終わった。彼は言語の發展に於ける個人の参加は、大部分が条件づけられたものであり、ほんの少ししか個人の参加する余地は存在しないのだという事を、確かに理解していなかったからである。エスペラントもまた、どのような個人も、どのような権威者であれ、あらゆる言語に於いてそれ等の変更が不可能であるといった同じ理由から、決して任意に変更する事が出来ないものである。

第五章

偉大なる共通語の形成

部族よりも早く流浪の民が、国家よりも以前に民族が存在していたように、初めに流浪の民の言語が、後に部族の言語、民族の言語、種々の地域的民衆言語、国民の言語という順序で形成され、最後に国際語が形成されていった。前章で論じて来た種々の要素に基づき、あるいはその結果として生じて来る言語の発展性向は、より大きな広がりをもった人間集団のための少数の言語へと導いていつている。

より幅広い社会統一体のための新しい共通語の創造は、複数の言語を基盤としていつも現実化していった。複数の部族の言語のうちの一つが時たま新しい言語の中心的で、決定的な位置を占めていったが、一方他の言語は単にその言語の豊潤化をうながしていただけであった。このようにして、新しい社会の中で必要とする意志疎通の大きな要求を満たし、思考の表現を満たしていかなければならなかった新しい言語は、一連の基盤となつていった言語よりもいつも表現能力に富んでおり、より細かなニアンスの違いも表現出来るものであった。

多少とも無意識的になされた原始時代に於ける言語形成と違って、総括的な経済、社会、そして政治環境によって規定されたり、種々の部族の言語といった狭い枠内ではぐくまれたその時代までの言語要素に左右されたりはしているものの、その創造は大部分意識的なものであった。

1、ギリシヤ語

偉大なる共通文学言語を創り出して来たり、創り出しているその手法はさまざまである。その内の最も興味あるものの一つがあきらかに古代ギリシヤ語の形成である。

北方からやって来て、打ちよせる波のようにバルカン半島の一部やエーゲ海の島々、小アジアの西海岸を侵略しつづけ、占領していったインド・ヨーロッパの部族達は、さまざまなヘレン語を話していた。彼等が占領した地域には、民族の起源や言語が今だにわかっていない民族が住んでいた。それはただ名前だけが残っている。それ等の土着民の言語は、インド・ヨーロッパ言語族に組していない事だけは確かなことである。小アジアに於いてもまたギリシヤ人は、今日に於いてもヘレン語以外の言語を見い出すといっている。このようにして、ギリシヤ語は

異国の街々に浸透してゆき、「異国の言葉」のもつ多くの語彙や文法構造上、種々の新しいものを大部分取り入れて来た。

紀元前、七世紀に於けるギリシャは、多くの独立した都市国家に分割されていた。最初に書き残された記録文書によると、その時代のギリシャでは多くの言語が実際に使われていた。紀元前5世紀の記録文書によれば、その時代のあらゆる都市は自分達固有の言語をもっていたと書かれてある。これ等の総ての言語は（これ等の言語を言語学者達の多くは「方言」と名付けているが、それ等の上にとどのような共通語も存在していなかったのだから、そのように名付ける事は誤りである。）複数の言語から成り立つ、幾つかの言語群に分割する事が出来る。アカイア言語群はヘレン部族の最も早期の浸入がもたらしたものである。国の北東部にはアイオリス語群がある。そしてその中にサブファヤアルツエオと呼ばれるレスボ島の言語がある。ドリア語群はお互いに大変異つた数多くの言語から構成されている。この言語群に属するものに、例えばクレタ島やロードス島、その他の島々のコリントス語やラコニア語、シシリア語がある。イタリアやシシリアではドリア語で文学が形成されていった。文学の観点から最も重要な地位を占めるものは、イオニア・アツチカ語群である。アイオリスとアイオニアの結合は、特殊な言語を創り出していった。その言語をメイエは「人工語」と呼んでいるが、しかしその言語はヘシオドスに代表されるように韻文に使われ、ギリシャ人同士の意志疎通に役立つと共に、小ア

ジアの外の世界との交流にも役立つものであった。総てのアイオニアの都市では、ヘロドトスやアナクレオン、ヒポクラテスが日常使っていた言葉である共通アイオニア語が使われていた。一方、文化水準の低いドリリア人達は、この時代にもまだ多くの言語を話していた。アイオニア語は紀元前七世紀から花開く文学を創り出していった。アテネのアツチカ語は紀元前五世紀ないし四世紀のころから豊富な文学が創り出されていった。

これ等のあらゆる言語や方言は、紀元前四世紀から少しずつ融合しあっていき後に唯一つの共通ヘレン語を創り出していったが、その基盤となっていたものは、イオニア語と混り合っていたアツチカ語であった。

アレクサンダー大王はこの新しい共通語——コイネ(101)——を自分の軍隊によって征服した広大な領土の上に移植した。この言語は時代と共に全東ローマ帝国の偉大な共通語となってゆき、その言語から今日の近代ギリシヤ語が生れて来た。一方、シシリアで使われていた古代ギリシヤ語は、ラテン語に駆逐されて、まもなく消滅していった。しかし、同時に古代ギリシヤ語を吸収していったコイネは、帝国の東部で独立都市国家の性格を失っていったあらゆる地域の言語となつていったが、そこではそれより以前、多くの言語が話されていた。この共通ギリシヤ語はギリシヤ人の間で、あるいは東部で以前に使われていた諸種の言語のもつ多くの語彙を吸収して、より大きく豊潤さを増大させていった。

2、ラテン語

変貌しつつあった時代に、アペニン半島に住んでいた民族達は、まさに様々な言語からなるイタリア・ケルト語を話していた。どこから彼等がやって来たのか、何時から彼等がその領土に移り住むようになったのか、今なお知られていない。リグリア人達がジュネーブの湖畔に追いやられ、領土を狭められていったころよりも以前は、彼等が南ゴールに住んでいたように、西イタリアの中心部にも住んでいた。

紀元前4世紀の初期のころには、数多くの亜群をその内にもつ少くとも三つの中心的なイタリア語群があった。それ等は、ウンブリア語群であり、オスカ語群であり、ラテン語群であった。今日よく知られているそのラテン語は、ラティウム国の言語であった。そこではローマ市自身に住む貴族だけの言語であった。そしてそれは近くの領土に住む人達の言葉、セルモ・ルステイカス（田舎の言葉）と區別して、セルモ・ウルバヌス（都会の言葉）と名付けられている。シシリアの人々は我々が見てきたように、アツチカ語とイオニア語の合成によって出来た共通コイネ語やドリリア語の原形となつていった古代ギリシャ語を話していた。北部ローマではエトルリア語があった。

ローマの勢力の拡大と平行して、ラテン語はすこしずつ拡まってゆき、勝ち取った言語の源泉から新しい言葉をとめどもなく汲み取り、豊かさを増してゆきながら次第／＼に発展していった。それは最初、近隣の領土に拡まってゆき、後にそれはオスカ語群や、ウンブリア語群の言語をけちらし、北部地方のエトルリア語やケルト語、あるいは南部地域のメサピアン語といったイタリアにある非イタリア語さえ併合していった。ついにラテン語は西世界の非常に広大な地域、ゴールヤスペイン、北アフリカといった地域にさえ無理強いされていった。

文学言語としてのラテン語の形成は、リビウス・アンドロニクスの戯曲やカトニウスの著作集や講演集といった言語文化を育んでいった紀元前三世紀に始まっている。スキピオヌス、ホルテンシウス、ルクレツィウスと特に偉大な雄弁家であり、雄弁法の教師でもあったキケロニウスは、これ等の言語文化を磨きあげ、更に発展させていった。このラテン語は――複数の言語が混り合っ出て来た――ローマ軍団の剣先で保たれており、広大な領土で使用され、無数の地域や地方の言語、方言に対する共通帝国言語として強制されていった。こうして強大な統一をもたらすプロセスが数世紀の間続いていた。

西ローマ帝国が異民族の侵略にあつて滅亡した紀元5世紀になつても、そういつた統一をもたらすプロセスは、まだ完全に終つてはいなかった。ローマ帝国の総ての住民は、みんな共通

文学ラテン語を話していたと主張する言語学者がいるけれども、それは真実の状態に答えていないばかりか、解答にもなっていない。ラテン語は文学や後世に遺されていた遺跡にのみ用いられたものであり、民衆の生活言語として話されていたのではなかった。彼等がその時代にあった時よりも、あらゆる統一をもたらず要因がかなり強力なものであり、より効果をもたらししている今日でさえも、同一国家共同体の民衆言語の間にかんがりの大きな違いが見られるのであるから、3世紀ないし4世紀のあらゆる階層に位置する民衆の間に、完全な言語の統一が可能であったという考えにどのようなようにして到達出来るのであろうか。

ローマの経済力や政治的勢力が停止してしまった時に、文学ラテン語もまた生きた国家言語としての自己の生命を終えている。しかし、それはキリスト教の宗教言語や中世紀の封建社会の支配階級の言語として更に生命を保つていった。かつて広大な帝国に住んでいた民衆は、自分達固有の地域言語を話しており、さらに発展さしていった。これ等の言語の内から本質的に他の統一をもたらず要因の下に、新しい時代の中で、ラテン系の言語と呼ばれる統一性をもつた言語が形成されていった。

古代ラテン語は従つて、或る人達が誤つた考え方をしているように、複数の方言に分散していったのではなく、それは完全な形で保たれており、一つの社会的推進者から他の者達に引き

繼がれていただけであつた。それはその言語を更に發展さしていった封建社会の貴族階級の人達であり、カトリック教会であり、科学者達であつた。一方、まだ完全にはラテン語化されてしまつていなかつた民衆言語は、だからこそお互いに大きな相違をもつており、本質的に新しい環境の中で更に自己の生命を生きずかせていった。ローマの統一をもたらず力はもう影響力を失つてはいたが、封建社会やカトリック教会は、科学者達と共にラテン語を守り育てていった。しかし、民衆やその他の大衆は含まれていなかつた。分裂をもたらず要因の影響力が表にあらわれて来た。従つてそれ等の言語は、階級や中世紀のラテン語による影響をうけながら自分固有の道を進んでいった。

そのずっと後になって、資本主義の芽ばえと結びついた国家の形成や複数の民族からなる大きな連邦国家の形成とあいまつて、新しい統一性をもつた国語が生れてきた。このようにして、ラテン系の文学言語が形成されていった。しかし、それ等はみんなが信じていたり、信じさせられていような古代ラテン語の直接の娘言語ではなく、反対にラテン系言語の総ては、複数の地域的民衆言語を基盤として生れて来ている。フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語は従つて古代ラテン語から派生して来たのではなく、それぞれの地域で話されていた民衆言語から派生して来たものである。

3、もう少しの実例を

今日の文学国語のうちのどれを研究してみたとしても、それ等はかなり意識的な創造物であり、数多くの要素から成りたつていているという共通点を見いだすであろう。

今日のフランス語を例に挙げて考えてみよう。あらゆる統一をもたらず要因がその影響力を大規模に示威している今日に於いてさえ、「フランス語には万にもものぼる数々の地方的話し言葉がある。(102) これ等の話し言葉や方言は、村どうし理解しあえるものであったり、地域どうし理解しあえるものであるという程の隔りのあまりない。言葉どうしのつながりをもったものであり、お互いに影響しあつてゐる。(103) 所が、これ等の方言の中にも別々の名前をつける事が出来る程の相違をもつた幾つかの言葉がある。ローレーヌの人達やフランス・コンテの人達は、ピカートの言葉を理解する事が出来ない——とメイエは言つてゐる。これ等のあらゆる方言や地域的話し言葉の上に、一般に知られ、話されており、あらゆる文化活動や公的関係で使われ、学校で教えられている共通文学フランス語がある。

この共通フランス語の起源は、パリに住むブルジュア階級の言葉であつたと共に、パリの言葉でもあつた。その言葉は十七世紀の始めに不動のものとなつていった。文化や政治の中心で

あり、かつて王権のあった所でもあり、それに加えて主要な大学の在ったパリは、フランス全土に自分の言葉を拡めていった。国の南部はその言葉の影響力が最も小さかった所である。この人達にとって、フランス語は異国の言葉にも近いものである。パリの言葉は都市への浸透に成功はしたものの、田舎へのパリ語の浸透は非常に難しいものであった。フランスの南部地域へ訪ずれてみればその事を十分に納得するであらう。

音調がやわからかで、しなやかな感嘆すべきフランス語は、とても多くの様々な言語から派生して来た複数の要素からなりたっている。パリの言葉でありながら、それは様々なフランス民衆言語の影響をうけているだけでなく、全く異国の例えばゲルマン語の影響をうけている。

四、六三五のフランス語の語彙をもったフランス言語学辞典によれば、このうちの二、〇二八語がラテン語から、九二五語がギリシヤ語から、六〇四語がゲルマン語から、九六語がケルト語から、一五四語が英語から、二八五語がイタリア語から、一一九語がスペイン語から派生して来ている。アフリカの言語からは六語が、諸々のアジアの言語から九十九語が、アメリカ・インディアンの言語から六十二語が、オーストラリアやポリネシアの言語から二つの語彙が派生して来ている。その他の語彙は、ポルトガル語、アラブ語、ヘブライ語、ハンガリア語、トルコ語、スラブ語に起源をもつものである。

今日の英語も大部分主都の言葉を基として生れて来た。しかし、パリと違って特に言える事は、ロンドンには複数の方言が交錯している点である。英国にはフランスと同じく数多くの方言や地方的話し言葉がある。これ等の方言のうちでも、九つだけが主要なものと考えられている。英国の中にあるロンドンの置かれている位置や、十九世紀に於けるこの国の世界的役割といったものにより、フランス語よりも更に多くの様々な要素から英語は構成されている。英国を幾度にも渡って侵略しつづけた異民族がもたらした大量のラテン系語彙を英語は内に秘めていると同時に、ギリシャ語やフランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、デンマーク語、ヘブライ語、ゲルト語、中国語 ……といった世界のあらゆる言語に実際みられる語彙を源泉として今日の英語は形成されている。英語のおよそ四〇%のみが英語の基盤を形づくっている。アングロサクソン系の語彙である。この他のあらゆる語彙はアングロサクソン系以外の言語を源泉として派生して来たものである。英語に語彙を与えて来た言語の総てが複数のあるいは、ほんの数少ない人間の祖先であったと考えてみれば、英国辞典の多様性についておよその推測が出来るであろう。非常に多くの様々な言語の源泉から、豊富に語彙を汲み取って行きながら、英国人はとても高いレベルへと自分達の共通語を豊潤化さしていく事に成功していった。こうして英語は完璧ともいえる意志疎通や思考の威力ある媒体となつていった。(104)

ドイツにはフランスや英国にあつたような文化的、政治的中心としての主都が存在しなかつ

た。文学ドイツ語は全く他の道にそつて形成されていった。ドイツ語は帝国諸候の特に参事官用語として生れて来たが、その後の宗教改革はそれを文学言語として撰取し、より厳密なものに育て上げ確固不動のものとなしていった。少々重苦しく、かなり難解なこの共通ドイツ語は、学校で教えられ、科学や文学の分野で使われて来たし、今日も使われている。それにもかかわらず、ドイツ語はフランスの民衆が自分達の文学共通語をもっているといった意味での総てのドイツ民衆の所有物ではない。ドイツ語にも当然、多くの借用語がある。しかし、ドイツ語の性格の一つは、その創始者がそれ等の言葉をドイツ語の衣で被う事を好むか否かという事にかわっている。例えばドイツ語の *Ausdruck* はラテン語の *expressio* の盲目的な翻訳以外の何ものでもない。それはフランス語の *expression* が有するあらゆるニアンスをドイツ語の中にもたしめている。 *Fernsprecher* は *Telefono* (ギリシヤ語で離れた所の音声) からの訳であり、 *Wasserleitung* (水道) はラテン語から借用して来た以前の言葉 *Aquädukt* の変形である。

イタリア共通語はフロレンスの文化を創り出し栄えさせていったトスカナ語を基盤としてゐる。イタリア語にも数多くの方言や地方的話し言葉がある。それ等にはお互いに大きな違いがあり、イタリア語を話す人にも全く理解出来ない程のものである。又解つたとしても、例えばピエモンテの方言のようにとても難解なものであるというように、文学イタリア語から相当かけ離れたものとなっている。

ロシア語はモスクワの言葉を基として創られていったし、一方、日本語は東京の言葉から出来上ってきたものである。中国語は北部の北京官話に主に代表される北京地方の言葉から成りたっている。中国の国民政府は、各種の省から派遣された代議員の演説を、通訳するために通訳者を必要とする事もある。

最近では複数の新しい共通語が生れつつある。インドネシア語は一マラヤ語を基として創られており、それは七、〇〇〇万人の人達のための共通語として使われてきている。アフリカではハウサ語がナイジェリアでの意志疎通や文化、文明教化の手段となっているし、一方、スワヒリ語は全東英国領アフリカの共通語として採用されて来ている。(105)

*
*
*

偉大で表現力豊かな総ての言語は、各種の要素から大部分が絶えず意識的に創られてきたものである。要素となつて来た言語が多ければ多い程、言語はますます豊かになつて来たし、豊潤さを増してゆき、ますます有益な意志疎通の媒体や思考手段となつていった。

もちろん最初のころ、それ等の新しい語根や合成語、文体は「粗野なもの」であるかに見えた。言語のすばらしい成長や必要な変化を理解出来ない人達がいたとすれば、その人達は新しい需要にせまられた時、「粗野なもの」と言われる言葉を攻撃して止まないであろう。だが人間の生活は新しい言葉を必要としており、それ等はあらゆる批判があるにもかかわらず規則的に勝利をおさめてきた。原始的な或る種の種族や数世紀の間、孤立して来た部族達の言語を除いては、「純粹な」種族等存在しないように、「純粹な」言語も存在しないのだという事を批判家達は忘れてしまつてゐる。世界の歴史の中で、力強い文学やその他のあらゆる文化的価値を生み出して来たし、今日もまた生み出し続けている偉大な共通語は、決して「純粹な」言語ではなく、多くの源泉となつて来た言語が共通語の文体や内容の豊潤さに絶えず貢献しながら、合成言語を形づくつていった。

国際語もまた、あらゆる諸々の言語の源泉から日に日に新しいニュアンスの豊富な言葉を汲み取りながら、豊かさを増して来たし、今日も絶えず豊かさを増大させてゐる。だからこそ、国際語は世界の枠内での人類の有力な意志疎通手段であり、思考の有力な手段でもある。

(101)、ギリシャ語で *loinós, é, ón* は、「共通の、共通ギリシャの」を意味する。
(102)、註(6)で引用した書から
(103)、註(6)で引用した書の中で、A・メイエとM・コーエンは方言と地方的話し言葉を分割するのための文法上の適切な規準を見出す事は不可能であるといっている。

(104)、「外国語」から自国語を「浄化」しようという現在までの、あるいは戦前、戦中になされた諸々の試みは、反動的傾向を示しているだけではなく、言語自身を死滅においやる愚かしい試みでさえある。これ等の試みは、それぞれの形で戦前、戦中にわたって、各国で猛威をふるった新しいナショナリズムの最後のあがきであった。例えば、イタリアのファシズムは幾つかの国際的語彙を「異国のものだ」としてイタリア語から排除しようとした。 *hotel, menu, chauffeur* という語彙はフランス語からイタリア語に入って来たものであるが、実際にはラテン語に起源を有しているものであるのに、ゲルマン語かギリシャに起源を有する *albergo, lista, auista* という語彙に取り換えたというようなおかしなことをやってのけている。戦時中ファシズム政権下にあつて、クロアチア語では例えば、*telegram, telefon, radio, automobil* といった国際的語彙を、これ等の国際的語彙の盲目的翻訳である *brzojav, brzoglas, krugoval, samovoz* といった語彙に政治力をもって、強制的に替えさせられた。中でも *automobil samovoz* の代りに「空気の入った車輪をもつ四つ足の自動車輻」といった失笑を買わざるを得ない言葉を平然と使わされていた。これ等の言葉の「浄化」は、統一をもたらず言語の発展性向に背をむけるものでしかない。だからこれ等の試みは、政治的圧力の下で時たま多少の成功を収める

事が出来得たにしても——もちろん消極的な意味での——必ずや破綻に追いやられるものである。

(105)、幾つかの新しい共通語の形成は、膨大な数の言語から少数の言語へと常に導かれている言語の発展性向と何ら矛盾するものではない。新しい偉大な言語は、他の多くの言語や方言、地方的話し言葉をもった拡大な領土の上で共通語の働きをしてきており、それ等は新しい言語領域での意志疎通手段として以前の言葉にとつて代ってきている。と同時に他国によって無理強いされた外国語をそれ等の領土から払拭して来ている。

第六章

国際語

世界的な観点より見て、最も傑出した言語分野での文化―歴史的イベントは、国際語の誕生と形成である。その任務は世界中の人々の共通語としての役目を果すことにある。言語学や社会学の観点より見たその非凡な意義やその特別に重要な役割といったものからもまた特別注目に値するものである。

語彙の最も幅広い意味に於ける国際関係の発展が、国際語の現実的必要性を感じさせる程までに到達したり、これ等の性格を帯びる所まで到達したという歴史的條件が整った時にのみ国際語は生れいずる事が出来た。もう一つには、言語分野で十分に論議されてきた総てのものを内的要素としてもっている国際語の基盤となっていた国際的言語材料を国際関係の発展が創り出したという歴史的條件が整った時にのみ、国際語は誕生する事が出来た。この事を最もよく、天才的感覚で理解していたのがエスペ란ートの創始者、L・L・ザメンホフ博士であった。自分の考えを彼は短かい文章で書き残している。「言語が全世界的なものとなっていくためには、それをそう名付けるだけではだめである。」

この偉大な真理が、一八八七年に刊行された彼の第一書の表題紙に印刷されている。

共通語の思想は、国際語自身の誕生よりもずっと古いものである。紀元前に書き残された物語りや伝記は、すでにその当時の人達が言語の異なる人達との交流のために、共通語の必要性を感じていたという事を証明している。しかし、その時代にはどのような国際語も生れてこなかったし、生れて来る事も出来なかった。その当時は誰れも、そのための必要性をそれ程強く感じる事はなかっただろうし、その当時までに到達した言語の発展水準は、国際語の形成をうながす程、十分に豊富な国際的言語材料を育くんではいかなかった。普遍的な条件が成熟していくためには、多くの世紀を経ていく事が必要であった。国際語は中でも統一をもたらす要因が、分裂をもたらす要因に対して勝利の行進を始めた新しい時代に誕生したのである。

1、形成

封建制度から新しい経済体制への移行、需要を満すための集会的な機械力による生産体制、労働の細分化、そして国際貿易によって特徴づけられた——資本主義への移行は、言語の上に複数の影響をもたらした。

(a)、「第三階級」——進歩的ブルジョア——は国内関税のない、あるいは商業や意志疎通を妨げるところのない統一国家の創造についての要求をいたる所でうちたてていった。弱体化した封建制度を崩壊させながら、彼等は少しずつ統一国家の建設に成功していった。国家や連邦国家の形成と平行して偉大な共通文学国語が形成され、さらに発展していった。

(b)、社会的推進者が封建支配階級であった中世紀のラテン語は、その推進者達と共に少しずつ消滅してゆき、それはついにローマ・カトリック教会の特殊な宗教言語として用いられるだけになっていった。意志疎通言語としての中世紀のラテン語の消滅は、一部の人達が誤った考え方をしているように、ラテン語の中には新しい思想を表現するための語彙があたかも不足しているかのように言う人達が居るが(新しい語彙を創り出す事を妨げるものは何もない)実際にはそうではなく、その社会的推進者が消滅してしまった事が原因となっている。ラテン語の

運命をこの時代にはつきりと予見していた最も高名なヒューマニストの一人にスペイン人の J・L・ヴィベスがいる。彼は自分の書 "De Disciplinis, 1532" の中で次のように述べている。

「総ての人達によって共通語として使われる唯一の言語が存在したとすれば、とても幸せな事であろう…… ラテン語は亡び去っていくであろう。そしてその時、あらゆる科学に大きな混乱が起こり、民族の間に大きな隔りがやがて来るだろう。」

(c)、ラテン語は消滅していったが、その一方では国際関係の緊密度がますます高まっていったために、中立的国際語の必要性が強く感じられるようになっていった。物質的な関係、特に商品の交易が極度な発展を遂げていく一方、精神的交流は共通語が欠如していたために、大きく遅れていった事が特に挙げられる。学校や大学に於ける複数の外国語の学習は、その目的のために捧げられた膨大な学習時間やそのために費やされた膨大な費用にもかかわらず、あまりにも小さな効果しか上げる事が出来なかった。この事を確認しようとするれば、各国を旅行してみたり、あるいはあらゆる国際会議や世界大会、その他の国際会合に出席してみれば、容易に理解する事が出来る。共通文学言語の欠如は、それを創り出す試みが山積したという事からも強くうかがえるものである。(106)

(d)、これ等の試みとは無関係に、膨大な国際的言語材料が全く自発的に育つてゆき、休みな

く形成されていった。それは国際的な語彙群からのみ成りたつていてはならず、言語のより重要な要素である表現方法の近似が形成されていった。(107)

このようにして、文化や文明の不断の均一化が基となって、全人類社会の胸中に国際語の基礎が芽ばえていった。これ等の意味で、国際語はあらゆる他の言語と同様に、細部に渡るまで、国際的言語材料に条件づけられ、規定されている。

2、国際性

国際語は最大限に国際的要素から構成されなければならないという事を、ザメンホフ自身よく知っていた。だから彼はその辞書の中に既に国際化してしまつた語彙を採り入れており、新しい国際的な表現方法をもつて、言語の豊潤化を計る道を印した。彼はまた言語は語彙からだけなりたつものではなく、更にまた絶対的な国際性を有する語彙は——内容の面からいっても形態の上からいっても——存在しないという事をよく知っていた。そしてもう一方では、学習の容易化を計るため、その国際的言語材料を秩序だて、体系化を計る事が必要であり、言語のもつ不要な附属物や不合理性から国際語を解放する事が必要であるという事を知りつくしてい

た。この事から、エスペラントは音声学的正字法を採用している。この事からその中にあるあらゆる要素は正確に定義された意味をもっており、その言語は全体に渡って最も簡素な文法構成を有する膠着性言語となっている。接字の体系化によって、国際語はデリケートな派生語活用を生み出す幅広い可能性を得ている。新しい計画言語を考え出した贖科学者達が、自分達の言語の「即時的理解」をもって複数の西ヨーロッパ言語を話している人達に虚勢を張っていると聞いたそうといった意味での言語の「即時的理解」をそれは一見して、時折いくらか妨げるかに見える。しかし、それは言語の習得のしやすさや、もつと更に大きな国際性を、もちろん限定された一国家やそれ等の衛星国家といった観点からではなく、全世界の国家や民族の観点より見て、真の意味での現実性ある国際性を言語に与えるものである。まさにそれは西洋の国々の人達においてばかりではなく、あらゆる国土の上に住む人達にも、知識人ばかりでなく、一般の人達にも言語の習得を容易にさせ、書いたり、読んだり、話したりするこれ等の即時的な現実的活用を可能としている。

国際語はまた他の観点より見ても国際性を有している。国語が特殊な理由から、国家の領土の枠外にも拡がって使用されている場合でさえ、国語が国際的意志疎通のために多少とも高度な役割を担って使用されている場合でさえ、一国家の言語はその歴史的条件によって、内的性格によって、あるいは主にその社会的推進者によってあくまでも国語である。国語は自分達の

国家に所属している。あらゆる国家は自分達の国語の精神的主人である。他の国民はそれを多少上手に使えるようにその言語を学び取る事は出来るが、彼等は自分のものとしてそれを感じる事はない。

彼等は学ぼうとする言語をただ多少ともうまく模倣する事が出来るだけであり、時折その言語に精通する事は出来るが、その言語の主人となる事は出来ない。一方、国際語は国際社会の所有物であり、その社会の総ての人達が自分のものとして、それを感じとる事が出来るものである。エスペラントはだからこそ、その社会的推進者の観点より見て、唯一無比の国際語である。この事はまた、世界の枠内に於ける意志疎通の中立的な超国家的媒体として役立つといった目的の観点より見てもまた国際性を有するものである。どのような国語も国際性を有するこれ等の三つの本質的要素を持っていない。だから、世界的に広く用いられて来ているどのような国語でさえ、「国際語」と名付ける事は出来ない。又一方、共通計画言語はそれが意志疎通の現実的媒体として社会的に、あるいは国際的に根をおろしてしまふよりも以前には「国際語」と呼ぶことは出来ないし、「言語」とさえ名付ける事も出来ない。言語問題に従事している事を職業としている言語学者が先ず第一に、それ等に真の名前をつける事を始める時代がすでにやって来ている。

3、社会的推進者

偏見や盲目的愛国心がもたらす排外主義、戦争、虚脱、悪辣な禁止命、といった障害があったにもかかわらず国際語は世界のあらゆる地域に道を切り開き、あらゆる社会階層に浸透していった。又新しい文化を生み出しながら一貫して豊かさを増してゆき、それと平行して内的な発展を遂げていった。

しかし、多くのあるいは殆んど文献学者の間に於いて、まさにこの点に関して、どうしてこれ程までの取違いや誤った結論がなされて来たのであろうかという疑問が持ち上った。言語の現実の推進者が個人ではなく、社会集団であるとすれば、どのような社会集団が国際語の社会的推進者なのであろうか。部族や民族そして国家がある。そしてそれ等は自分達固有の部族語や民族語、国語を持っている。だがどこに国際的民衆がおり、どこでその民衆は国際語を話しているのだろうか。そういった国家はあり得ないし、従って語彙の持つ真の意味に於けるそのような言語はあるはずがない。エスペランはとても平凡な考えを表現するためにも役立つし、「チエスやブリツジよりも優れた」頭脳の訓練手段ともなり得るし（言語学者が多くの本に興味ある試みを掲載している）趣味的分野にも活用し得る。それでもエスペラントは真の生きた言葉ではないのだろうか。この言葉で文学的創作が行なわれており、芸術的表現が成され

ている事について語ろうともしないのは何を意味しているのであろうか。もう一度言うが——あらゆる科学的分析や結論を導き出す前提条件である——事実を知ったり、認識する代りに、人々は自己の贗の概念や歪曲した概念の必要性を満そうとして現実を犯しているのである。

これ等の基本的に誤った立脚点もたらすあらゆる混乱の主因は、非常に単純な事実を、即ち同一の個人が自分達固有の言語をもつ社会集団の住人であると同時に、複数の社会集団にも属する事が出来るといった事実を見落している事にある。多くの方言に目を向けて見れば（方言と呼ぶその言語のうえに共通言語が存在しないとすれば、その方言を本来の意味からして「言語」と名付けるべきである。）特定の地域社会集団がその方言の推進者であるように、同一の個人が同時に国家社会の一部を成しているといった特質の中に、国語の社会的背景がみられる。同一の人達は更に或る職業や仕事、宗教、趣味的領域にも携さわる事が出来る。この事から、専門的言語が成長していく土壤が出来上っているのである。

科学の急速な発達を併う現代に於けるあらゆる膨大な経済力の発展は、国際的性格をもつ豊富な言語材料の創造をもたらしたただけではなく、より強力な統合へと人類を押しやっていった。これ等の客観的發展へのプロセスは、最も幅広い社会統一への現実的渴望（抽象的ではなく、哲学的思考）といった新しい感覚を生み出さずにはおかなかった。それは同時に、人類社会へ

といった形で具体化していった。ザメンホフの鋭敏な魂は、民族間同士の憎しみに満された複数国家の環境の中で生れ、教育をうけ、生活する事によってますますその事を感じずにはおかなかったのである。だからこそ当然のこととして、彼はヒューマニズムの精神や国際主義の精神を言語の中に吹き込んだのである。ヒューマニズムに基ずく国際主義は、言語の強力な思想的背景であつたし、現在もそうである。それは国際語に心や魂、あるいは全く特殊な性格や外面的特色を与えて来た。しかしそれなしにはどのような言語も生き続け、成長し、成熟していく事が出来ないものである。

国際語はその誕生の日から、人類社会への渴望といった生きた感覚の最も純粹な表現であつた。それはこれ等の感覚を強化しつづけて来たし、今も強化しつづけている。

同じ考え方にたつ人達は——確かに未だ数少ないけれども——これ等の事から、自己の国家や地域の言語集団社会の一員であり、そして専門的言語社会集団の一員でもあると同時に、自分分は人類の一員であるといった社会的実在を示すもう一つの顔をもっている。このもう一つの顔をもつた彼等は国際的な社会的勢力を現実的な規模で形成しており、その上に国際語が成りたっているのである。 에스ペラント はだからこそ方言や国語と対比して考えられるものではなく、スラングやその他の同等な言語形態に匹敵するものでもない。 에스ペラント は「価値」(そ

れ等は同等の価値をもっている)の観点からではなく、同一の人達の社会的帰属がもたらす三つの主要な観点から、即ち地域社会―地域の方言、国家―文学国語、人類―国際語といったお互いに垂直関係にある三つの言語の中の一つである。(108)

4、統一性

ザメンホフが予見した通りに、国際語は他のあらゆる言語が発展を遂げて来た道と原則的に全く同じ道を辿って発展して来た。この事實は一般に余り知られていないばかりか、時には世界的に名の知られた言語学者達にさえ殆んど知られていない事がある。「エスペラントは発展して行く事は出来ない。あるいは「それは方言に崩れ落ちていかざるを得ない」といったとても馬鹿げた引用文を掲載した書を出版する事が可能な程、いたる所にたくさん書かれている。事実についてどのような知識ももち合わせていないこれ等の主張をもう一度考えてみよう。

事実の一つはエスペラントが生きた言語として驚くべき発展を遂げて来た八十八年間の歴史的存在とその機能である。

幾つかの語根の意味は拡大されたり、隠喩でもって修正されたり、縮小されたり、更に精密な定義でもって修正されたりしている。短かい語彙は時には長い語彙に置き換えられている場合もある。言語の構造の中に内含されているあらゆる可能性は、以前には人々が気付かなかつたけれども、類推的に、あるいは理論的に幅広く利用出来るものであり、利用されて来ている。

エスペラントの発展は語彙の量の拡大に特にはっきりと表れている。一八八七年に言語は九〇四の基本語根とそれより派生する三、六〇〇の語彙を持つていたが、一九三〇年に刊行された辞典、ブレーナ、ボルターロ (P. V) には七、八六六の公用語根とその語根より派生するおよそ八〇、〇〇〇の語彙が掲載されていた。そしてその他に数多くの専門用語や技術用語を掲載した辞典があつた。一九七〇年に刊行された辞典、ブレーナ・イルストリータ・ボルターロ (P. I V) には、一六、〇〇〇の公用語根とその語根より形成されたおよそ一六〇、〇〇〇の語彙が取り扱われている。(10)

最も微妙な思考さえ表現出来るデリケートな媒体としての言語を形成していったその壮大な発展にもかかわらず、エスペラントは簡潔さや柔軽さ、やさしさを少しも失っていないし、文法上の基本的規則にも少しの変化もない。一方日常生活の中の言語の現実的活用を満たすための七、〇〇〇から八、〇〇〇の語彙を創り出すには七〇〇から八〇〇の語彙を知っていればよい。その他は教養の程度によって語根の数が多少多くなる程度である。

この事は国語の場合にも言える事である。個人の語彙所有量は国語が有する全語彙量に決して一致するものではない。

에스ペラントのやさしさは幾人かの贖科学者達が考えているような限定された数の語彙にあるのではなく、またあり得べきもない。 에스ペラントのやさしさは、簡潔で理論的な文法構造や天才的な接字体系の中にあり、そしてまたそれを学び取った総ての人達がそれを異国のものとして感じるのではなく、自分達固有の言語として感じるといった事実の中にあるのである。

에스ペラントはその豊かな統一性を維持して来ただけではなく、強化さえして来ている。国際語を受け入れている人達は、自分達の国語の非理論的な言葉の活用をその中に取り入れようとしたり、国語の慣用語法やその他のその国独得の言葉の活用を取り入れてそれを汚染し、その統一性を害なわせるために努力して来たのではなく、反対に一つの共通語をもって理解し合うために統一性を維持し、強化しようと努めて来たのである。この心理状態、即ち言語の統一性を維持しようとする気持が、 에스ペラントは「方言に崩れ落ちてゆかざるを得ない」とか「崩壊していく」といった批判を退け、将来に向って発展し、成長していく基盤となっている。しかし、この現象は 에스ペラントにだけ本質的に存在するものではなく、それは他のあらゆる言語にも全く同じように見られるものである。どんな社会共同体や社会集団でさえ、共通語を

もちたいと願つており——この気持は前にも述べたように複数の要因によつて多岐に条件づけられてゐる——まさにこの事が言語の統一性を損なわずに維持させて來てゐるのである。この気持が諸々の分裂をもたらず要因によつてうちひしがれてしまつた時に、言語は統一性をもつたものとして存在しなくなる。色々な原因が基となつて——經濟的、政治的要因——複数の社会統一体の中にある統一言語共同体が崩壊するような事があれば、その社会統一体の言語は統一性を失つていく。しかし、國際的なコミュニケーションの媒体として役立てる目的で、自由意志により受け入れられた國際語には決して起り得ないことである。

エスペラントが實際に活用されてゐる分野の拡大やエスペラントを話す人達の人口の増加は、その人達の間にはけるあらゆる種類の國際的触れ合いの増加をもたらしたばかりではなく、結果として言語統一のすばらしい強化に貢献して來た。エスペラントの發展やその統一性の安定強化に貢献しつづけて來たのは、作家や詩人、科学者、ジャーナリスト、その他の人達といった國際語で著作活動を行つてゐる人達である。この事に更に重要な貢献をなして來たのは雄弁家や講演者であり、クラブや研究会等で、更には世界大会や國際會議で積極的にこの言語を使用してゐる人達であり、文通や友交的会話、そして個人の家庭にさえこの言葉を採り入れ、日常生活の中で使用してゐる人達である。國際語の發展は上から指図されて起つて來たものではなく、それを実際に使う人達である大衆の働きによつて起つて來たものである。文学國語が發展

して来ている道と 에스ペラント が發展して来ている道の間には、どのような原則的違いも存在しない。国際語は發展して来ている。そしてそれは統一性を強化させながら發展して来ている。贖科学者達が「子見した」まさにその反対の事が、ことこまかに起つて来たし、無学な者達が今日もまたあきもせず主張している事とまさに反対の事がことこまかに起つて来ている。

5、勢力

国際語はそれを満足する程度に十分知らなかったり、それを自分のものとして身につけていない人達には「不自然さ」をもっているかのように聞えてくる。しかしこの種の「不自然さ」というのはその言語を知らない人達によつて読まれたり、聞かれたりする場合、あらゆる言語について言える事である。オランダ語はドイツ人の耳には恐ろしく「粗野」に聞えてくるし、その逆もまた言える。各国の国語については、その事に少しも触れようとしないのに、事が国際語になると或る種の人達は、聞くにも忍びない自分達の考えを赤面もなしに平気で言うといふのはどういった神経の持ち主なのであるか。それ等の人達は自分達固有の文学国語さえ十分に身につけていないどころか、自分達の口から発する言葉が他人の耳にどのように粗野に聞えているのか、あるいは自分達の書く文章が他人の目にどのように粗野に映っているのかさえ意識する事も出来ないという事はとても興味ある事である。

言葉として特にぎこちない表現をもちいて、他人に「人間によって創られた」という臭いを感ぜさせたとすれば、国際語はあらゆる他の国語と同じように「人工的な臭いを隠せないものである。(110) 英語やフランス語、その他のあらゆる言語について述べる場合、それ等の言語に対して「人工的」「補助的」あるいは他のあらゆるこの種の形容詞をつけようとしてもしないのに、国際語となると意図的であれ、そうではなかったにしろ、あるいは無用な混乱や誤解を呼び起すためではないにしろ、なぜこれ等の形容詞をつけようとするのであろうか。

これ等の名称は、幅広い一般大衆社会の中での国際語の正常な広まりを妨げるといった混乱を生み出すだけである。他の面から見た場合、その言葉を学び始めている人達、あるいはそれをすでに使い始めている人達に於いてさえ、各国の国語と比較して 에스ペラント のもつ価値があたかも劣っているかのようなコンプレックスを創り出している。国際語のあらゆる使用者や特に総ての雄弁家は、この言葉が人間の有する最も高度な思考の表現手段になり得、それは相対的に完全無欠さを誇るものであるという深い認識と強い確信をもたなければならぬ。この驚く程すばらしい言語を完全にマスターしていく事は、その人自身の努力にかかわっており、その人の手の中でそれが威力ある言葉として、あるいは威力ある表現手段となり得るか、それと

もそれが単なる青ざめた、生気のない、色あせた、發育不全の言葉のままに終るのかどうかという事は、その人の努力のみにかかっている。

この事は国際語に対してだけ言える事ではない。それは各国の国語についてもまた同じように言える事である。一方—自分達固有の—国語はそれ程、学習したり、勉強したり、研究したり、磨きをかけたりまする事は必要ないのではないかと考える人達がいる。ではなぜ世界中のあらゆる学校で、彼等に幾年にも渡る集中的な教育を施しているのであるのか。なぜ長年に渡る教育の後、人々は自分達固有の文学国語を適度にうまく使いこなせるようになっていくのであろうか。

まさにその事は、国語がどんな自然現象でもなく、現在かあるいはかつての社会の産物に他ならぬからである。そしてその事は、自分の固有の国語さえ、自分のものとして身につけようと望むならば、人々が教育をうけて学び取らなければならなかったり、更に続けて研究しなければならぬといった法則や規則に国語が支配されているからである。

各国の国語と国際語の間には、實際どのような原則的相違も存在しない。前者と後者は同じ社会的推進者である人間の集団をもっている。前者の發展や後者の發展に対しては、諸々の要

素が影響力を及ぼしている。各国の国語や国際語は、ある程度まで自発的に創り出されているが、その他の部分は意識的に創られている。言語創造に於ける意識的参加がどれ程の大きさであるのかといった事は、原則的に重要ではない。だが意識の介入の度合いは、言語の発展を支配している法則を基盤とした意識的な創造がなされればなされる程、ますます申し分のない創造物と成り得るといった結論へと導く——実証的な——意味合いをもっている。この事から国際語は、日常に於ける言葉としてだけではなく、芸術的表現手段としてもまた多岐に渡って国語を凌ぐものである。

各国の国語と国際語の間には、一つの重要な相違、即ちそれ等が果す目的の相違がある。各国の国語は国家の枠内に於ける意志疎通と思考の限定された必要性を満す任務をもっており、一方国際語は各国の足かせといった考えから解放され、国土から国土へ、国家から国家へ、世界くまなく飛び交う事の出来る意志疎通と思考の媒体である。現在自分達の国語の学習に振り向けられている時間の四分の一を国際語の学習に捧げ、世界中の総ての学校で、大規模な形で、集合的に人々が教育をうけるようになれば、その時人類は偉大な精神的革命を享受するであろうし、そしてその時、国際語の実り豊かな、倫理上の、そして知性上の効力が十分に証明されるであろう。

(107) 共通計画言語については、

P. E. Stojan. Bibliografio de Internacia Lingvo, eldonita de Universala Esperanto-Asocio, Genève, 1929, E. Drezen. Historio de la Mondlingvo, Leipzig, 1931.

を参照の事

(108) 註(23)で引用した、マックス・ミュラーの書、三〇五ページ以後を参照の事

(109) 個人の中には自分達の方言や地方的話し言葉の世界から一步も出た事がないという人達がいる。これ等の人は国語の創造に参加していないし、参加する事も出来ない。もう一方の人達は、文学国語を自分達の言語として習得しており、方言や地方的話し言葉には無縁な人達がいる。従って、これ等の人は地域の住人ではあっても、地域や地方的言語共同体に組みこまれてはいない。

大部分の人達は——国によって多少の違いはあるが——これ等、両面をかねそなえた自己の社会的帰属を示威している。また相対的に数は少ないけれども、自分達の言語として実際に、国際語をうけ入れている第二の社会的帰属を示威している人達がいる。

(109) エスペラントは実際に必要とされるネオロギスモ(新語採用)によって絶えず豊かになつて来たし、更に豊潤さを増大させてきている。それを必要としているのは、自国の国語でさえ数百の語彙で満足している人達の層ではなく、思考容積が適切な言葉の創造を求めて止まない言語の活用者といった層である。

(110)、マックス・ミュラーは自分の書「言語学講義」の中で次のようにいつている。「ギリシヤ、ローマ、インド、フランス、スペイン……等の文学固有言語を我々は言語と通常呼んでいる。それは話し言葉のナチュラルな形としてよりはむしろ人工的なものとして考えられるものである。言語のナチュラルな生命は、方言の中に生きずいつている。」(四十九ページより)

第七章

言語と思考

言語はコミュニケーションの中心的手段としてのみあるのではない。それはまた思考の道具でもある。言語は現象の普遍化や分類化を可能ならしめている。物体や現象、行動といったものに名前をつける事は、細部に渡るまでその事を知る事を意味し、一つのシンボル——語彙——の中に特定の概念を統合する事を意味する。

概念はもちろん、絶対的真理ではない。普通、それは単なる相対的真理である。真理は特定の環境の下で、一定の条件下にあって、到達したその時代までの普遍的進化水準や社会水準の枠内でのみ真理である。世界の知識はわずかずつではあるが進歩向上しており、科学の分野の絶え間ない新しい発見は、古い知識の掘りや深まりに貢献している。

言語は発展し続けているだけでなく、言語の内容自身もまた時代を経るたび毎に変化してきている。同時代の同じ世代に於いてさえ、その内容は総ての個人に対して同一のものではない。ガリレオ以前に於ける「太陽」という語彙の内容は、彼の後の時代の内容とは別のもので

ある。物理学者が考えている「原子」という語彙の概念と一般の人達の概念とは別のものである。国際語を使用している人達の考えている「エスペラント」という語彙の意味と、ただそれを聞いた事があるだけの人達との間には大きな相違がある。従つて総ての言語は特定の時代の中で、総ての社会がもたらす総ての知識を映し出しているのである。しかし個人の言語の知識は——社会の知識、即ち共通の知識と比較して個人の知識が控え目であるのと同様に、全体と比較してみて控え目である。——社会の言語知識、即ち人間集団社会のもっている全体としての言語知識と決して同一ではないし、同一であり得べきもない。

総ての言語社会集団に共通して通常知られている語彙は、非常に数少ない。その他の語彙は特定の専門分野や特定の部門、特定の階級にのみ知られているものである。従つて多くの語彙の殆んどは、専門家達だけによつて知られている。しかし一般的に知られている語彙とか学者達や専門家達によつてのみ知られている語彙でさえ、各個人の総てが同一の量の知識を身につけているわけではない。この事に関して無限の多様性がある。言語共同体の構成員が数多くの人達から成りたつてるようにそれ程大きなものである。

知識の共通となる核は、総ての語彙の中に内含されている。太陽は熱を放射する光り輝く円形状の物体であり、朝方東より登り、夕方西へ沈んでいく。そしてそれは天にあって人間の目

で確認出来る最大の物体であるというように、即ち「太陽」という語彙を人々が使う場合、月とか星ではなく、太陽自身を頭に描くというように、それは人間がその物体を意識し始めた時から、まちがいに総ての時代に、総ての個人に対して共通する「太陽」という語彙の核となる内容である。同じようにこれ等の核となる共通の内容は他の総ての語彙の中にもある。そして語彙自身を知っている総ての人達はその内容を知っている。しかし、その核の外にある語彙の内容は、時代を経る毎に、社会集団毎に、そして個人毎に多様化している。

語彙の定義についての前に述べた例証を考慮してみただけでも、言語は思考をまちがいに表現し得ると主張する事が出来る。自己の得て来た——我々が見て来たように相対的な——知識を人間は言語の中に、或る種の方法で定着させ、具体化させている。この事が新しい心理的作用を思考として具体化さしたり、新しい結合を生み出したり、新しい知識に到達したりする事を可能ならしめており、このようにして到達不可能な絶対的真理に絶え間なく近づく事を可能ならしめている。

言語の手助けなしにも思考は可能であると考えている言語学者や哲学者がいる。その人達はその目的を遂げるために言語を用いずに色や音等を用いて自己の思考を表現している芸術家を例に挙げている。あるいは彼等自身、自己の労働を通して、明らかに自己の思考の働きを具現

化しているにもかかわらず、その目的のために言語を用いる事なく、たくさんの品物をほとんど機械的に造り出してゐる労働者や職人を例に挙げている。

しかしこれ等の例証は明確に的を得たものとは言えない。だが、言葉の助けなしに人々が知覚し得るといふ事は、注目に値する事である。愛情や憎しみ、悦び、哀しみ等を人々は言語の働きや解析もなしに知覚する事が出来る。画家や彫刻家、芸術家達が言語以外の他の方法でもって自己を表現しているのだとすれば、その感覚的分野の中で、それは彼等が非言語的表現手段を用いてゐるといふ事を意味している。しかし論理的思考の分野に於いても自分達特有の芸術的手段を用いて思考し得る能力をもつてゐるといふ意味ではない。或る品物を殆んど機械的に造り出すといった職人や労働者がいたとしても、彼等は長年の経験を積み重ねて熟練の域に到達したのであり、最初のころは明らかに言語の助けをかりる論理的思考を必要としたのである。論理的思考は言語を介してのみ可能であるといった主張と機械的動作や反復動作との間にはどれ程の矛盾もない。言語のみがその普遍化や分類化を介して思考の論理性を具体化したり、浮彫化さしたりする論理的言葉の合成を可能ならしめてゐる。論理的言葉、即ち思考の具体化は、新しい言葉を更に生み出していく、もう一つの基盤を形成してゐる。このようにして、言語は思考を助長し、思考は言語を前進させてきてゐるのである。

思考と言語はお互いに影響しあっている。物質生活の諸影響下にあつて、自ずと生れてくる思考が先に現れ、その後が続いて言語が生れて来る。この事は湧き出ずる思考が言語の中にある新しく、目的に叶った言葉を絶えず捜している事を意味している。言葉を捜すことによつて思考自身は、複数の新しい言葉をつくり出す労働の新しい可能性を得ている。お互いの影響や助勢の中で、思考と言語は成長を遂げていく。思考が言語の母であるとすれば、言語である娘は母の立役者ではなく、母にとつて欠くべからざるものである。別の表現をもつてすれば次のようになる。「我々の思考の豊かさは、我々の言語を豊かにし、我々の言語の豊かさは、思考の豊かさに貢献している。」

言語の豊かさは人間同士の意志疎通の観点からだけでなく、思考の観点から見ても重要である。言語が豊かであればある程、ますます思考の、目的に叶った言葉の、意志疎通の、そして他の人達への影響力の——雄弁学の観点より見て非常に意味のある——大きな可能性が生まれる。しかし、実際に言語の豊かさとは何なのであろうか。

普通人々は言語の中にある語彙が豊富であればある程、その言語が豊かであると考えている。確かに語彙の量は立派な尺度である。しかしそれは絶対唯一のものではない。

文明の發達がもたらした新しい環境の中にあつて、既に古びてしまつており、全く使用されていない多くの語彙がある事を先ず第一に思いおこしてみなければならぬ。それ等の語彙は大辞典と呼ばれる辞典の中によく見かけられるものであるが、それ等は総ての人達が既に忘れ去つてしまつた、知られてもいない、理解されもしない、言語の資産として評価し得ない無駄な裝飾でしかない。

一方、あらゆる国の國語の中にある規則の多くは、——今日よりも本質的に違つた条件の影響の下で、数千年の間創り出され、發展させられて来た——いく分硬直化しており、融通性を欠いている。だから自己の限定された枠内に言語を組み込もうとして、殆んど無理強いする形で思考と結びついている。

言語の豊かさは辞典の中に集録された全語彙量に左右されているのではなく、活用し得る応用可能な生きた語彙に左右されるのである。我々の思考や意志の表現にとって役立つ語彙だけが、眞の言語の豊かさとして評価され得るものである。

言葉のもつ融通性や柔軟性は、語彙の豊かさと同様に、言語の豊かさのより重要な要素でもある。或る言語が数十万の語彙をもつていたとしても、それ等の語彙が実際には使用不可能な

ものであるとすれば、全く無駄なものである。言語が細部に渡る文法形態を有していたとしても、その形態が思考の表現に役立つものではなく、思考のブレーキでさえあるとすれば、その文法形態は無駄なものである。

こういった規準によつて、言語の豊かさを判断するとすれば、国際語は今日に於ける最も豊かな言語であると明確にいいきる事が出来る。

国際語で文学や科学の分野の要求を満す著述をなし得るのだろうか。エスペラントは演説や講演、學術講演、討論の言語として役立ち得るのであるかといった質問を耳にする事がある。エスペラントは日常生活言語として確かに役立つが、より複雑な思考を表現するための適切な媒体ではないのではないかと考えている多くの人達が居る。

これ等の考えは全く誤つたものである。エスペラントの國際的性格は、總ての國語が内に持っているあらゆる特異な表現を、それに最もふさわしい表現でいい表す事が出来ることにある。この事はあらゆる國語よりも、この言語が實際にすばらしく豊かである事を意味している。文學國語でいい表す事の出来る總ての表現を國際語は最も適切な形で表現する事が出来る。一方、一つの國語の特異な表現は、他の國語でもつて、それにふさわしい表現をなし得ない場合がし

ばしばある。

二、三の例を紹介してみよう。

イタリア語には“*intascare*”という語彙がある。だが他の多くの国語の中に、このような語彙は見あたらない。だからこの言葉をいい表すのに「ポケットに手を入れる」という表現でいい表している。実際“*intascare*”は「ポケットに手を入れる」という意味より、それ以上の意味を内含している。同じような語彙は似かよった思想的ニアンスを表現するのに大変役立つにもかかわらず、イタリア語の中にも“*intascare*”と似た語彙を数多くもち合せていない。国際語は数多くのこれ等の語彙を自由に合成する事が出来、*surtabiligi*（お膳立てをする）*enšra-nligi*、（洋服ダンスにしまひ込む）*alposigi*、（ポケットから手を出す）等々といい表す事が出来る。国語にはこういった結びつきはないから、思考がそれだけ束縛され、拘束されたものとなる。人々はこれ等の思考を表現する場合、長い文章や多くの語彙を活用しなければならぬ。これ等の表現描写が思考の衝撃力を水泡に帰したり、弱化せしめたりしている事は明らかである。

多くの言語は幾つかの名詞から動詞を作り出す事が出来る。幾つかの言語では、*rego*（土）

という名詞から *regi* という動詞を作り出す事が出来るし、*esti rego* という形も作り出す事が出来る。二者の表現の間には明らかに大きな違いがある。前者は後者よりも動的である。

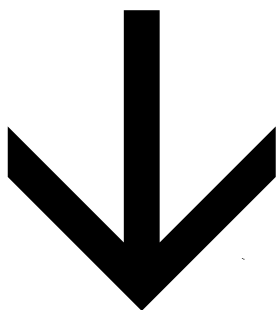
regi という語彙は「王として行動したり、ふるまう」という意味をもっており、一方 *esti rego* の方は純然たる王としての存在確認であり、静的な性質を表すものである。このようにして原則的には、名詞語根から同じように動詞を作り出す事が出来るのである。所が国語には膨大な数の名詞があるためにこの事が可能ではなくなっている。エスペラントでは平行して両者の表現をなし得るから、必然的に動的な、又は静的な二つの思考的ニアンスをもった表現描写をなす事が出来る。積極性を強調したいと願う時にはいつも *regi* (君臨する) *professori* (講義する) *advokati* (弁護する) *soldati* (軍人になる) といった動詞形を用いる。純然たる状態を強調したいのであれば静的表現を用いればよい。“*Li ĉiam profesoras*”と“*Li estas profesoro*”の間には大きな違いがある。この完全な自由——理論の法則によつてのみ限定される自由——は細かなニアンスをもった豊かな表現を可能ならしめているだけでなく、思考の新しい道を切り開くものである。

多くの言語では形容詞から動詞を形成する事が出来る。だが総ての言語がそうであるわけではない。またそれを可能ならしめている言語に於いても、規則が普遍性をもっていないから、限られた形容詞にだけしか応用出来ない。エスペラントの規則は普遍的であり、この分野に於

いても理論の必要条件によってのみ限定されたものとなっている。エスペラントでは“esti blanka”と言い表せるが“blanki”とも言える。これも前者が静的な表現であるのに対し、一方後者は「白さを印象ずける」「白さでもって人の心に衝撃を与える」といった意味をもっている。人々が自分の目の前にある真白い紙を見てこれを言い表すのに“La papero blankas”とこのはおかしい。しかし雪に覆われた山岳地帯でスキーを楽しんでいる時、自己の眼前に展開する銀色に輝く、純白の景色を言葉で表現したいとおもえば“nego blankas”と言える。このように簡潔で、短かくて、美しい、明瞭な表現をもつて表せば、雪の白さを表現し得るだけではなく、それは強烈に白さを印象ずける思考を表現する事が出来る。このようにして、国際語は *esti blanka, blanki, blankigi, blankigi, ……………* といったニアンスの豊富な表現をなすうる幅広い可能性を提供している。

細かく定義された語根や接字の自由な結合が生み出すエスペラントの語彙形成の原則は、新しい、非常に明瞭な表現創造に対する無限の可能性をもっている。

ie, ig, aj, ec, ul, mal, ge, dis, etc. といった接字は、強大な力をもっており、思考の整理を助けている。それは思考の不明瞭さを取り除き、概念の形成を容易にしている。だからこそ、エスペラントは汲みつくせない新しい言語の源泉であり、自己の表現媒体として言語を用いるあらゆる芸術分野の最も有益な道具でもある。その一つがこの書の第二部で述べる雄弁法である。



訳者あと書き

この書の冒頭に掲げた国連への提案は、CED（調査・資料センター）が一九七四年に発行したエスペラントの展望（著者、イヴォ・ラペンナー博士、九〇〇頁）からの抜粋である。その中には次のように書かれている。

「私は今、私のパートナー達の意見をうけ取った。まことに残念なことではあるが、諸々の理由があつて、貴方の提言を実現することは出来ない。」……国連への提案は、この手紙をもつて一応拒絶された事になっている。しかしその中で、著者は次のようにも述べている。『国連事務局が提案を拒絶した事は、どういった意味に於いても、それを無視したという意味では決してない。どういった国連加盟国であれ、その事を無視出来ないし、聡明な国連事務局は、提案に根ざした言語問題の解決をせまられるであらう。』

当然の事ではあるが、遠からず国連大学の枠内で、言語問題が浮び上るであらう。CEDの資料によれば、国際関係に於ける言語問題は、ますます混迷の度を深め、先鋭化して来ているとしている。中でも、「国際関係に於ける言語問題」と題するドキュメントA/11/5によれば、

国連、ユネスコ、その他の国際機関での言語問題は、ますます複雑な様相を呈して来ている事を示している。一九六九年二月発行の「世界の言語問題」という機関誌には、この問題についての膨大な研究論文が掲載されている。そしてそれは、次のように予測している。

“中国の国連加盟の問題が、解決されるであろう時点で、国連はまちがいになく 中国語を、作業言語として 採用するであろう。そうすれば 公用語と作業言語の間にある差別待遇がなくなるであろうが、おそらくは 他の国家や国家グループも、自己の固有言語に 同様の権利を要求するようになるであろう。”

そして それはCEDがなした他の多くの予測と同様に 的中した。一九七三年十二月十八日の決議案、A/RES/3189 をもって、国連総会は一九四五年のサンフランシスコからすでに公用語となっている中国語を、国連総会と国連の総ての委員会、安全保障理事会の作業言語となす事を決定した。同じ日の決議案、A/RES/3190 (XXVIII) をもって、国連総会はアラビア語を国連総会とその総ての委員会の公用語と作業言語にするという決定を行った。アラビア語の追加決定は、中国語の場合と違って、アラビア政府が、「最初の三ヶ年の間、決議案の実現のために、それに要する費用を総て負担する」という約束をとりつけた後に実現されたものであった。この三年間は、今後ますます増大していくであろう公用語や作業言語を抱え

た国連、ユネスコ、その他の国際機関だけでなく、現在の世界に於けるあらゆる言語問題を、まじめにとりあげて研究していかなかったとすれば、そして国際語が提供するあらゆる可能性をうけ入れて解決への道を見い出そうとしなければ、永遠に継続されていくものである。

米国は他の公用語国と共に長年の間、作業言語と公用語の増大に頑強に反対して来た。しかし最近になって、急に言語政策を変えて来ており、中国語やアラビア語の導入に全く難色を示さなくなった。国連での米国の代表団が発行する機関誌（一九七三年、十二月十八日発行、UN—132）によれば、第五委員会で米国の代表団は次のように言っている。「アラビア政府はアラビア語の使用に関する一切の費用を支払う事に同意したのであるから、米国はアラビア語に好意的な決議案を全面的に支持する。」彼はまた次のように強調している。「公用語と作業言語の追加は、幾可学的な数字にも達する膨大な出費をよぎなくされるであろう。」そして、すぐに次のようにつけ加えている。「最も正当な処置としては、総ての加盟国が英語を含めて、自分達が使いたいと願う、言語に関する一切の費用を、自分自身で支払う事であろう。」

英国、デンマーク、アイルランドのEEC加盟の後、ヨーロッパでも言語問題が複雑化して来ている。現在では、英語、デンマーク語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、オランダ語

のみが、EECの作業言語である。フランスやベルギー、ルクセンブルグはフランス語を採用しているし、一方英国やアイルランドは、英語を使っているからそう大きな問題はない。しかし、その他の国には多くの言語があり、EECの中では、総ての言語が同等の権利を有しており、複雑に言語問題がからみ合っている。

最近では幅広い民衆の中に、言語問題に関する興味が増大して来ており、言語問題に関する論文が数多く見られる。多くの幅広い読者を有するまじめな機関誌が、この問題に多くのページをさいて来ている。中でも、一九七四年、四月二十六日付、ロンドン発行の「ザ・フィナンシャルタイムズ」に発表された国連に於ける言語問題を取り扱った長文の記事、ヨーロッパ共同体委員会の名の下に、ロンドン、パリ、ローマ、ボン、ハーグ、ブリュッセル、ワシントンで発行された。「ユーロピアン・コミュニティ」の二月号に掲載された「ヨーロッパの言語問題」と題する（国際語が提供する言語問題の解決をおり込んだ）CEDの論文、同じ「ユーロピアン・コミュニティ」四月号に掲載された「話し言葉」という学校に於ける外国語教育の貧しい成果を取り扱った論文、等がある。

近い将来、国連大学が世界のこれ等の言語問題を取りあげ、主導性をもってこの問題の解決に取り組み、世界中の学校で、人々が大規模な形で、集合的に国際語の教育を受けるようになる。

れば、著者が述べているように、人類は偉大な精神的革命を享受するであろう」、そしてその時、国際語の実り豊かな、倫理上の、そして知性上の効力が十分に発揮される事でありましょう。博士は長年、UEAの代表として、ユネスコの討議に参加しておられたが、一九七四年八月、「人類が一つの言語を受け入れなければならない日は、もう十年という単位ではなく、あと数年という単位である。現実世界の物理的条件は、一つの言語への道を指向している。」という言葉を残して、UEAを退りぞかれ、米国の若い大学教授、ハンフリー・トンキン博士に道をたくされた。博士は現在、ロンドン大学で教職に就かれています。一方、ユネスコ傘下の国際シンポジウムに参加されておられると同時に、教育者の国際会議を主催しておられる。



明日への雄弁 (上)

定価 九五〇円

昭和52年9月1日 第1刷発行

著者 イヴォ・ラベンナー博士
翻訳者 小島輝久

発行所 有限会社 国際語現代研究所

神奈川県横浜市磯子区

洋光台五―六一三―一〇四

郵便番号 二三五

印刷所 有限会社みろく堂美術印刷

※落丁本・乱丁本はおとりかえしませぬ。

PRINTED IN JAPAN

© Prof. D-ro Ivo Lapenna